南島原市文化財調査報告書　第５集

亀の首遺跡

― 布津北部地区県営畑地帯総合整備事業に伴う調査 ―

２０１１

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

この度、平成20年度に発掘調査を実施した亀の首遺跡の文化財調査報告書を刊行する運びとなりました。

調査は布津北部地区県営畑地帯総合整備事業に伴い長崎県島原振興局より委託を受けたもので、工事との調整を重ねた結果、遺跡の現地保存が最終的に困難であった範囲の記録保存措置として実施したものです。

調査の結果、縄文時代早期、縄文時代後晩期～弥生時代前期、弥生時代中期～古代、中近世など実に多様な時代の遺物あるいは遺構が発見されました。時代によって遺物の出土量に多寡はありますが、この地において連綿と人々の営みが繰り返されたことが理解されます。

とりわけ多く出土したのは、縄文時代から弥生時代へと移行する時期の資料です。土器や石器といった遺物の内容からは、遺跡周辺で営まれた生活の一端を窺い知ることができます。時期を概ね同じくする市内の代表遺跡としては、「山ノ寺式土器」の標識名となっている山ノ寺梶木遺跡、砂防事業によって発見された権現脇遺跡などが広く知られています。単一遺跡の評価のみならず、これら関連の深い調査成果と併せて検討を進めることで、往時の地域社会像を紐解いていく助けとなるでしょう。また地域内での整理を踏まえつつ、他地域との比較を深める事で、それはより鮮明なものとなる筈です。ささやかながら本書が歴史研究の一助、或いは様々な地域・分野においてご活用頂けることを願ってやみません。

末筆ではございますが、可能な限り遺跡の現地保存にご理解を頂き、調査の円滑な実施にご協力を賜った工事関係者の皆様、現地調査および整理作業を通じて、ご協力とご指導を賜った関係各位、作業に従事して頂いた皆様に厚く御礼を申し上げるとともに、皆様の益々のご健勝を祈念申し上げ、発刊のご挨拶とさせて頂きます。

平成23年３月25日

南島原市教育委員会
教育長　定方　郁夫

亀の首遺跡遠景

巻頭図版 2

調査区全景（右下が北）

調査区土層

刻目突帯文期の土器

線刻のある土器・土製品

巻頭図版 4

出土石器

龍泉窯系青磁碗

例　　言

1．本書は布津北部地区県営畑地帯総合整備事業に伴い実施した亀の首遺跡の発掘調査報告である。

2．本調査および本書の作成は、長崎県島原振興局からの委託により実施したものである。

3．調査は旧布津町教育委員会及び南島原市教育委員会が担当した。調査期間は次のとおりである。

範囲確認調査　平成17年11月21日　～　平成17年11月29日

本　調　査　平成20年８月20日　～　平成20年10月17日

4．調査の体制は次のとおりである。

（範囲確認調査・平成17年度）

調査主体	布津町教育委員会	教育長	池田安孝
	同	教育次長	隈部　恵（現 南島原市企画振興課長）
調査担当	同	生涯学習係	伊藤健司（現 南島原市教育委員会文化財課）

（本調査・平成20年度）

調査主体	南島原市教育委員会	教育長	菅　弘賢
	同	教育次長	井口敬次
	同	文化財課長	但馬健剛
調査担当	同	文化財課主査	伊藤健司

（整理調査・平成22年度）

調査主体	南島原市教育委員会	教育長	菅　弘賢（～平成22年５月）
			定方郁夫（平成22年７月～）
	同	教育次長	井口敬次
	同	文化財課長	松本慎二
調査担当	同	文化財課主査	伊藤健司

5．本調査時における遺構平面図作成は株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。空中写真撮影業務は有限会社スカイサーベイ九州に委託した。その他の測量、写真撮影は発掘作業員の協力を得て伊藤が行った。

6．整理作業は南島原市深江埋蔵文化財整理室で実施した。

出土遺物の洗浄は壹岐美由紀、小林さおり、下田千里、濵﨑昭、平坂ハスエ、本多輝義、水田悠平が行った。注記は壹岐、小林、下田が行った。遺物の接合・実測・拓本は壹岐、小林、伊藤が行った。トレースは主に小林が行った。出土遺物の撮影は伊藤が行った。

7．本書に係る記録写真、図面類および出土遺物は南島原市深江埋蔵文化財整理室に保管している。

8．調査に用いた方位は真北である。

9．遺跡からは弥生時代早期併行と考えられる遺物が出土したが、本書では遺物の帰属時期を示す用語として「弥生時代早期」は使用していない。地域における編年の課題と、「弥生時代早期」という用語を北部九州周辺地域に限定して使用すべきとの意見を考慮したためである。そのため「縄文時代晩期～弥生時代前期」などの包括的な年代表記とした。関連し、弥生時代に属する可能性のある煮沸土器も「深鉢」に統一して表記した。

10．石器素材にみられる「サヌカイト」質の安山岩について、讃岐地方産出という用語本来の定義を踏まえ、本書では「玄武岩」に含めた。

11．本書の執筆および編集は伊藤による。

目　　次

発刊にあたって
巻頭図版
例　　言

本文目次

第１章　調査に至る経緯……1
第２章　遺跡の地理・歴史環境……2
第３章　範囲確認調査……6
第４章　本 調 査……10
　第１節　調査の方法と経過……10
　第２節　土　　層……10
　第３節　遺　　構……14
第５章　包含層出土遺物……24
　第１節　概　　要……24
　第２節　土器・土製品……24
　　Ⅳ層出土の土器・土製品……25
　　Ⅲ層出土の土器・土製品……39
　第３節　石器・石製品……48
　　Ⅳ層出土の石器・石製品……48
　　Ⅲ層出土の石器・石製品……56
　第４節　金属製品……62
第６章　総　　括……63

図　　版
報告書抄録

挿図目次

第１章　第１図　亀の首遺跡の位置……1
第２章　第２図　遺跡周辺航空写真……3
　　第３図　周辺地形図……3
　　第４図　周辺遺跡および市内主要遺跡分布図……4
第３章　第５図　範囲確認調査・トレンチ配置図……6
　　第６図　基本土層図……6
　　第７図　範囲確認調査の出土遺物……8
第４章　第８図　調査区位置図……10
　　第９図　グリッド配置図……11
　　第10図　調査区土層図〈北東〉……12
　　第11図　調査区土層図〈南東〉……13
　　第12図　集石遺構……14
　　第13図　Ⅳ層上面遺構配置図……15
　　第14図　SK-01……16
　　第15図　SK-01出土遺物……16
　　第16図　SK-02……17
　　第17図　SK-02出土遺物……17
　　第18図　SR-01……18

第19図　SR-01出土遺物 ……18
第20図　SD-01出土遺物 ……19
第21図　SX-01・02 ……20
第22図　SX-01出土遺物 ……20
第23図　SX-03 ……21
第24図　SX-03出土遺物 ……21
第25図　ピット内出土遺物……22
第26図　Ⅳ層出土土器・土製品①……26
第27図　Ⅳ層出土土器・土製品②……27
第28図　Ⅳ層出土土器・土製品③……28
第29図　Ⅳ層出土土器・土製品④……29
第30図　Ⅳ層出土土器・土製品⑤……31
第31図　Ⅳ層出土土器・土製品⑥……32
第32図　Ⅳ層出土土器・土製品⑦……33
第33図　Ⅳ層出土土器・土製品⑧……34
第34図　Ⅳ層出土土器・土製品⑨……35
第35図　Ⅳ層出土土器・土製品⑩……36
第36図　Ⅲ層出土土器・土製品①……39
第37図　Ⅲ層出土土器・土製品②……40
第38図　Ⅲ層出土土器・土製品③……41
第39図　Ⅲ層出土土器・土製品④……42
第40図　Ⅲ層出土土器・土製品⑤……43
第41図　Ⅲ層出土土器・土製品⑥……44
第42図　Ⅳ層出土石器・石製品①……49
第43図　Ⅳ層出土石器・石製品②……51
第44図　Ⅳ層出土石器・石製品③……52
第45図　Ⅳ層出土石器・石製品④……53
第46図　Ⅳ層出土石器・石製品⑤……54
第47図　Ⅲ層出土石器・石製品①……56
第48図　Ⅲ層出土石器・石製品②……57
第49図　Ⅲ層出土石器・石製品③……58
第50図　Ⅲ層出土石器・石製品④……59
第51図　Ⅲ層出土金属製品……62

表　目　次

第２章　表１　周辺遺跡および市内主要遺跡一覧表……４
第３章　表２　範囲確認調査出土遺物集計表……７
表３　範囲確認調査出土遺物観察表（土器・土製品）……９
表４　範囲確認調査出土遺物観察表（石器）……９
第４章　表５　SK-01出土遺物観察表（土器）……16
表６　SK-02出土遺物観察表（石器）……17
表７　SK-02出土遺物観察表（土器）……17
表８　SR-01出土遺物観察表（土器）……18
表９　SD-01出土遺物観察表（土器）……19
表10　SD-01出土遺物観察表（石器）……19
表11　SX-01出土遺物観察表（土器）……20
表12　SX-03出土遺物観察表（土器）……21
表13　ピット内出土遺物観察表（石器）……22

表14　ピット内出土遺物観察表（土器）……23
第５章　表15　包含層出土遺物集計表……24
表16　包含層出土土器・土製品内訳表……25
表17　Ⅳ層出土土器・土製品観察表……36～39
表18　Ⅲ層出土土器・土製品観察表……46～47
表19　包含層出土石器・石製品内訳表……48
表20　Ⅳ層出土石器・石製品観察表……55
表21　Ⅲ層出土石器・石製品観察表……61
表22　Ⅲ層出土金属類内訳表……62
表23　Ⅲ層出土金属製品観察表……62
第６章　表24　口縁部刻目・刻目突帯の属性（Ⅳ層）……64
表25　口縁部刻目・刻目突帯の属性（Ⅲ層）……64

図版目次

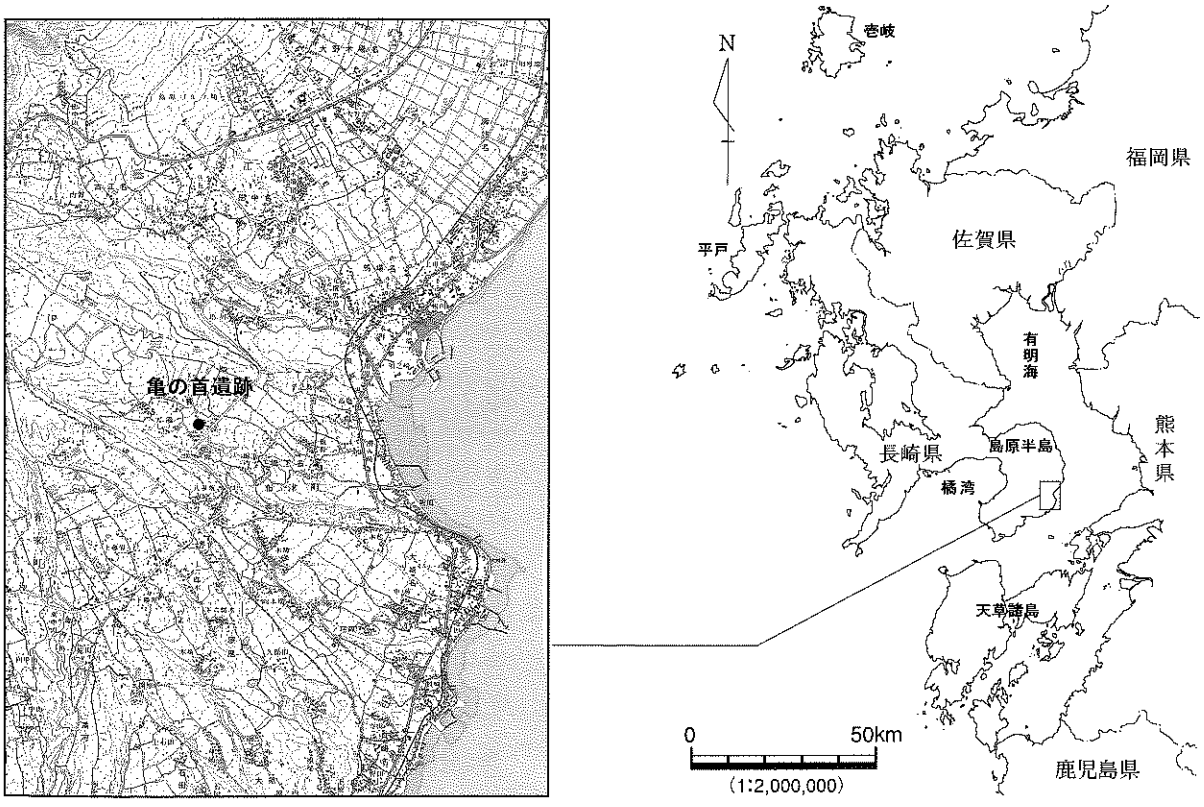
巻頭図版１　亀の首遺跡遠景
巻頭図版２　上：調査区全景（右下が北）／下：調査区土層
巻頭図版３　上：刻目突帯文期の土器／下：線刻のある土器・土製品
巻頭図版４　上：出土石器／下：龍泉窯系青磁碗

図版１　調査前／表土剥ぎ／調査杭設置作業／作業風景／遺物出土状況（押型文土器）
遺物出土状況（壷）／遺物出土状況（磨製石斧）／遺物出土状況（土製品）……69
図版２　主な遺構配置（右下が北）／SK-01　南より／SK-02・SX-03（奥）　南より
SR-01・SD-03（右奥）　北より／SD-02　北東より ……70
図版３　SX-01（手前）・SX-02（奥）　北より／自然礫の確認（サブトレンチ）
集石遺構　北西より／測量作業風景／現地調査に参加して頂いた方々……71
図版４　範囲確認調査出土遺物……72
図版５　遺構内出土遺物①……73
図版６　遺構内出土遺物②……74
図版７　Ⅳ層出土土器・土製品①……75
図版８　Ⅳ層出土土器・土製品②……76
図版９　Ⅳ層出土土器・土製品③……77
図版10　Ⅳ層出土土器・土製品④……78
図版11　Ⅳ層出土土器・土製品⑤……79
図版12　Ⅳ層出土土器・土製品⑥……80
図版13　Ⅳ層出土土器・土製品⑦……81
図版14　Ⅳ層出土土器・土製品⑧……82
図版15　Ⅳ層出土土器・土製品⑨／Ⅲ層出土土器・土製品①……83
図版16　Ⅲ層出土土器・土製品②……84
図版17　Ⅲ層出土土器・土製品③……85
図版18　Ⅲ層出土土器・土製品④……86
図版19　Ⅳ層出土石器・石製品①……87
図版20　Ⅳ層出土石器・石製品②……88
図版21　Ⅳ層出土石器・石製品③……89
図版22　Ⅲ層出土石器・石製品①……90
図版23　Ⅲ層出土石器・石製品②……91
図版24　Ⅲ層出土石器・石製品③／Ⅲ層出土鉄製品／整理作業風景……92

第１章　調査に至る経緯（第１図）

平成17年度、旧布津町（平成18年３月31日合併により南島原市）の経済課より同町教育委員会に対して、周知の亀の首遺跡および彦原遺跡の一部と重複する天ケ瀬地区において、既に実施中であった布津北部地区県営畑地帯総合整備事業への追加採択による農地改良事業実施の地元要望があるため、遺跡範囲確認調査を実施してほしいとの協議があった。これを受け、平成17年11月21日～11月29日の期間に布津町教育委員会が主体となり範囲確認調査を実施した。亀の首遺跡においては、縄文時代晩期～弥生時代前期頃を主とする良好な遺物包含層が一部の調査坑で認められた為、周辺範囲の3,000㎡余りについては、工事による影響が避けられない場合は本調査が必要であるとした。なお同時期に確認調査を実施した彦原遺跡では、遺構や遺物包含層が認められなかったため慎重工事の取り扱いとしている。

その後、当該地区の追加採択がなされ、平成20年度に亀の首遺跡の本調査対象範囲を含む14工区の施工が計画されることとなった。実施に至る間、事業主体である長崎県島原振興局土地改良課（現農村整備課）と確認調査の成果を踏まえて協議を重ねた。本調査対象とした範囲の大部分については、もともと遺跡への到達深度が深いこともあり、圃場計画高の一部調整によって現地保存を図ることが可能となった。しかし、新設が計画されていた排水路と耕作用道路については遺跡への影響が避けられず、設計の変更も困難であるとされたため、該当部分の約500㎡に対して南島原市教育委員会が主体となり記録保存のための本調査を実施することとなった。本調査は平成20年８月20日～10月17日にかけて実施した。



第１図　亀の首遺跡の位置

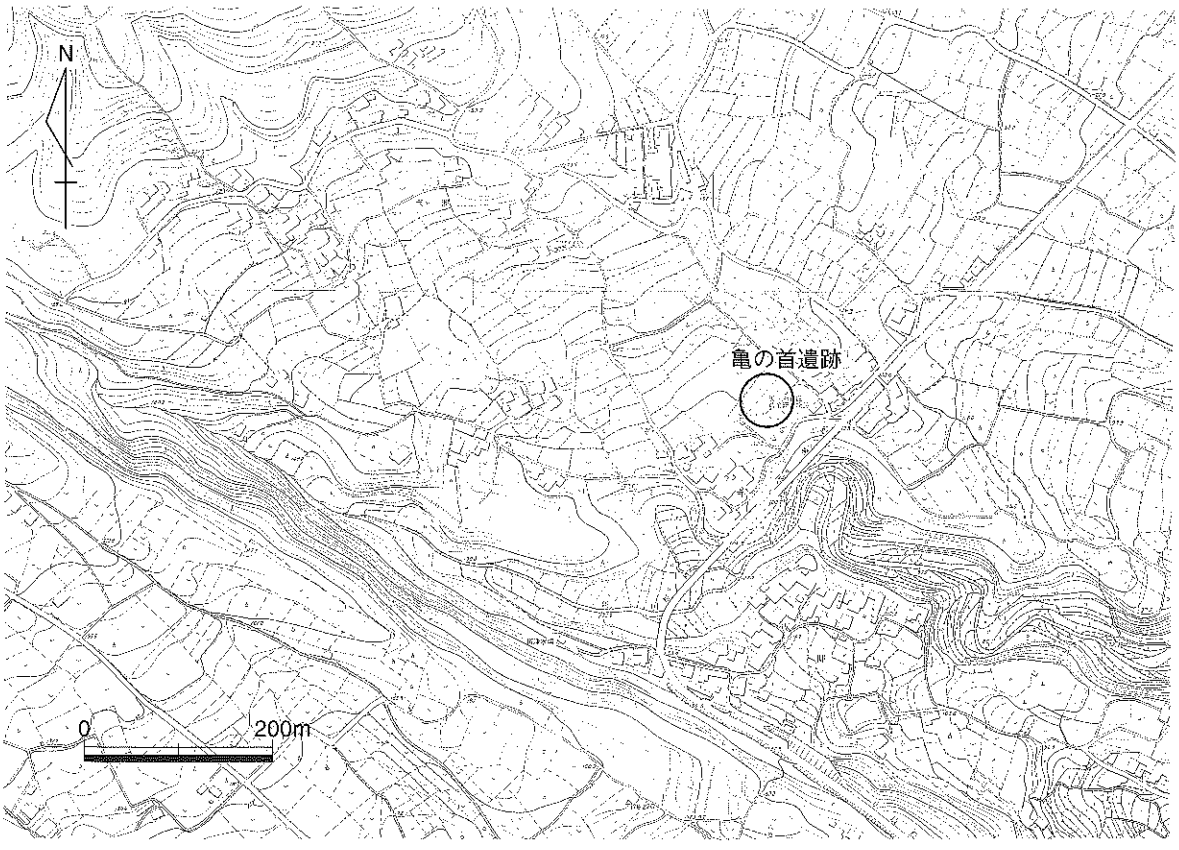
第２章　遺跡の地理・歴史環境（第２～４図、表１）

今回調査を実施した亀の首遺跡は、行政区としては長崎県南島原市布津町にあり、県南東の島原半島東部に位置する。周辺状況を少し広域的に見ておきたい。亀の首遺跡のある島原半島は、中央付近に位置する普賢岳（1,359m）・平成新山（1,483m）などを頂点とする南北約40km、東西約15kmの「胃袋状」などと称される半島である。平成新山は名の示す通り、平成における雲仙普賢岳の噴火活動により形成されたものであり、県内の最高峰である。活火山に由来する特徴的な地形・地質は半島の随所でみられ、2009年には島原半島全体が、洞爺湖有珠山（北海道）および糸魚川（新潟県）とともに、世界ジオパークの国内初認定を受けている。半島の周囲は諫早湾、有明海、橘湾などの海に囲まれており、北西部の愛野地峡によって県央の諫早市へと陸路で繋がる。こうした地形環境の制約もあり平野部はあまり発達せず、特に半島西部においては急峻な地形が沿岸部まで迫る箇所が多い。有明海に面する半島東部は相対的になだらかな地形であり、調査地の布津町から同市西有家町付近までは低丘陵台地が連続して展開している。半島全体を通じて農業が主産業であるが、この一帯においては葉タバコの栽培が特に盛んに行われている。今回の調査も、葉タバコ栽培を主とする農地の改良に伴って実施したものである。市内には180ほどの遺跡が知られるが、これらの地域とほぼ重複する形で遺跡の密度が高くなっている。時代別では縄文時代および弥生時代の遺跡が多い。

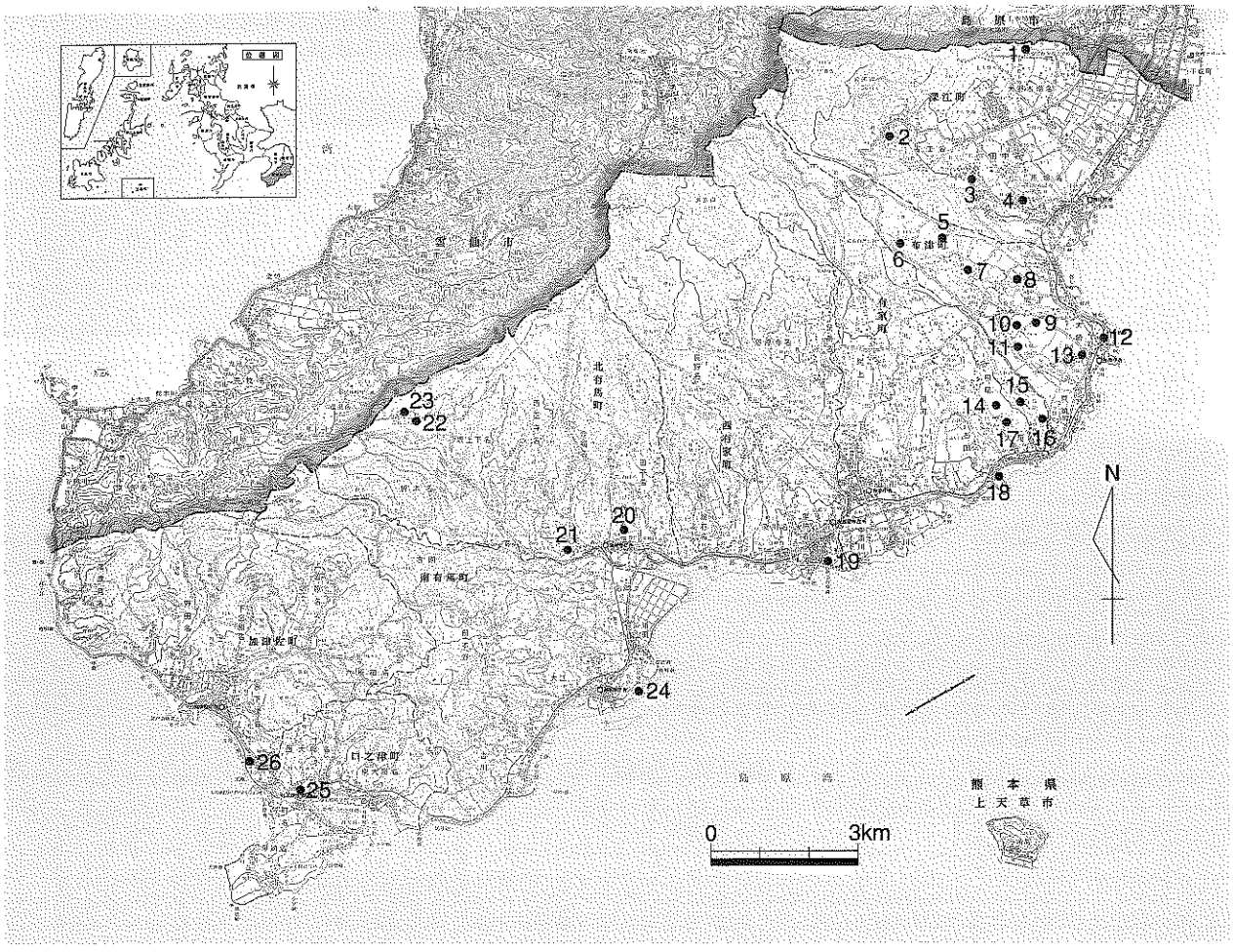
亀の首遺跡であるが、雲仙山系の野岳より派生した丘陵上に立地しており標高は140mほどである。遺跡の南方300m程の距離には、北方の千々石断層とともに雲仙地溝帯を形成する布津断層が東西に走っており、遺跡側が相対的に低くなっている。遺跡と断層の間は有明海へ注ぐ新川の上流域であり、川を基底とした狭小な谷地形が形成されている。

次に周辺遺跡、市内の関連遺跡および主要遺跡などを簡単に見ておきたい。調査においては縄文時代早期の押型文土器が若干出土したが、同じ早期の周辺遺跡としては大崎鼻遺跡、下末宝遺跡などがある。後述するが、亀の首遺跡の主たる時期は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてである。当該期における市内の代表的な遺跡としては山ノ寺梶木遺跡、権現脇遺跡、原山支石墓群などが挙げられる。前二者は布津町の北方に隣接する深江町にあるもので（注１）、距離的にもそう遠くない。とりわけ山ノ寺梶木遺跡は、直線距離で北北西に約３kmと程近い場所にある。「山ノ寺式」土器の標識名となった遺跡であり、学史的にも重要な遺跡である。昭和30年代の調査においては、合口甕棺、土製紡錘車、敷石住居跡、石斧などの石器類、組織痕土器、籾痕土器などが発見されている。権現脇遺跡は、前述した普賢岳の平成噴火後における水無川流域防災事業に伴って発見された遺跡である。包含層出土資料が中心ながら、十数万点に及ぶ膨大な量の遺物が出土しており、該期における土器形態のバリエーション、石器組成に見る生業形態や石材利用の在り方をはじめ、多くの知見がもたらされている。目下のところ、当地域における基準資料として位置付けられるものである（注２）。また遺跡からは、火砕サージなど火山活動の痕跡も発見されており、地質学や火山学の分野に対しても成果を提供している。なお両遺跡は、いずれも標高が200m台と亀の首遺跡より高所に位置している。深江町は土地の大部分が扇状地形によって占められ、このことが遺跡の立地にも制約を与えているようである（注３）。原山支石墓群は北有馬町に所在し、標高250m程の台地上に立地する。本来は３群からなる遺跡だが、原山第１遺跡は戦後の開墾時にほぼ消滅したとされる。第２支石墓群および第３支石墓群からは60基程の支石墓が発見されており、国史跡に指定されている。埋葬施設の形態は石棺、甕棺、土坑など様々である。

第２図　遺跡周辺航空写真



第３図　周辺地形図（Ｓ＝１/8,000）



第４図　周辺遺跡および市内主要遺跡分布図（Ｓ＝１/150,000）

表１　周辺遺跡および市内主要遺跡一覧表

番号	遺跡名称	所在地	種別	立地	時代	備考
1	権現脇遺跡	深江町大野木場名	遺物包含地	丘陵	縄・弥	
2	山ノ寺梶木遺跡	深江町田中名字山寺	遺物包含地	丘陵	縄・弥	
3	下末宝遺跡	深江町古江名下末宝	遺物包含地	丘陵	縄文	
4	上畦津遺跡	深江町田中名上畦津、西畦津	遺物包含地	台地	縄・弥	
5	鬼の岩屋古墳(天ヶ瀬古墳)	布津町坂下名西天ヶ瀬	古墳	台地	古墳	
6	彦原遺跡	布津町坂下名天ケ瀬	墳墓	丘陵	縄文	
7	**亀の首遺跡**	**布津町坂下名亀之首**	**遺物包含地**	**丘陵**	**縄・弥・中**	
8	飯野遺跡	布津町坂下名飯野	遺物包含地・墳墓	丘陵	縄・弥	
9	三本松遺跡	布津町坂下名三本松	遺物包含地	台地	縄・弥	
10	木場原遺跡	布津町坂下名木場	遺物包含地・墳墓	台地	弥生	
11	木場製鉄遺跡	布津町坂下名木場	製鉄跡	台地	近世	
12	大崎鼻遺跡	布津町大崎名金比羅神社付近	遺物包含地	海岸部	縄文	
13	布津町キリシタン墓碑群	布津町大崎名中通	キリシタン墓碑	丘陵	近世	県史跡
14	通野遺跡	有家町大苑名	遺物包含地	扇状台地	縄・弥	
15	高原遺跡	有家町原尾名高原	遺物包含地	扇状台地	弥・古	
16	大平古墳	有家町原尾名大平・下大久保	古墳	扇状台地	古墳	
17	大苑遺跡	有家町大苑名大苑	遺物包含地(製鉄跡)	扇状台地	縄・弥・中・近	
18	堂崎遺跡	有家町石田名	遺物包含地	海底	縄文	
19	吉利支丹墓碑	西有家町須川名松原	キリシタン墓碑	扇状地	近世	国史跡
20	日野江城跡	北有馬町大字谷川名	城跡	丘陵	中世	国史跡
21	今福遺跡	北有馬町今福名今福	遺物包含地	平地	弥・中	
22	原山支石墓群(第３遺跡)	北有馬町坂上下名字原ノ尻河	墳墓	台地	縄文	国史跡
23	原山支石墓群(第２遺跡)	北有馬町坂上下名字新田	墳墓	台地	縄文	国史跡
24	原城跡	南有馬町大江名／浦田名	城跡	台地	中・近	国史跡
25	南蛮船来航の地	口之津町西大屋名字唐人町	史跡	平地	中世	県史跡
26	永瀬貝塚	加津佐町水月名永瀬	遺物包含地	丘陵	縄・弥	

弥生時代の主な周辺遺跡としては木場原遺跡が挙げられる。弥生時代中期頃の小児用甕棺などが発見されており、鋤先状口縁の土器など北部九州地域からの情報伝播がうかがえる。

古墳時代から古代にかけての遺跡は市内全体でもあまり多くなく（注4）、古墳自体となると、なお少ない。亀の首遺跡に程近い天ケ瀬古墳は、古墳時代終末期頃のものと考えられる小規模円墳である。横穴式石室が開口しており、盛土の流出により天井石が露出しているが、市内において古墳としての姿を視認できるほぼ唯一の例であり、市史跡に指定されている。

中世から近世前半にかけての大きな動きとしては肥前有馬氏の盛衰、口之津への南蛮船来航、島原天草一揆などがある。肥前有馬氏の起こりについては諸説あり、鎌倉期に藤原経澄が常陸より地頭職として補任されたとする説、在地開発領主の発展説、起こりを南北朝に求める説などがある。有馬氏代々の居城は日野江城であり、城跡は国史跡に指定されている。また関連の出城跡も市内には点在する。16世紀後半には有馬義貞の求めにより島原半島でのカトリック布教が開始され、口之津がポルトガル船の入港地となる。1580年には晴信が受洗し、ドン・プロタジオを名乗るようになる。遣欧少年使節団は、晴信がカトリックを厚く庇護した時代の象徴的事業と言えよう。カトリックの定着ぶりをよく示す文化財としてキリシタン墓碑がある。無紋無銘のものまで含めると市内には100基余りが点在する。分布としては有家および西有家、北有馬、加津佐などに相対的に多い。有家、北有馬、加津佐には、コレジヨやセミナリヨが設置されたと伝えられており、関連性があるのかも知れない。中には年号の刻まれたものもあり、それらはいずれも慶長期のものである。亀の首遺跡の近辺としては県史跡の布津町キリシタン墓碑群がある。国史跡の原城跡は寛永十四年（1637）から翌年に起こった島原天草一揆の主戦場として広く知られる。発掘調査では激しい戦闘と徹底した戦後処理を示すように、夥しい数の人骨、石垣の破却、砲弾・銃弾などに加え、一揆軍が身につけていたキリシタン関係遺物も多く発見されている。原城の築城時期については、従前より15世紀末の有馬貴純の治世下とされる向きが強かったが、少なくとも総石垣を備えた現在に見る本丸跡の姿については、慶長期の所作によることが石垣形態、出土陶磁器、文献などの面から明らかとなっている。

注1）平成18年3月31日、島原半島東南部の8自治体（いずれも南高来郡、北より順に深江町・布津町・有家町・西有家町・北有馬町・南有馬町・口之津町・加津佐町）合併により南島原市が発足している。ここで言う「町」とは旧町名であるとともに、現在は市内における地区の大区分の単位として使用されている用語である。

注2）「山ノ寺式土器」の標識名である山ノ寺梶木遺跡が著名だが、資料が各地に分散しており活用面での課題が多い。

注3）本多編 2006　第2節「歴史的環境」

注4）近年、有家町の土地改良事業に伴って良好な資料が出土している。現在、整理作業中。

＜参考文献＞

高野晋司編 1981『国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書』北有馬町教育委員会

外山幹夫 1998「史跡日野江城跡の概要」木村岳士編『日野江城跡』北有馬町文化財調査報告書第2集　北有馬町教育委員会

長崎県教育委員会編 1994『長崎県遺跡地図』長崎県文化財調査報告書第111集

中村質 1996「原城跡の概要」　松本慎二編『原城跡』南有馬町文化財調査報告書第2集　南有馬町教育委員会

長崎県教育委員会編 1997『原始古代の長崎県』資料編Ⅱ

土橋啓介編 2001『大崎鼻遺跡』布津町文化財調査報告書第1集　布津町教育委員会

本多和典編 2005『下末宝遺跡・上畔津遺跡』深江町文化財調査報告書第1集　深江町教育委員会

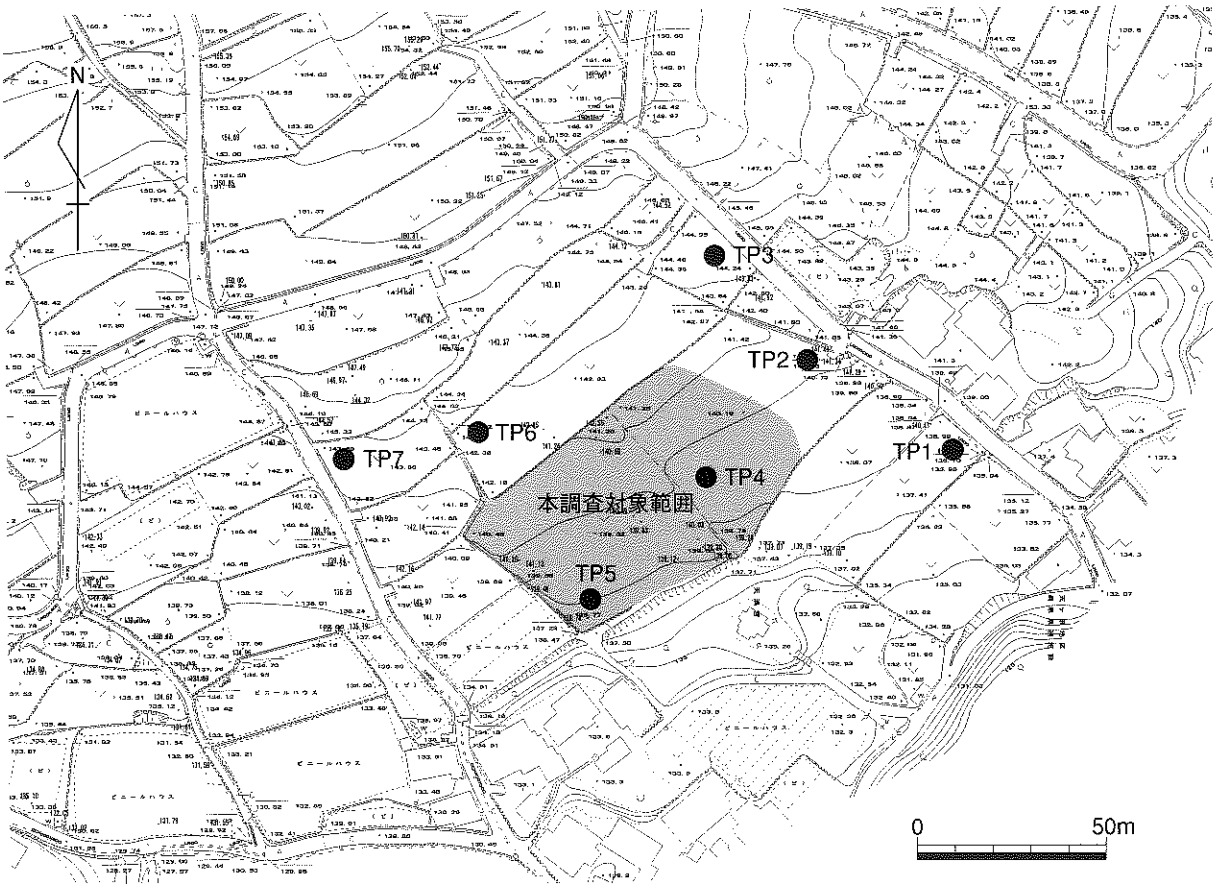
本多和典編 2006『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第2集　深江町教育委員会

本多和典編 2007『権現脇遺跡』赤松谷川1号床固工工事に伴う発掘調査　南島原市文化財調査報告書第1集　南島原市教育委員会

伊藤健司編 2010『原城跡Ⅳ』南島原市文化財調査報告書第4集　南島原市教育委員会

第３章　範囲確認調査（第５～７図、表２～４、図版４）

調査は平成17年11月21日～11月29日に実施した。事業の追加採択が検討されていた区域と亀の首遺跡の周知範囲の重複部分、およびその周辺に２ｍ×２ｍのトレンチを７箇所設定し（第５図）、人力掘削による遺構及び遺物の確認を行った。いずれのトレンチにおいても遺構は確認されなかった。TP４・TP５において、主に縄文時代早期、縄文時代晩期～弥生時代前期頃の遺物を包含する層を確認した。



第５図　範囲確認調査・トレンチ配置図（Ｓ＝１/2,000）

基本層序（第６図）

調査地付近の基本層序は第６図のとおりである。Ⅰ層が表土、Ⅱ層が耕作基盤土に相当し、その下位にあるⅢ層とⅣ層が遺物包含層をなす。Ⅴ層からⅧ層に至るまでは無遺物層である。この層序は、遺物包含層を確認したTP４およびTP５の地点を基本とするものである。TP３とTP７では表土直下で地山のⅧ層を検出し、TP６ではⅡ層の直下に無遺物層のⅥ層を検出するなど、地点によっては遺物包含層対応の層自体が

Ⅰ層 …	表土（耕作土） 約20～30cm厚
Ⅱ層 …	黒褐色土　１～５㎜大の砂礫を多く含む 約50cm厚
Ⅲ層 …	黒色土（遺物包含層）　小砂礫を微量含む 約25cm厚
Ⅳ層 …	黄褐色土（遺物包含層）　サラサラした土 約20～30cm厚
Ⅴ層 …	黒褐色土 約30～50cm厚
Ⅵ層 …	灰褐色土　パミスを大量に含む硬質層 約20cm厚
Ⅶ層 …	黒褐色土　固くしまる 約20～40cm厚
Ⅷ層 …	明褐色粘土（地山）

第６図　基本土層図

既に削平されており残存しない。TP１の表土下ではⅢ層以下の層、TP２ではⅣ層以下の層が残存するも遺構および遺物は確認できなかった。以上の調査結果に基づいて、本調査の対象とすべき範囲を定めた。

出土遺物（第７図、表２～４、図版４）

範囲確認調査における出土遺物の総数は121点であり、内訳は表２のとおりである。種別ごとでは土器・土製品98点、石器23点の出土であり、層位別の遺物出土数はⅢ層が101点、Ⅳ層が20点である。土器類の大部分は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのものであり、Ⅲ層を中心に出土したが、縄文時代早期の押型文土器が少数ながら、Ⅳ層に偏る形で出土するという点も特徴としてみられた。石器はほぼⅢ層からの出土であった。相対的に残りの良い遺物を13点図化している。

表２　範囲確認調査出土遺物集計表

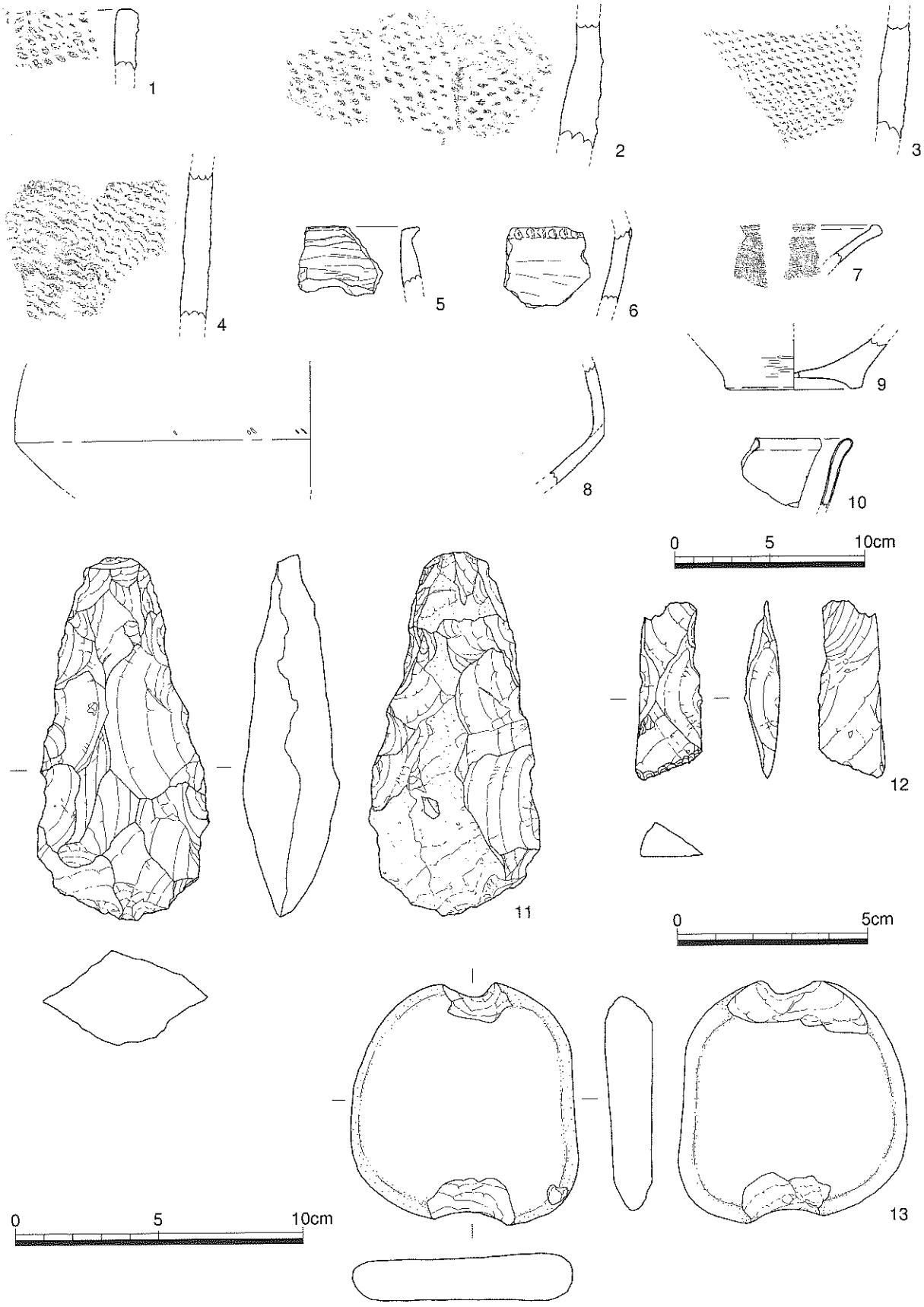
出土トレンチ・層位		TP４・Ⅲ層	TP５・Ⅲ層	TP４・Ⅳ層	TP５・Ⅳ層	小計	合計
土器・土製品	縄文土器（押型文土器）	1		8		9	98
	土器（縄文晩期～弥生前期）	10	55	7	4	76	
	土師器（中世）		10			10	
	青磁（中世）	1	2			3	
石器	石核（玄武岩）		2			2	23
	剥片（黒曜石）		11		1	12	
	剥片（玄武岩）		6			6	
	二次加工または使用痕剥片(玄武岩)		1			1	
	スクレイパー（玄武岩）	1				1	
	石錘（砂岩）	1				1	
小計		14	87	15	5	121	
合計			101		20		121

１～４は縄文時代早期の押型文土器である。いずれも器壁が１cmを超える厚手のものであり、**２**は最も厚い部分で２cm程になる。**１～３**は楕円形、**４**は弛緩気味の山形押型文を外面に施す。内面はいずれも無文であり、ナデ調整を施す。**１**は口縁部の資料であり、口唇部が面取り気味である。

５～９は縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器である。**５**は深鉢の口縁部であり、端部に突帯を巡らせる。刻目はみられない。**６**は深鉢の体部である。外面の屈曲部と考えられる付近に棒刻みを施す。**７・８**は黒色磨研土器の浅鉢である。**７**は大きく開く口縁部であり、端部の内面に小さな段を持つ。**８**は体部片であり、明瞭な屈曲を持つ。屈曲部の上位は丸みを持って内傾する。復元による最大径は30.6cmを測る。外面の屈曲部上位に、部分的であるが斜位の小さな刺突がみられる。**９**はやや上げ底となる底部で、底径は7.2cmである。外面に横位の研磨調整を施す。

10は中世の遺物であり、龍泉窯系青磁碗の口縁部である。端部は丸みを持ち、弱く外反して開く。緑色のガラス釉が掛かる。

11～13は石器である。**11**は玄武岩を素材とする縦長のスクレイパーである。平面観は下膨れで撥形に似るが、下縁は丸みを帯びる。両面剥離により下縁と両側縁に刃部を作出する。中ほどが分厚く、断面形は菱形を呈する。右面に風化面を多く残す。**12**は玄武岩の剥片である。下縁に二次加工または使用による剥離がみられる。削器として使用された可能性がある。**13**は砂岩の円礫を素材とする石錘である。長軸の両端を両面より打ち欠く。重量は184.2ｇを測る。



第７図　範囲確認調査の出土遺物（１～10 S＝１/３、11・13 S＝１/２、12 S＝２/３）

表３　範囲確認調査出土遺物観察表（土器・土製品）

図	番号	TP番号 層位	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
				内面	外面		内面	外面		
7	1	TP４・Ⅳ	深鉢	橙色	橙色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	ナデ	楕円形押型文	良	押型文土器
	2	TP４・Ⅳ	深鉢	にぶい黄橙色	橙色	石英・長石・角閃石・砂礫	ナデ(指押さえ)	楕円形押型文	良	押型文土器
	3	TP４・Ⅳ	深鉢	浅黄色	浅黄色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	ナデ	楕円形押型文	良	押型文土器
	4	TP４・Ⅳ	深鉢	浅黄色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	ナデ	山形押型文	良	押型文土器
	5	TP５・Ⅲ	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石	擦過	口唇部：ナデ 体部：条痕	良	突帯文
	6	TP５・Ⅲ	深鉢	灰黄色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過（刻目）	良	棒刻み
	7	TP５・Ⅲ	浅鉢	にぶい黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	研磨(器面荒れ)	器面荒れ	良	
	8	TP５・Ⅲ	浅鉢	褐灰色	上：褐灰色 下：にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	上：研磨(横) 下：研磨(横)→ナデ	上：研磨(横)刺突 下：研磨(縦)→ナデ	良	
	9	TP４・Ⅳ	底部	にぶい黄橙色	橙色	石英・長石・角閃石	器面荒れ	体：研磨（横） 底：ナデ	良	
	10	TP４・Ⅲ	碗	緑(灰オリーブ)	緑(灰オリーブ)	精製	ガラス釉	ガラス釉	良	龍泉窯系青磁

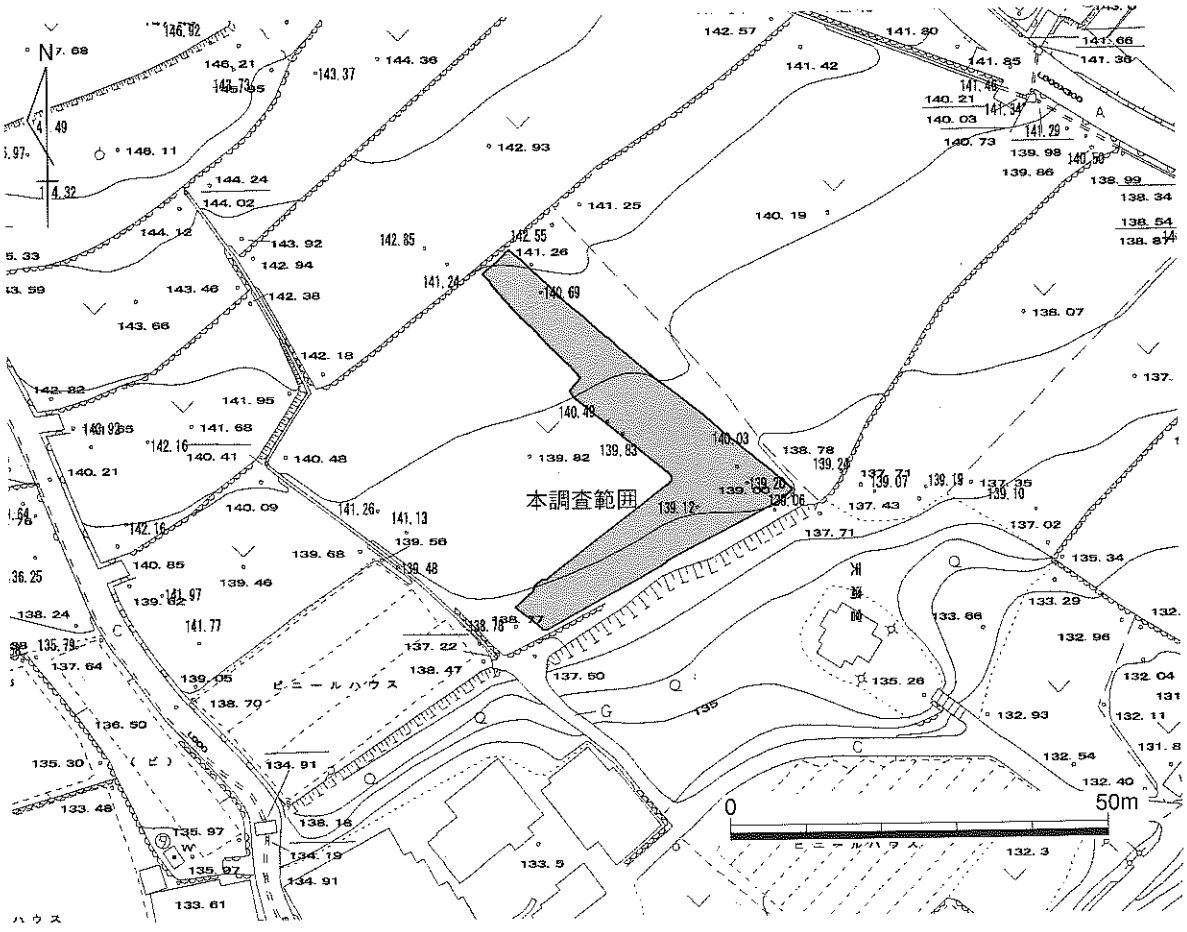
表４　範囲確認調査出土遺物観察表（石器）

図	番号	TP番号 層位	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
7	11	TP４・Ⅲ	スクレイパー	玄武岩	12.7	6.0	3.3	202.8	
	12	TP５・Ⅲ	二次加工または使用痕剥片	玄武岩	4.6	1.7	0.9	6.6	削器か
	13	TP４・Ⅲ	石錘	砂岩	8.2	7.9	1.6	184.2	

第4章　本調査

第1節　調査の方法と経過（第8・9図）

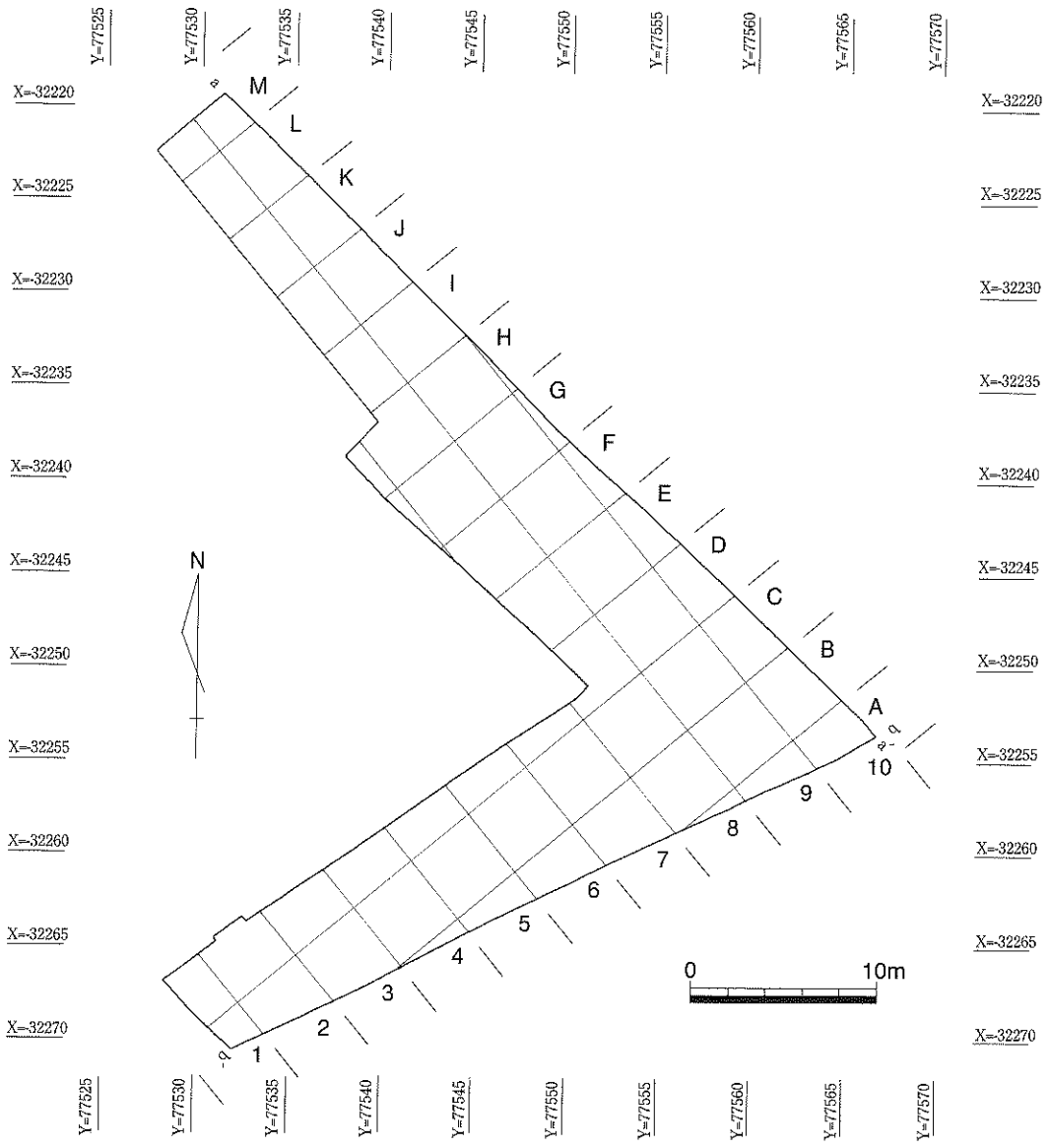
範囲確認調査で得られた成果と工事計画の突合により、本調査の実施を要した面積は約500m²である（第8図）。遺物包含層（Ⅲ層上面）に至るまでの上層部分は調査担当立会の元、重機による剥ぎ取りを行った。調査区が略L字形を呈することから、この軸に沿う形で4m四方を基本とするグリッドを設定し、アルファベットと数字の組み合わせでグリッド番号を設けた（第9図）。包含層の掘削は人力で行い、遺物の取り上げは基本的に層位およびグリッドを単位として行った。また包含層の掘削を進めるとともに遺構の検出作業を行った。Ⅳ層上面においてピット・土坑・溝・流路などの遺構を検出したため、これらの掘削作業と記録測量および空中写真を含む撮影を実施した。遺構の記録終了後、Ⅳ層についてもⅢ層同様の手法で掘削作業を行った。Ⅳ層掘削時には集石遺構1基を検出したため、記録測量および撮影を行った。包含層の掘削が完了した段階で、調査区土層の図化および土層と調査区の撮影を行った。現地における全ての調査業務終了後に工事関係者と協議を行い、工事の着手がすぐに控えていたことから調査区の埋め戻しは行わずに現場を引き渡している。



第8図　調査区位置図（S＝1/1,000）

第2節　土層（第10·11図）

基本層序は範囲確認調査のTP4・TP5でみられた基本層序を概ね踏襲するものであった。あらためて示す形となるが、本調査に係る基本土層は次のとおりである。



第９図　グリッド配置図（Ｓ＝１/400）

Ⅰ層　…表土（耕作土または耕作基盤土）

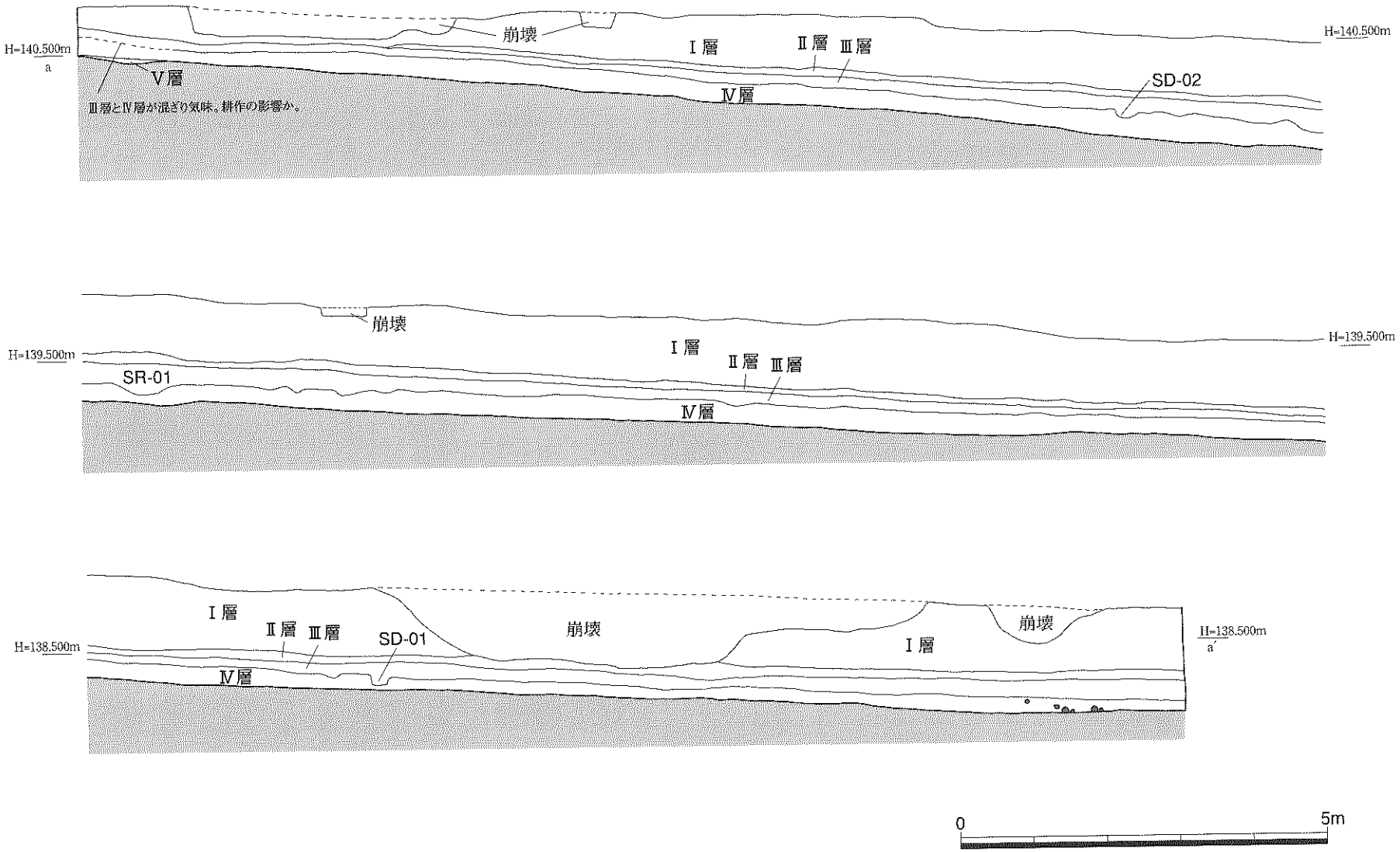
Ⅱ層　…小砂礫を多く含む黒褐色土

Ⅲ層　…黒色土（遺物包含層）

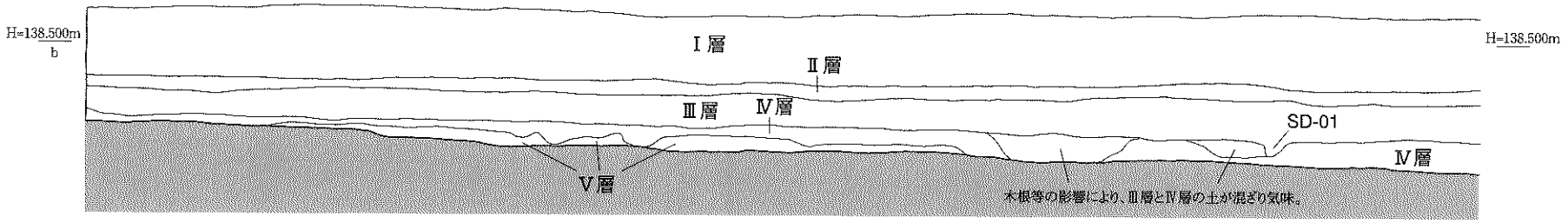
Ⅳ層　…黄褐色土（遺物包含層）

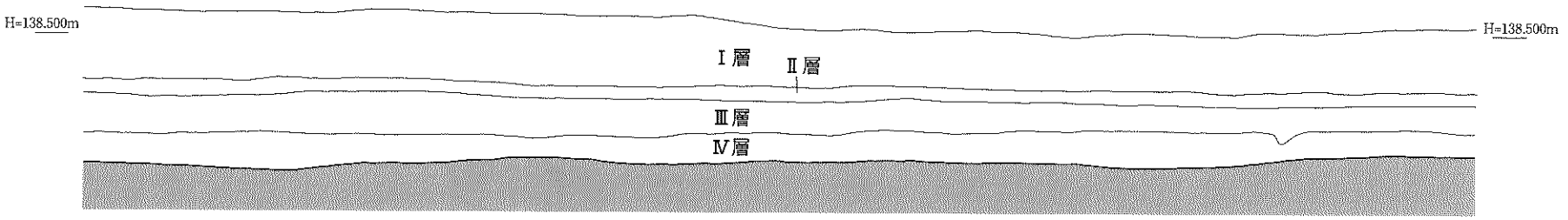
Ⅴ層　…黒褐色土

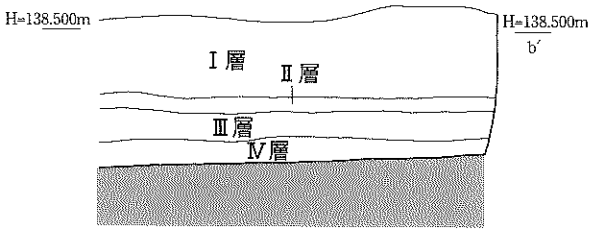
Ⅱ層以下の堆積は地表面に対して傾斜がきつく、調査区北東側の土層（第10図）をみると、特に北西寄りで10％強の勾配となっている。南東側へ向かうにつれて、やや緩やかな傾斜へと漸移的に転換する。これらは旧地形の形状を反映しているものと考えられる。結果として表土であるⅠ層は、調査区南東寄りにおいて１ｍ前後の分厚い堆積となっている。畑地利用の影響もあるだろうが、傾斜の変換によって土砂が堆積しやすい環境にあったのかも知れない。



第10図　調査区土層図〈北東〉（S＝1/80）







Ⅰ層…表土（耕作土または耕作基盤土）。
Ⅱ層…黒褐色土。1～5mm大程度の砂礫を多く含む。
Ⅲ層…黒色土（Hue10YR 2/1）。1～2mm程度の砂礫を微量含む。遺物包含層。
Ⅳ層…黄褐色土（Hue2.5Y 5/6）。砂礫などは殆ど含まず、サラサラした土。遺物包含層。
Ⅴ層…黒褐色土（Hue7/5YR 2/2）。

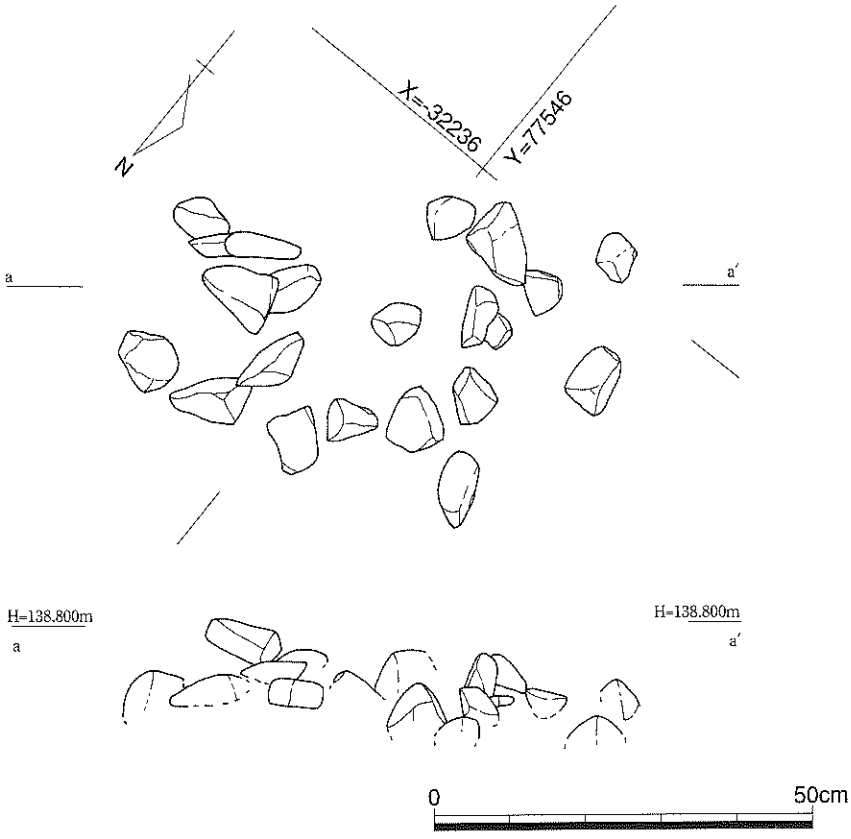
第11図　調査区土層図〈南東〉（S＝1/80）

第３節　遺　　構（第12～25図、表５～14、図版２・３・５・６）

遺構はⅣ層上面およびⅣ層の掘削段階で確認した。Ⅳ層の掘削段階において検出した遺構は集石遺構１基である。

集石遺構（第12図、図版３）

H-９区の南東辺付近において、Ⅳ層の掘削中に検出した。長軸約70cm、短軸約45cmの範囲において10cm大前後の安山岩礫がやや集中する形でみられた。掘込みはみられず、遺物も伴っていなかったが、周囲にこうした礫がほとんどみられない状況であったことから、集石遺構としての取り扱いとした。遺構の年代について定かではないが、後述するⅣ層上面での検出遺構よりも明らかに先行するものであり、古くみて包含層出土遺物の年代上限である縄文時代早期に属する可能性があるだろう。



第12図　集石遺構（S＝１/10）

Ⅳ層上面の検出遺構（第13図）

Ⅳ層上面においては土坑、自然流路、溝状遺構、性格不明遺構、ピットなどを検出した。全体の傾向として、遺構内出土遺物は土器の小片・細片が主であり、広い年代幅のものが混在するなど時期決定に耐える出土状況を示すものは無かった。おそらく縄文時代晩期頃から中世までのものが複合していると考えられる。掲載遺物は図化に耐えうる程度のものを任意に抽出しているが、流れ込みの可能性もあり、必ずしも遺構の時期を示すか定かではない。

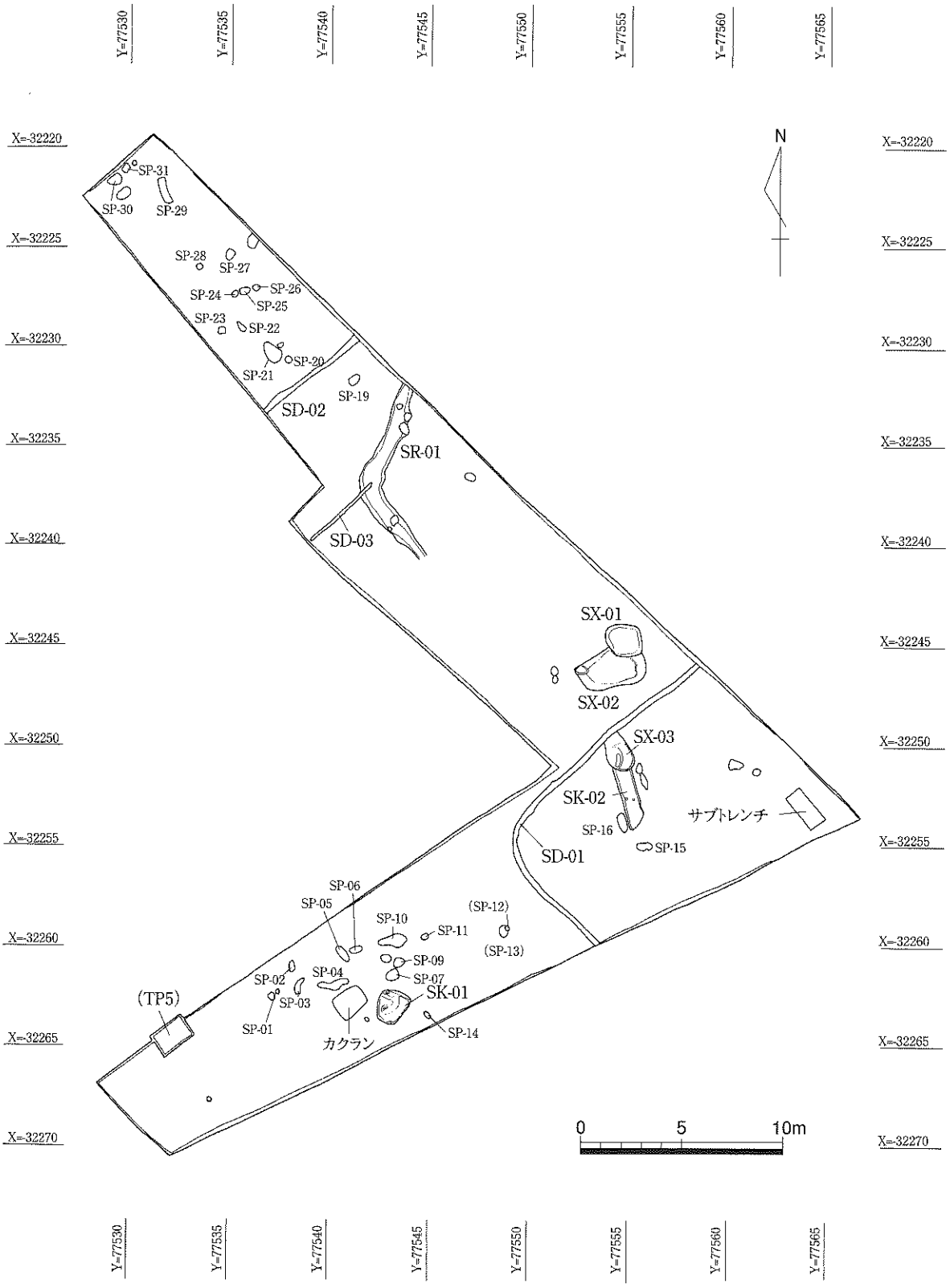
土坑

SK-01（第14・15図、表５、図版２・５）

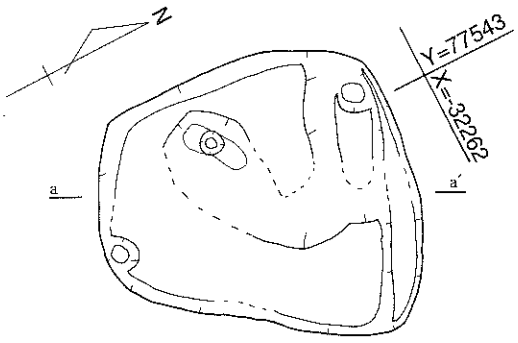
C-４～C-５区にかけて検出した不整台形を呈する土坑である。北東-南西方向に設定した長軸で約1.7mを測り、北東辺が約1.4m、南西辺は0.8m程度と狭くなる。遺構の下端は整っておらず、部分的にピット状に落ち込む。**14**は深鉢の口縁部である。外面調整は粗い擦過による。端部付近は指ナデが強く先細り気味となる。**15**は浅鉢の口縁部である。頸部で「く」字状に強く屈曲し口縁が短く開く。端部はやや肥厚しており、内面には小さい段をもつ。

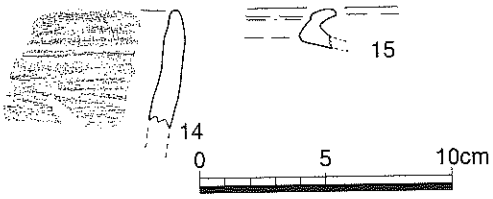
SK-02（第16・17図、表６・７、図版２・５）

C-８～C-９区にかけて検出した細長い土坑である。北側をSX-03に切られるが、検出面での南北

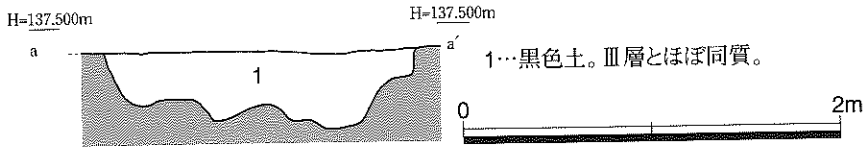


第13図　Ⅳ層上面遺構配置図（S＝1/300）





第15図　SK-01出土遺物（S＝1／3）

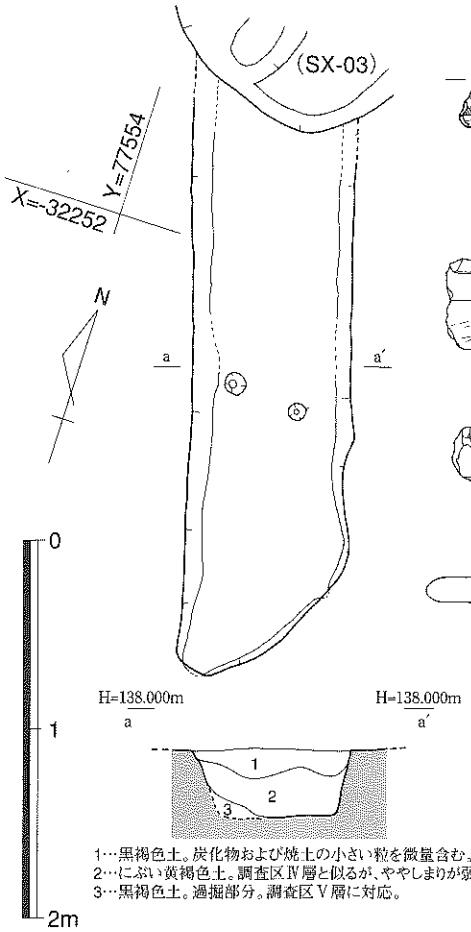


第14図　SK-01（S＝1／40）

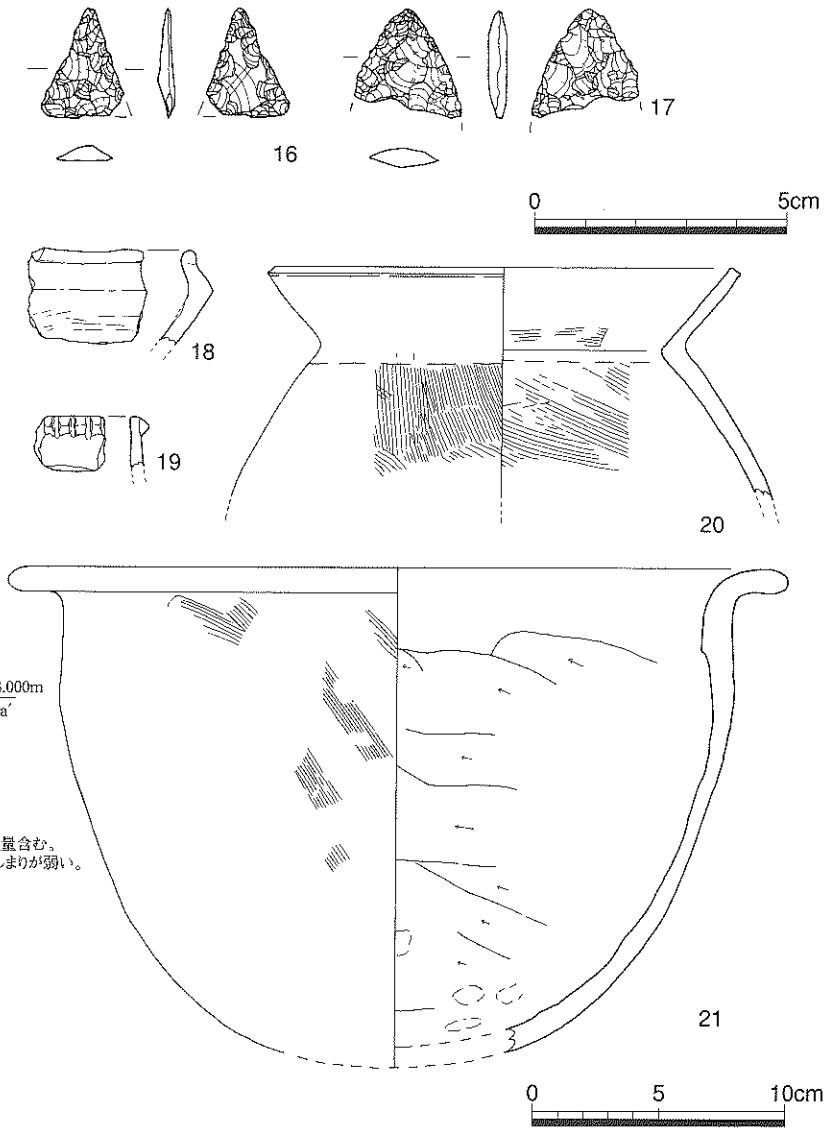
表5　SK-01出土遺物観察表（土器）

図	番号	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
			内面	外面		内面	外面		
15	14	深鉢	にぶい黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過	良	
	15	浅鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	

長はおよそ3mであり、東西幅は約0.8mである。上層は炭化物粒や、焼土の破砕した粒を含む黒褐色土であり、遺物は概ねこの層より出土した。古墳時代～古代頃の残りのよい破片が出土しており（20・21）、この時期の遺構か。16・17は無茎石鏃である。石材はいずれも黒曜石で漆黒色、良質のものである。16は細身の二等辺三角形を呈す。薄手の剥片を素材とし、平坦剥離によって成形する。裏面には主要剥離面を大きく残す。基部は一部折損しているが、平基式である。17はやや厚みのある剥片を素材としており、正三角形に近い形態を呈する。側縁は丸みを帯び、基部には浅い抉入がみられる。裏面の剥離面はやや大きく、周縁加工も十分には施されていない。未成品としての可能性も考えられる。18は逆「く」字状を呈する浅鉢の口縁である。端部は外方への折り曲げが意識されているようだが、肥厚程度に留まっている。19は深鉢の口縁部である。端部に接する位置に、断面三角形の刻目突帯を施す。刻目は棒状工具による垂直方向のもので、体部に達するほど深く刻む。器壁が薄く、小型品と考えられる。20は土師器の甕である。肩はあまり張らず、口縁が「く」字状を呈するものであり、口径は復元値で18.3cmを測る。体部には細密なハケ目調整を施している。口縁は丁寧な横ナデであり、これに伴う器壁の微細な起伏が認められる。また口唇部は面取りを行っている。21は古代の土師器甕である。丸底とみられる底部より直立気味に立ち上がっていき、口縁は水平方向に短く折り曲げる。復元口径は31.1cmを測り、図示した推定器高を上回る。体部内面のケズリ調整は強く、口縁部での器壁が1cm前後あるのに対し、半分程度にまで器壁が削られている。底部付近においては、指頭圧痕がみられる。



第16図　SK-02（S＝1/40）



第17図　SK-02出土遺物（16・17　S＝2/3、18～21　S＝1/3）

表6　SK-02出土遺物観察表（石器）

図	番号	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
17	16	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.8	
	17	石鏃	黒曜石	2.2	2.1	0.4	1.3	

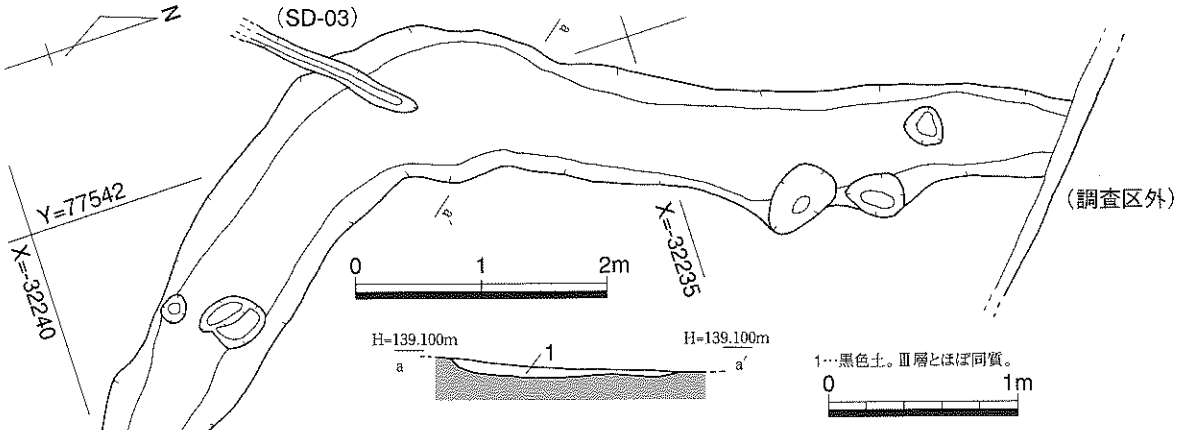
表7　SK-02出土遺物観察表（土器）

図	番号	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
			内面	外面		内面	外面		
17	18	浅鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	19	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（棒刻み）
	20	甕	橙色	橙色	石英・長石	口縁：ハケ目→ナデ 体部：ハケ目	口縁：ナデ 体部：ハケ目	良	土師器
	21	甕	浅黄色	浅黄色	石英・長石・角閃石	口縁：横ナデ 体部：ケズリ・指押さえ	口縁：横ナデ 体部：ハケメ→ナデ	良	土師器

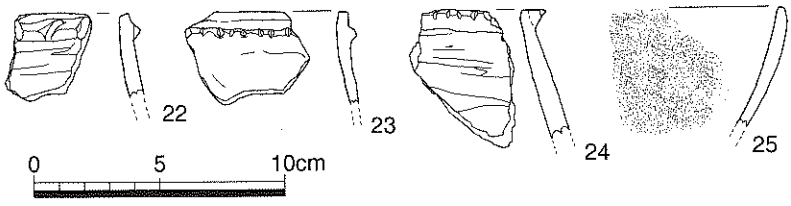
自然流路

SR-01（第18･19図、表８、図版２・５）

I-９区からG-８区にかけて検出した流路跡である。幅は概ね１ｍ前後であり、深さは10cm程度と浅い。北東からいったん南西に向かい、南東へと進路を変える。末端は50cm程度に幅を半減し、自然と消滅する。**22～24**は刻目突帯文深鉢の口縁部である。**22**は口縁よりやや下がった位置に突帯を巡らせ、大振りの棒刻みを施す。**23**は口縁より下がった位置に小さめの突帯を巡らせ、小振りのヘラ刻みを施す。**24**は口縁に接する位置に断面三角形の突帯を巡らせ、小振りのヘラ刻みを施す。**25**は碗形に開く浅鉢の口縁部である。



第18図　SR-01（S＝1/60・1/40）



第19図　SR-01出土遺物（S＝1/3）

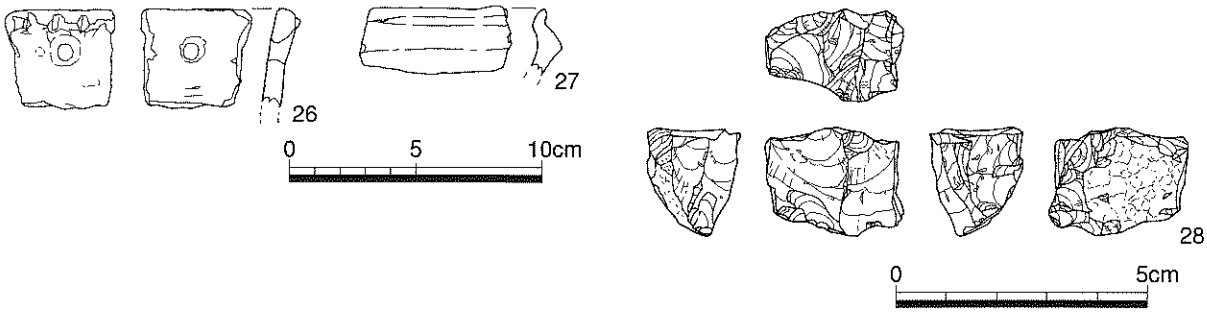
表８　SR-01出土遺物観察表（土器）

図	番号	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
			内面	外面		内面	外面		
19	22	深鉢	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石英･長石･角閃石	ナデ	擦過	良	刻目突帯文（棒刻み）
	23	深鉢	褐灰色	明黄褐色	石英･長石･角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	24	深鉢	明黄褐色	にぶい黄橙色	石英･長石･角閃石	擦過	擦過	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	25	浅鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英･長石･角閃石	ナデ	研磨・ナデ	良	

溝状遺構（第13･20図、表９･10、図版２・６）

溝状遺構は３条検出した。紙幅の都合により個別図の掲載は省略しているため、第13図の配置図を参照されたい。いずれも幅は20～30cm程度であり、深さは10～15cmほどである。埋土は調査区Ⅲ層と差異のみられない黒色土である。SD-01は北東から南西に方向に向かい、丸みを伴いほぼ直角の角度

で南東へと折れる。SD-02およびSD-03は北東－南西方向の直線的なものである。SD-01の一辺とSD-02、SD-03は平行方向であり、規模も同様であることから互いに関連の強い遺構である可能性が高い。また周囲の遺構を切り込むことから、検出遺構の中では相対的に新しい年代のものと見なされる。中世の区画溝などのような性格が考えられるだろうか。**26**は深鉢の口縁部である。口縁端部に近い位置に小さい突帯を巡らせ、ヘラ刻みを施す。突帯下には土器の補修孔とみられる穿孔がある。内外面双方からの穿孔による貫通孔で、径は1㎝強、外面側がやや大きい。**27**は逆「く」字状を呈する粗製浅鉢の口縁部である。端部は短く外方へ折れ曲がる。**28**は黒曜石の石核である。主な作業面は一面で、裏面は風化面である。はじめ上面に打面を設定し、のちに180°の打面転移を行っている。



第20図　SD-01出土遺物（26・27　S＝1／3、28　S＝2／3）

表9　SD-01出土遺物観察表（土器）

図	番号	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
			内面	外面		内面	外面		
20	26	深鉢	暗灰黄色	にぶい黄色	石英･長石･角閃石	擦過	擦過	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	27	浅鉢	明黄褐色	明黄褐色	石英･長石･角閃石	ナデ	ナデ	良	

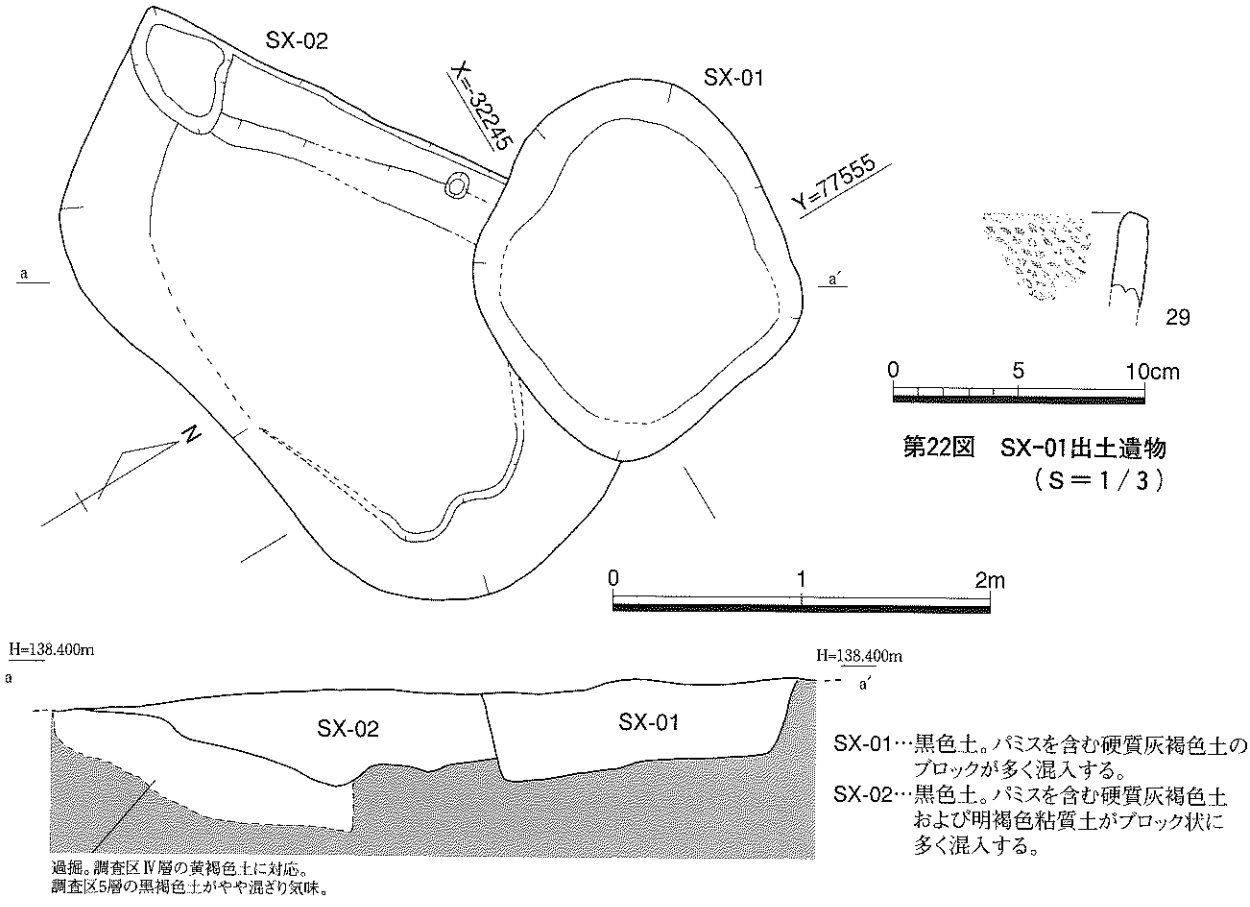
表10　SD-01出土遺物観察表（石器）

図	番号	器種	石材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
20	28	石核	黒曜石	2.2	2.8	1.8	9.6	

性格不明遺構

SX-01・SX-02（第21･22図、表11、図版3・6）

D-9～10区、E-9～10区付近で重複して検出した遺構である。SX-01は一辺約1.6mの隅丸方形、SX-02は長軸約3.4m、短軸約1.9mの楕円にも近い略方形を呈する。深さはいずれも最大で50㎝程度である。SX-01がSX-02を切り込む。埋土は範囲確認調査においてⅥ～Ⅷ層として確認した、硬質の灰褐色土や明褐色粘質土のブロックが大量に含まれている。SX-01より押型文土器片1点、SX-02より縄文時代晩期～弥生時代前期頃の土器小片が5点出土しているが、状況からみると包含層からの混入品の可能性が高い。**29**は押型文土器の深鉢口縁部である。器壁は1.3㎝程度と厚みがある。外面には斜位の楕円押型文を施し、内面は無文である。



第22図　SX-01出土遺物（S＝1／3）

第21図　SX-01・02（S＝1/40）

表11　SX-01出土遺物観察表（土器）

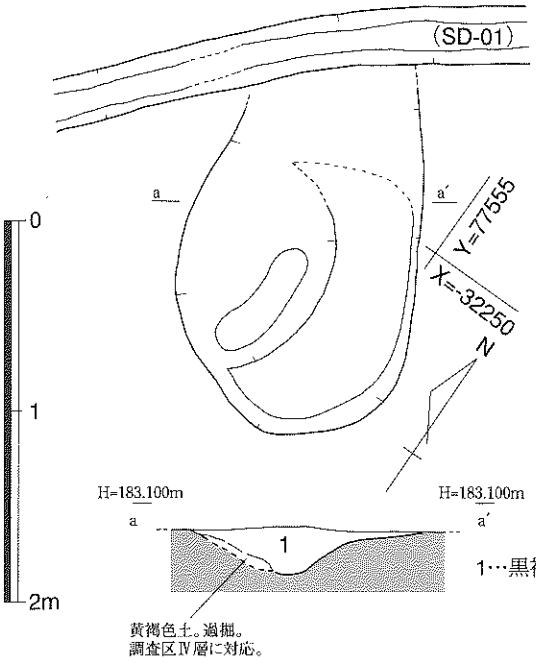
図	番号	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
			内面	外面		内面	外面		
22	29	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	楕円押型文	良	押型文土器

SX-03（第23・24図、表12、図版2・6）

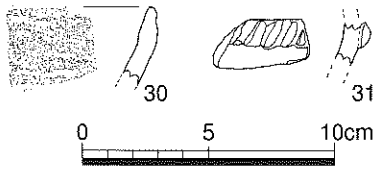
平面は楕円形、断面はすり鉢状を呈する遺構である。短軸は約1.2mであり、長軸は北側をSD-01に切られるため不明となるが、見込みで2mほどである。深さは中央で最も深く約25cmである。先述のSK-02を切り込む。**30**は粗製浅鉢の口縁部である。口縁が単純に開く碗形のものと考えられる。端部は先細りする。**31**は刻目突帯文を施す体部片である。断面にいわゆる蒲鉾形の突帯を巡らせ、大振りな棒刻みを施す。

ピット（第13・25図、表13・14、図版6）

40基ほどを検出した。配置を検討したが、建物跡として認め得たものはない。中には根跡のようなものも含まれる。埋土は概ねⅢ層と差異のない黒色土であり、微細な炭化物粒を含むものも一部みられた。分布をみると、C-4～C-5およびD-4グリッド付近に一定の纏まりがあり、またJ列からM列付近にも緩い纏まりがある。ピットはいったん半裁し、確認・記録後に完掘した。番号は遺物が出土した分について採番した（注1）。**32**は粗製浅鉢の口縁である。口唇部は面取りし、外面の口縁下には段がみられる。**33**は砂岩を素材とする礫石器である。擦痕と敲打痕がみられ、磨石および敲石とし



第23図　SX-03（S＝1/40）



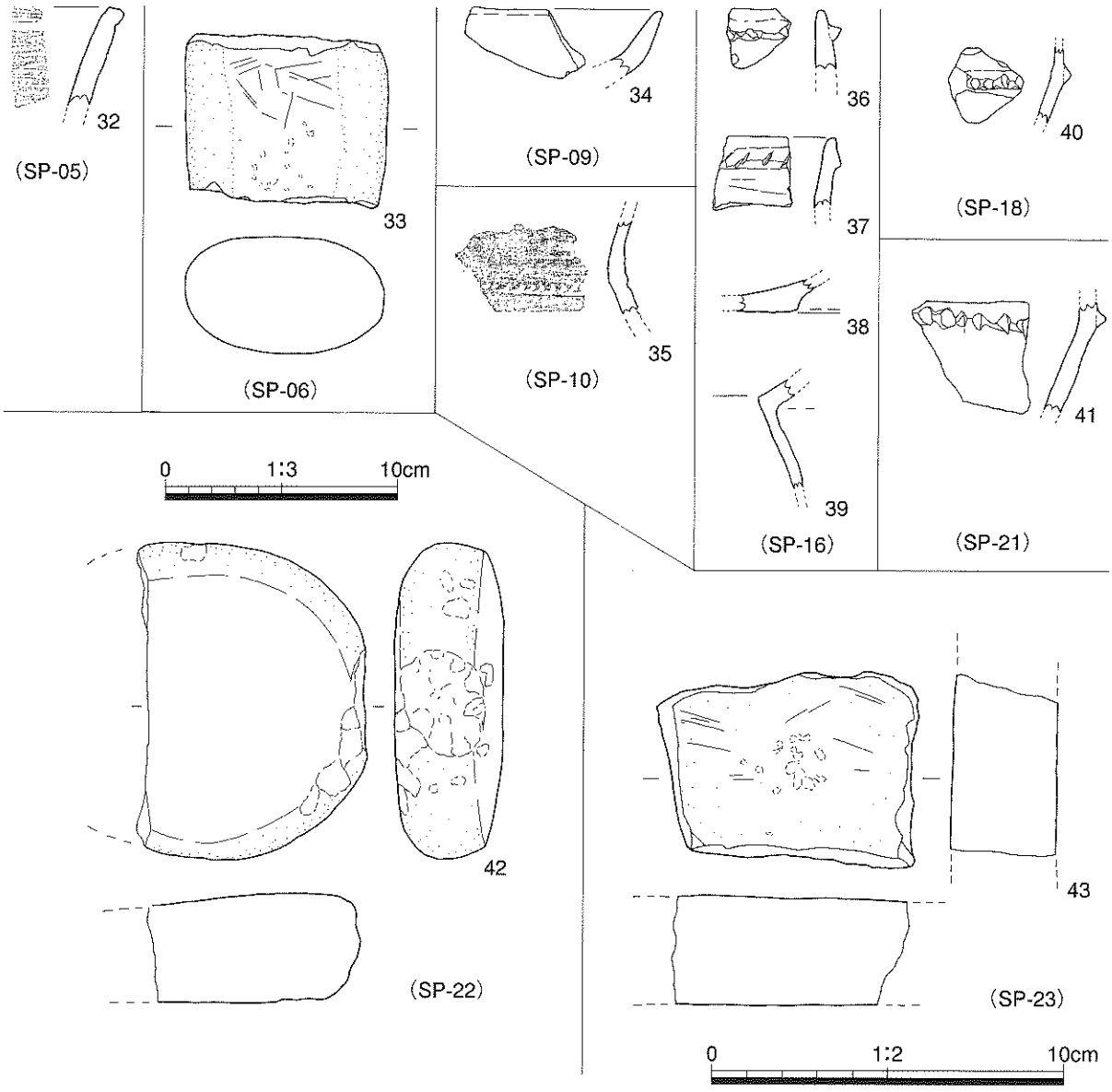
第24図　SX-03出土遺物（S＝1/3）

表12　SX-03出土遺物観察表（土器）

図	番号	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
			内面	外面		内面	外面		
24	30	浅鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	31	深鉢	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・長石・角閃石	擦過	ナデ	良	刻目突帯文（棒刻み）

て兼用された可能性が考えられる。34は中世土師器の坏である。淡い橙色系の胎土で、やや砂粒が目立つ。体部付近の器壁は厚みがある。35は縄文時代後期の磨消縄文土器であり、深鉢の頸部片である。外面に沈線を施し、その上位に爪形の刺突文を横位に巡らせる。下端の破断面付近にも沈線の痕跡がみられる。36・37は深鉢の口縁部であり、いずれも端部より下がった位置に刻目突帯文を施すものである。36は小振りの指刻み、37は斜位のヘラ刻みによる。38は底部片である。胎土等の特徴から縄文時代晩期～弥生時代前期頃のものとみられる。平底であり、いったん大きく開く器形になると考えられる。39は弥生時代後期頃の甕であり、頸部から肩部付近の資料である。口縁と体部の境は「く」字状に屈曲し、肩はあまり張らない。40・41は刻目突帯文深鉢の体部片である。いずれも屈曲部に断面三角形の突帯を巡らせ、ヘラ刻みを施す。42は砂岩質の円礫を素材とした磨石である。右側面には敲打による潰れがみられる事から、敲石としても兼用されたと考えられる。43はいちおう砥石として扱った。砂岩の板状石材を素材としたもので、5㎝弱の厚みがある。表面の中央には敲打痕が観察され、上下左右が破損していることから、台石の転用品の可能性がある。また敲打痕の残る範囲のバランスを考慮すると、この状態で小型の台石として機能していた可能性もあるだろう。

注1）SP-12及びSP-13は誤りによる採番であり、遺物は出土していないが、作業上の都合により番号の改変は行っていない。したがって第13図中にSP-31まで示しているが、遺物が出土したピットの実数は29基である。



第25図　ピット内出土遺物（32・34～41　S＝1／3、32・42・43　S＝1／2）

表13　ピット内出土遺物観察表（石器）

図	番号	ピット番号	器種	石材	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重量(g)	備考
25	33	SP-06	磨石または敲石	砂岩	5.0	5.8	3.4	174.7	
	42	SP-22	磨石または敲石	砂岩	9.1	6.6	3.1	317.5	
	43	SP-23	砥石	砂岩	5.7	7.5	3.1	226.6	

表14　ピット内出土遺物観察表（土器）

図	番号	ピット番号	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
				内面	外面		内面	外面		
25	32	SP-05	浅鉢	黄灰色	黄灰色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過	良	縄文時代晩期
	34	SP-09	坏	橙色	橙色	石英・長石・赤色粒子	横ナデ	横ナデ	良	中世土師器
	35	SP-10	深鉢	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨 沈線・刺突	良	縄文時代後期
	36	SP-16	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（指刻み）
	37	SP-16	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	擦過	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	38	SP-16	底部	浅黄色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	ナデ	良	
	39	SP-16	甕	明赤褐色	明赤褐色	石英・長石・赤色粒子	ナデ	ナデ	良	弥生時代
	40	SP-18	深鉢	橙色	にぶい黄色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	41	SP-21	深鉢	にぶい黄橙色	褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）

第５章　包含層出土遺物

第１節　概　　要（表15）

遺物包含層であるⅣ層およびⅢ層からは１万点近くの遺物が出土した（表15）。出土遺物の年代は縄文時代早期、縄文時代後期～弥生時代前期、弥生時代中期～古代、中世～近世である。種別は、土器・土製品、石器・石製品および鉄製品等である。両層ともに遺物包含量は多く、5,000点を前後する数の遺物が出土している。詳細は次節で述べるが、年代別の出土遺物の量比より両層の間には大局的な時期差がみられる。

表15　包含層出土遺物集計表

		出土層位		計
		Ⅳ層	Ⅲ層	
種別	土器・土製品	3,751	3,575	7,326
	石器・石製品	784	1,711	2,495
	金属製品等	—	13	13
計		4,535	5,299	9,834

（※重量集計した土器・土製品を除く。次節参照。）

第２節　土器・土製品（表16）

土器・土製品は7,000点余りの出土である（表16）。年代別では縄文時代晩期～弥生時代前期に属すものが圧倒的に多い。縄文時代早期、中世の遺物も少し纏まった量が出土した。弥生時代中期～古代も数はあるが小・細片が多い。相対的な傾向として、縄文時代早期の押型文土器はⅣ層に多く、須恵器、陶磁器などはⅢ層に出土が偏る。縄文時代晩期～弥生時代前期のものは何れの層においても出土量が多く主体的な位置を占める。表16の補足説明をしておきたい。集計は点数カウントのほか、細片類については重量集計も一部併用した。概ね２㎝以下を目安に、胎土・色調などを除く特徴に乏しいものを対象とした。中世土師器は大部分がこうした細片であるため、全て重量集計によった。

縄文時代後期～弥生時代前期資料の一部は胎土や調整のみでなく、器種や文様も踏まえた判別を原則として器種への振り分けを行った。高坏は脚部資料のみを僅かに確認しており、「底部・脚部」に一括した。

深鉢は口縁部資料を中心に大まかな特徴で３細分した。「タガ状・口縁帯」としたものは、主に肥後編年の古閑式などにみられる口縁部拡張帯を持つもの、また時期的に下るが礫石原式段階（黒川式併行）の幅広口縁帯に多条沈線を施すタイプなどである。集計項目としては一括したが、内訳として後者は僅かである。「素口縁ほか」とした分には、波状形のものやリボン状突起など口縁に装飾が付加されるものも含む。ほかの二種が小片であっても比較的容易に判別できるのに対し、このタイプは残存状況によっては判別が難しい為である。「刻目または刻目突帯文」については、深鉢以外の器種として認定できたものを除き深鉢に組み入れた格好であるが、若干の誤りは含まれる可能性があるだろう。当然ながら他器種として認定した資料については、表中の「刻目または刻目突帯文」に含めていない。

「粗製土器片」は深鉢、「精製土器片」は浅鉢にそれぞれの大部分が対応し、一部が他器種へ振り分けられるであろう。ある程度の推定は可能であるが、器形・文様などを踏まえない場合は器種への振り分けを行っていない。「土器片（赤色顔料）」とした資料は、器面に広く顔料を塗布したもの、またはその痕跡が確認できるものを対象とした。例えば黒色磨研土器の沈線内へ部分的な顔料塗布をしたような資料は含めていない。胎土観察の限りでは「土器片（赤色顔料）」の殆どが壷と見なしても差

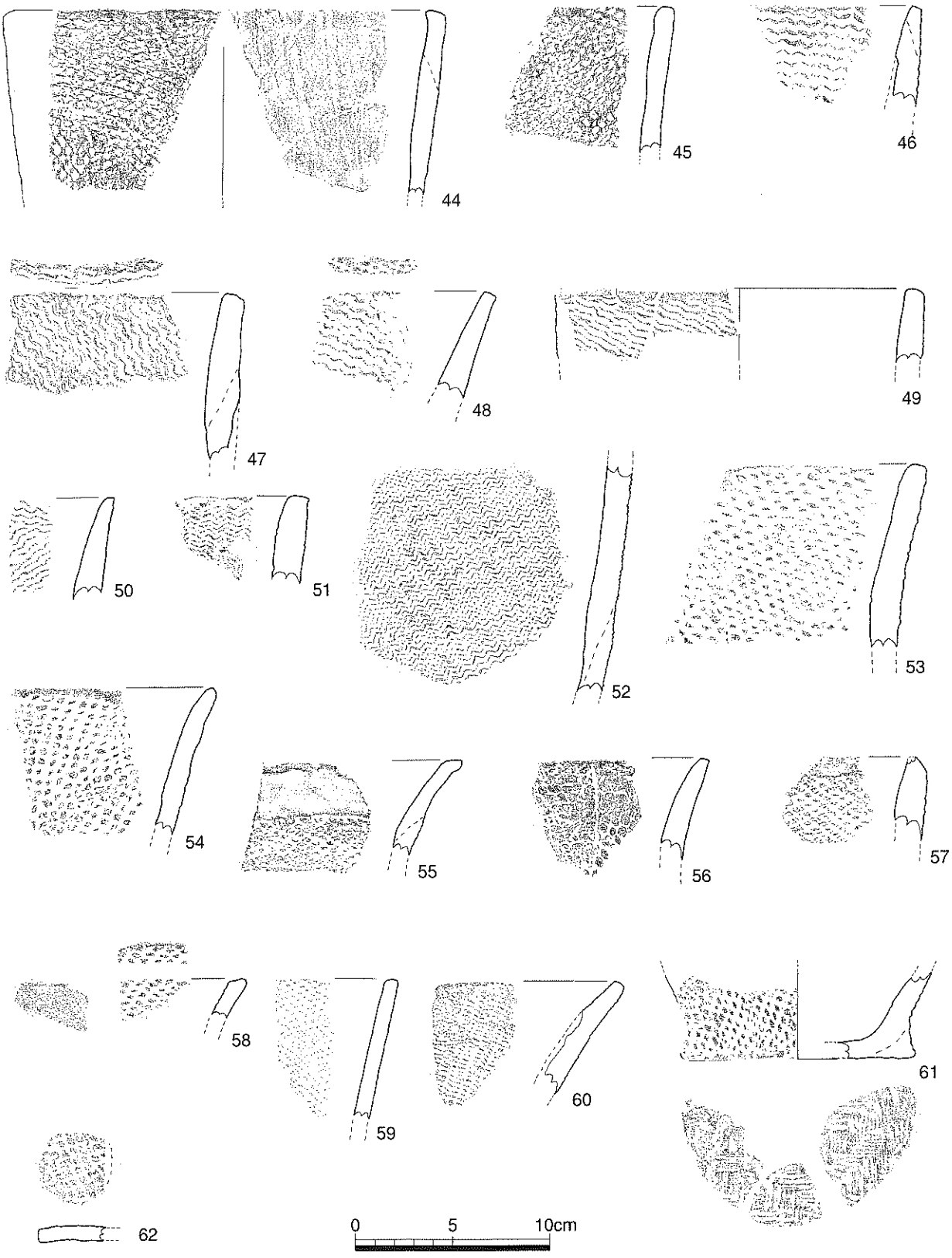
し支えのない印象である。なお赤色顔料の塗布痕がある弥生時代中期の壺胴部片を１点確認しており（第33図153）、これら赤色顔料を施した土器の一部は弥生時代中期以降に年代が下る可能性がある。ただし全体の出土比を見る限り、点数としては決して多くならないだろう。

表16　包含層出土土器・土製品内訳表

時期区分	種別（器種・細別）		出土層位 Ⅳ層	出土層位 Ⅲ層	小計	計
縄文時代早期	押型文土器（格子目）		9	1	10	151
	押型文土器（山形）		21	4	25	
	押型文土器（楕円）		102	14	116	
縄文時代後期〜弥生時代前期	磨消縄文系土器		24	5	29	6,687＋約7090.8g
	深鉢	タガ状口縁・口縁帯	46	31	77	
		素口縁ほか	187	177	364	
		刻目または刻目突帯文(口縁)	101	112	213	
		刻目または刻目突帯文(体部)	93	123	216	
	粗製土器片		2,463	2,077	4,540	
	〃　細片（g）		約3,700g	約3,200g	約6,900g	
	浅鉢		141	105	246	
	精製土器片		220	114	334	
	壺		21	22	43	
	土器片（赤色顔料）		199	257	456	
	〃　（g）		190.8g	－	190.8g	
	底部・脚部		69	79	148	
	土製品		9	12	21	
弥生時代中期〜古代	弥生土器		18	95	113	148
	土師器		8	27	35	
中世〜近世	土師器（g）		約500g	約3,620g	約4,120g	340＋約4,120g
	須恵器		6	81	87	
	瓦質土器		1	115	116	
	青磁		12	90	102	
	陶器		－	21	21	
	磁器（青磁除く）		1	12	13	
	土製品（土錘）		－	1	1	
層位別小計			3,751＋約4390.8g	3,575＋約6,820g	合計	7,326＋約11210.8g

Ⅳ層出土の土器・土製品（第26〜35図、表17、図版７〜15）

第26図は縄文時代早期の押型文土器である。Ⅳ層より出土した押型文土器は132点であり、土製品として扱った**62**を除いては深鉢と考えられるものである。口縁部資料を中心に19点を掲載した。押型文のタイプ別による内訳では、ミミズ腫れ風の格子目（**44・45**）が９点、山形（**46〜52**）が21点、楕円（**53〜62**）が102点となっている。楕円のものが約77％と多い割合を占める。施文部位は外面を全面施文する傾向が顕著であるが、口縁下を部分的にナデ消す例（**55・57**）も若干みられる。また口唇部に施文する例も一部ある（**47・48**）。内面施文を確認できる資料は**58**の１点のみであり、同資料は外面側が無文となっている。施文方向は**46・51**のように横位のものもあるが、全体的には斜位のものが多い。**47**のように縦位に近くなる資料もある。形態的には厚手のものが多く、口縁は直立気味にわ

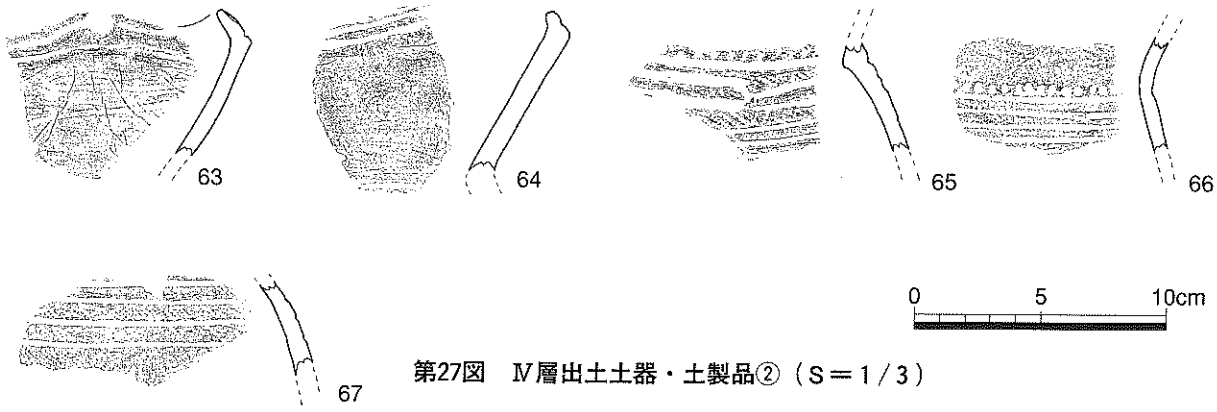


第26図　Ⅳ層出土土器・土製品①（S＝1／3）

ずかに開くものが主体であるが、**55**のように外反気味に開くものも少量みられる。

山形の押型文には、**46・52**のように比較的明瞭であるものと、**49・50**のように山形がやや弛緩したようなものとがみられる。楕円の押型文には**53・54**などを基準に比較した場合、**59・60**のように粒が非常に細かいもの、**56**のように楕円が押し潰されたようなものもバリエーションとして認められる。**60**については、いわゆる「ベルト状施文」などと表現されるタイプに相当する。**61**は外面に楕円押型文を施す底部である。Ⅳ層およびⅢ層出土の破片１点ずつが接合し、Ⅳ層出土の破片もう１点が同一個体とみなされる資料である。便宜的にⅣ層の方へ含めて掲載した。形態としては復元底径12.1cmのしっかりとした平底であり、いったん少し括れてから外方へ開く。また、底面には網代状の組織痕が残る。底面の拓本は復元径と組織痕の方向を参考として配している。**62**は楕円押型文を施す土器の器壁を打ち欠いて、円盤状に整形したと考えられるものである。直径は3.6cmである。これら押型文土器群の位置付けについては、後章においてあらためて述べる。

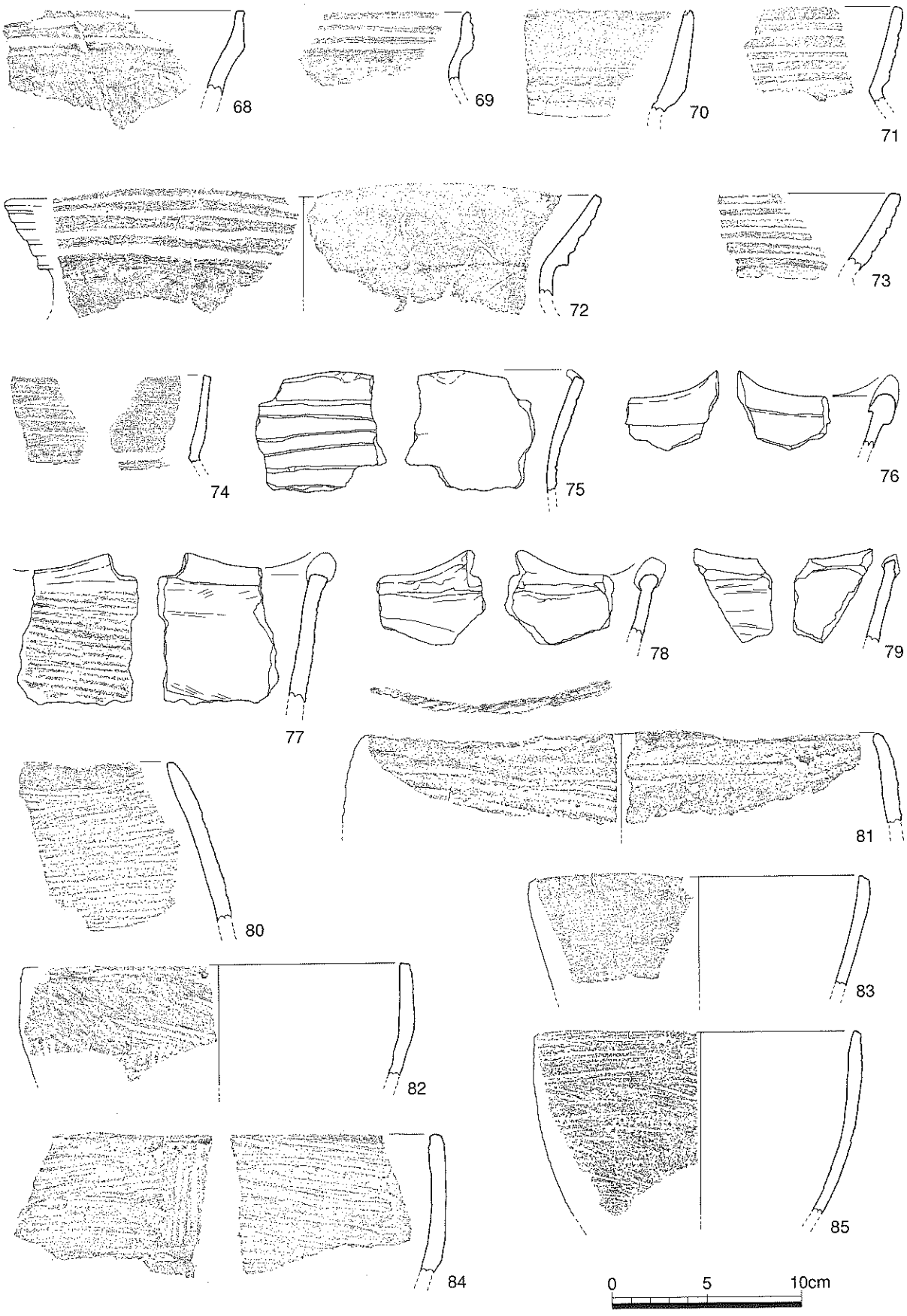
第27図は縄文時代後期の磨消縄文土器であり、太郎迫式段階のものと考えられる。器種はいずれも深鉢であり、**63・64**が口縁部、**65～67**が頸部から肩部付近の資料である。**63**は屈曲する口縁部に２条の沈線を巡らせ、波頂部に押点を施す。**64**は短く屈曲する口縁に２条の沈線を巡らせ、口縁下端に地文の縄文が僅かに残る。**65**は６条の横走する沈線がみられ、上から２本目と３本目は「χ」状に結節する。１本目と２本目の間、３本目と４本目の間に地文の縄文が残る。口縁との境には刺突を巡らせる。**66**は平行する５条の沈線が残る。摩耗が著しく縄文については不明である。沈線の上位に刺突を巡らせる。**67**は平行する４条の沈線を巡らせ、２本目と３本目の間および４本目の下にに地文の縄文を残す。



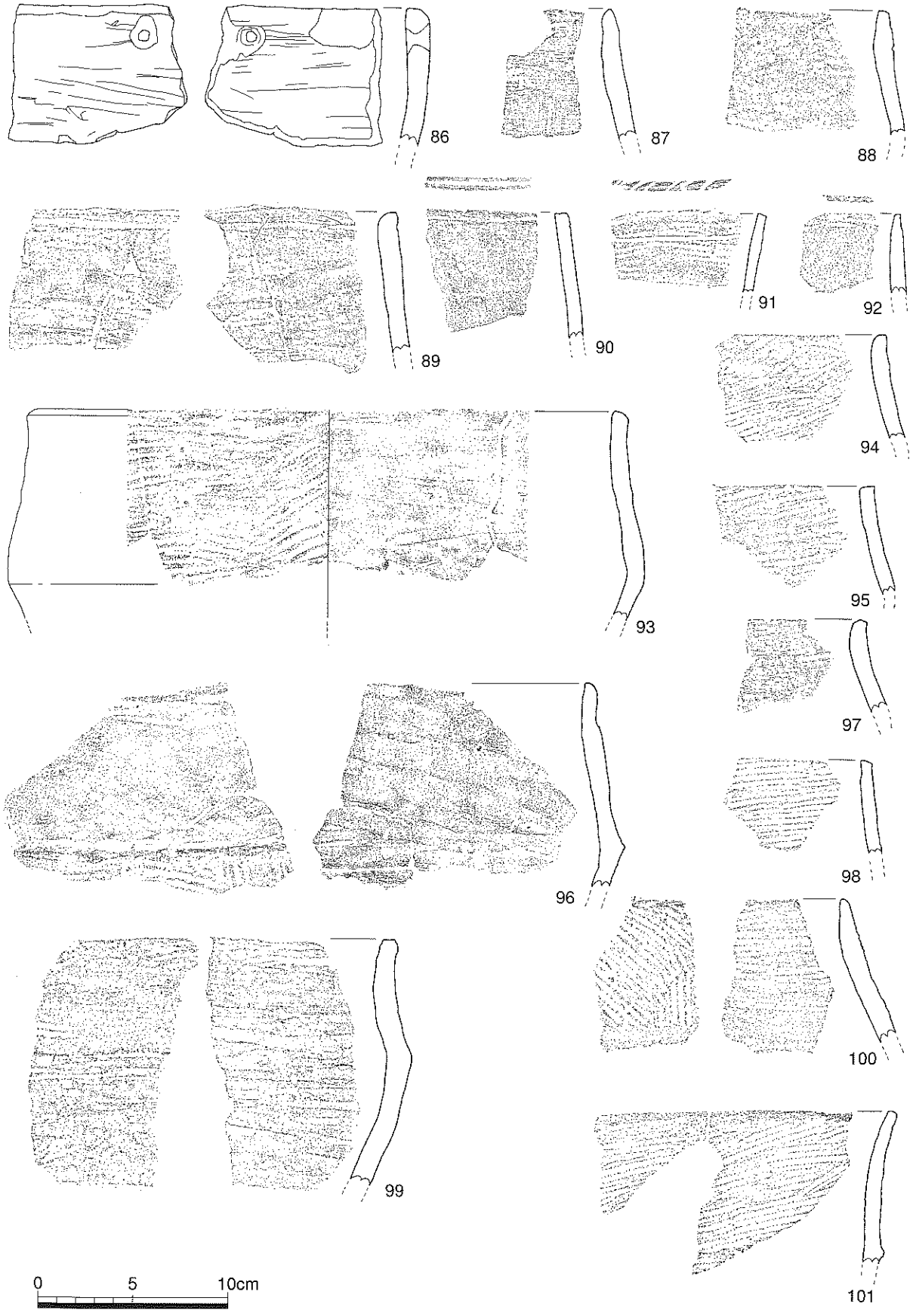
第27図　Ⅳ層出土土器・土製品②（S＝1/3）

第28図から第30図には、縄文時代後晩期～弥生時代前期の深鉢を掲載した。**68～74**はいわゆる「タガ状」口縁の資料である。**68・69**はやや短めで直立気味の口縁部拡張帯をもつものである。それぞれ２条、３条の凹線を外面に施す。**70～74**は前者に比して、広めの口縁部拡張帯を持つものである。**72・73**は外方への開きが大きい。**70**は拡張帯外面に凹線・沈線などの施文が施されない例である。**71・73**はいずれも５条の沈線を施す。**72**は復元口径31.8cmを測るものである。外面に４条の凹線を施す。**74**は器壁がやや薄めのものであり、外面に５条の沈線を施す。また、内面における体部との境界付近には１条の凹線がみられる。

75は幅広の口縁帯外面に６条の沈線が確認されるものである。器形はゆるく外反して開き、口縁端部の一箇所を内面側へ折り曲げている。



第28図　Ⅳ層出土土器・土製品③（S＝1／3）

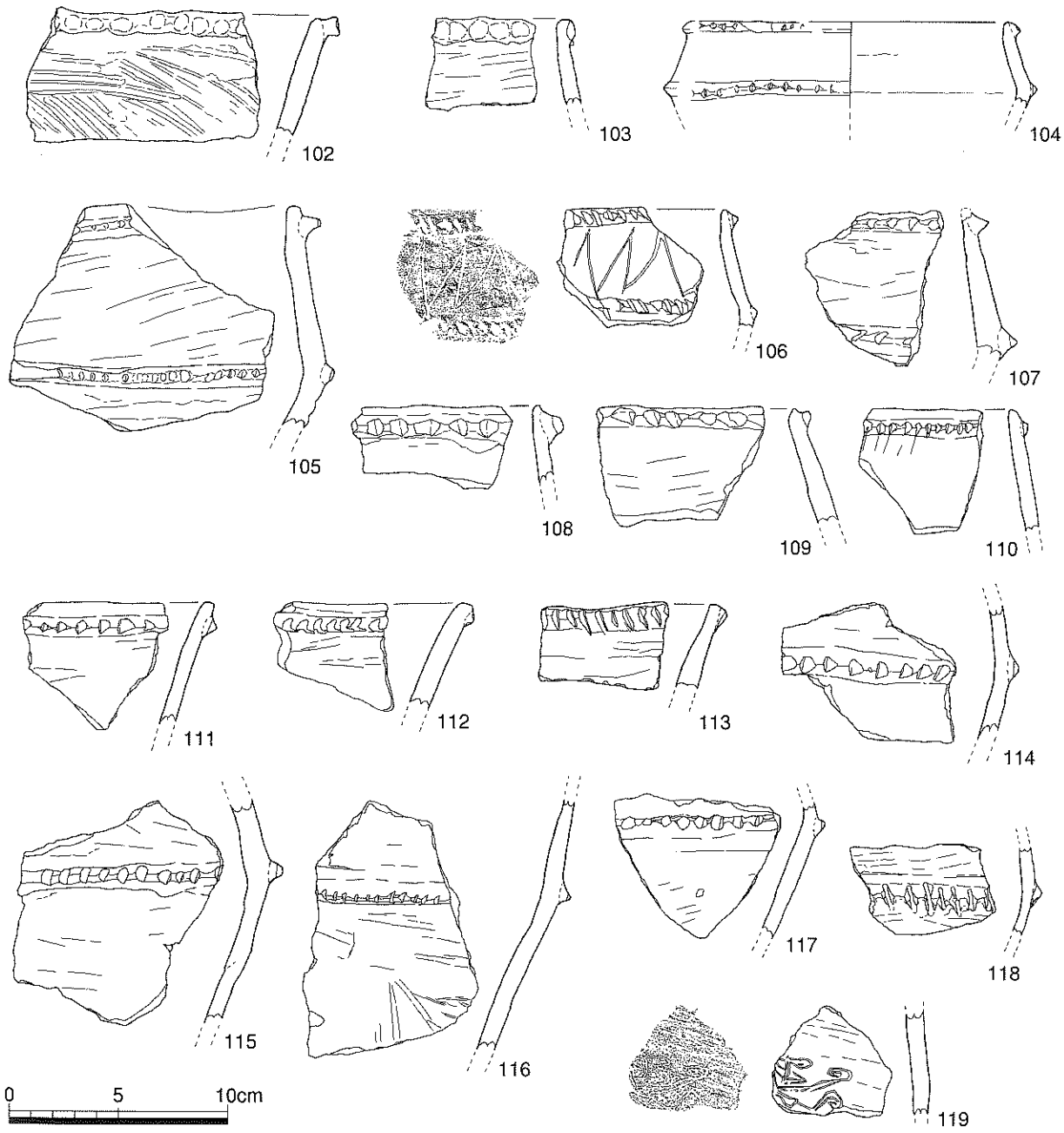


第29図　Ⅳ層出土土器・土製品④（S＝1／3）

76～79は口縁端部にリボン状突起を付加するものである。77は体部外面に二枚貝条痕の粗い調整が施される。80は口縁の内傾がやや強いものである。口縁端部に強いナデ調整が施されている。81は復元口径27.0cmであり、口縁はやや内傾する。口唇部に列点風の刺突を施している。82～84は口縁が直立気味または僅かに開く程度で、単純にすぼまる器形に復元できると考えられる。82・83・85の復元口径はそれぞれ20.5cm、17.0cm、16.8cmである。86は口縁端部付近に穿孔がみられる資料である。補修のために穿たれたものと考えられる。87～89は口縁がやや内傾する資料である。90～92は口唇部に装飾が施されるものである。90は口唇部の円周方向に沿って１条の沈線を施す。91は口唇部に、斜行する沈線状の工具刻みを施す。92は先細りした狭い口唇部に、棒状工具による小さい刺突を施す。93～101は胴部に屈曲を伴うもの、若しくはそのように想定した資料である。やや反り気味に内側へ傾くものが多い。93は口径31.8cmに復元されるものである。外面には粗い二枚貝条痕を施している。96は波状になる可能性がある。外面の屈曲部以下には粗い二枚貝条痕を施し、屈曲部より上位には擦過を施す。101は屈曲部より直立気味に立ち上がり、外方へ僅かに開く。

第30図には深鉢のうち刻目突帯文土器を中心に掲載している。102～113は口縁部、114～119は体部片である。102・103は指押さえによる刻目を施すものである。突帯はいずれも口縁端部に接している。102は外方へ開く器形である。突帯の上下を押さえる形で整形がなされている為、端部を外方へ折り曲げたような形状を呈する。外面には二枚貝条痕による粗い調整を施す。104～107は口縁部および屈曲部に刻目突帯を確認できる資料である。口縁部突帯は端部に接するか、または端部より僅かに下がった位置に巡らせる。104は口径が15.4cmに復元される小型品である。105は突帯間の間隔に若干の差異が認められ、波状口縁を呈する可能性がある。106は突帯間に山形文風の線刻を施している。108～110は口縁が内傾するものである。108・109は端部より少し下がった位置に突帯を貼り付け、やや大振りな指刻みを施す。110は口縁端部より少し下がった位置に低い突帯を貼り付け、小振りなヘラ刻みを施す。刻目の一部は、突帯のみでなく体部まで切り込んでいる。111～113は口縁が外側に開く形態のものである。111は端部よりやや下がった位置に突帯を貼り付け、ヘラ刻みを施す。112は角度の異なる２段階の棒刻みにより、外見上湾曲するような刻目を施す。113は口縁端部に接する位置に突帯を貼り付け、やや粗雑なヘラ刻みを施す。体部片である114～118のうち、116は突帯から口縁にかけて外側へ開く器形である。刻目はヘラによる小振りなものである。そのほかは、口縁に向かって内傾すると考えられるものである。114・115・117はヘラ刻みを施している。115は突帯貼付後の整形が雑である。118は突帯に粗い棒刻みを施しており、刻んだ際に突帯の粘土が下方へ引きずられた状態が見てとれる。119は線刻の残る資料である。部位について定かではないが106などを参考に、屈曲する深鉢の口縁下方の見立てで図化している。傾きも参考程度に考えてほしい。意匠については器面の左端にみられる上下方向の線表現を軸とし、ここから右側へ伸びる葉状の表現、蕨手風に巻き込む表現などがみられることから、植物を描いたものではないかと想定している。

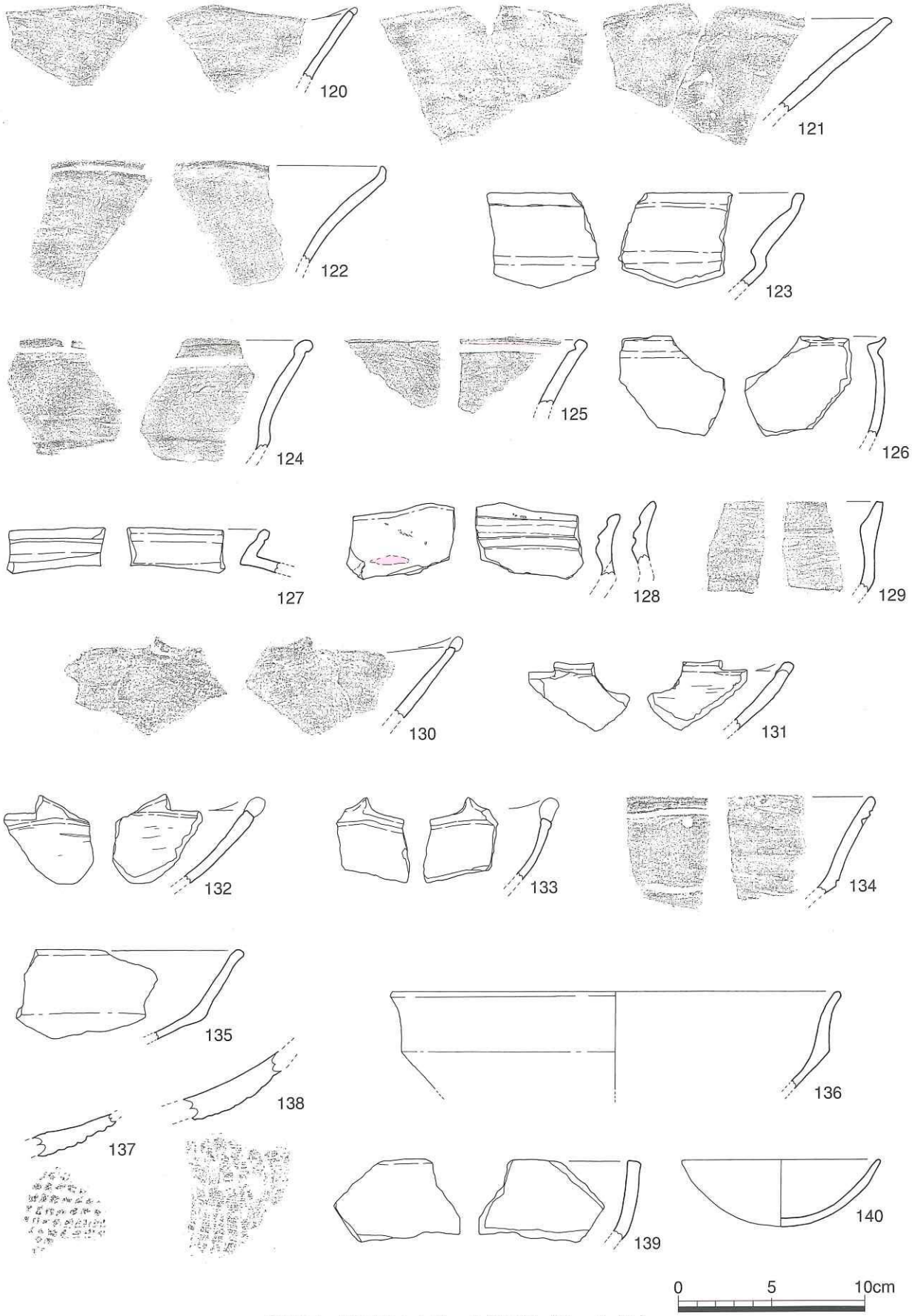
第31図・第32図には縄文時代後期から弥生時代前期にかけての浅鉢を掲載した。120は緩い波状を呈する口縁部である。121は直線的に大きく開く口縁部である。122～128は黒色磨研土器である。122は外反気味に大きく開く口縁部である。端部を上方へ小さく摘み出しており、横位の指ナデによって外面側が一条の凹線風となる。123は胴部付近でいったん内側へ短く屈曲した後に、外側へ開く口縁部である。内面の端部下方を押さえつけることで、口縁端部を肥厚させている。124は胴の屈曲部か



第30図　Ⅳ層出土土器・土製品⑤（S＝1／3）

ら外反気味に緩く開く口縁である。端部は肥厚しており、外面側に1条の沈線、内面側に段が見られる。**125**は直線的に開く口縁部である。内面には幅広の沈線を1条施す。沈線内に赤色顔料の痕跡が残る。**126**は体部がボウル状の器形で、口縁を外側へ短く折り曲げるものである。端部は僅かに上方へ摘み上げたような形状である。**127**は頸部から短く立ち上がる口縁部である。口縁端部は肥厚しており、外面に1条の沈線を施す。内面側は凹線状に窪ませる。肩張りの強い器形になると考えられる。**128**は緩い波状を呈する口縁部であり、内面側に2条の凹線を施す。ごく僅かながら赤色顔料の痕跡が観察できる。**129**は内面の一部を突出させて、口縁と体部の境を作り出す。

130〜**133**は口縁にリボン状突起を付加するものである。形態としては直線的に開くもの（**130**）、内湾するもの（**133**）、穏やかな内湾傾向が認められるもの（**131・132**）に分類される。**132・133**は内外

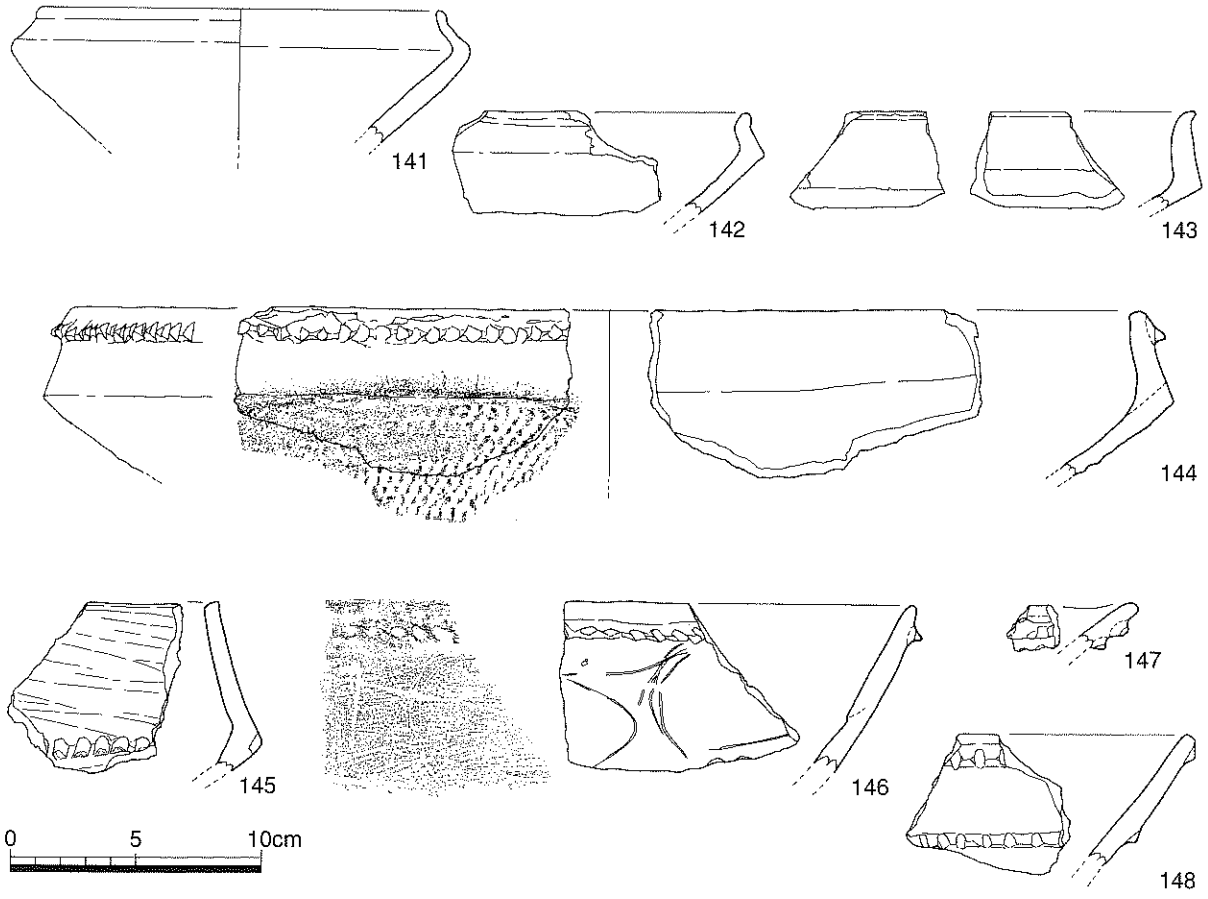


第31図　Ⅳ層出土土器・土製品⑥（S＝1／3）

面に１条ずつの沈線を施す。

134～136は胴の屈曲部から、さらに外方へ開く器形のものである。**134**は外面の口縁下と屈曲部に１条ずつの沈線を施す。口縁側の沈線下に穿孔を行おうとした痕が残るが、未貫通の状態で作業が終えられている。**135**は屈曲部から直線的に外方へ開く。**136**はいったん直立し、外反気味に少し開く。復元口径は24.3cmである。**137・138**は組織痕の残る土器であり、粗製浅鉢の体部下半と考えられるものである。**137**は網目、**138**はアンギンの組織痕である。**139**はボウル状の器形になると考えられる。器壁はやや厚めであり、口唇部は面取りする。**140**は浅い碗状の器形を呈するものであり、底部は丸底である。復元口径は10.8cmである。

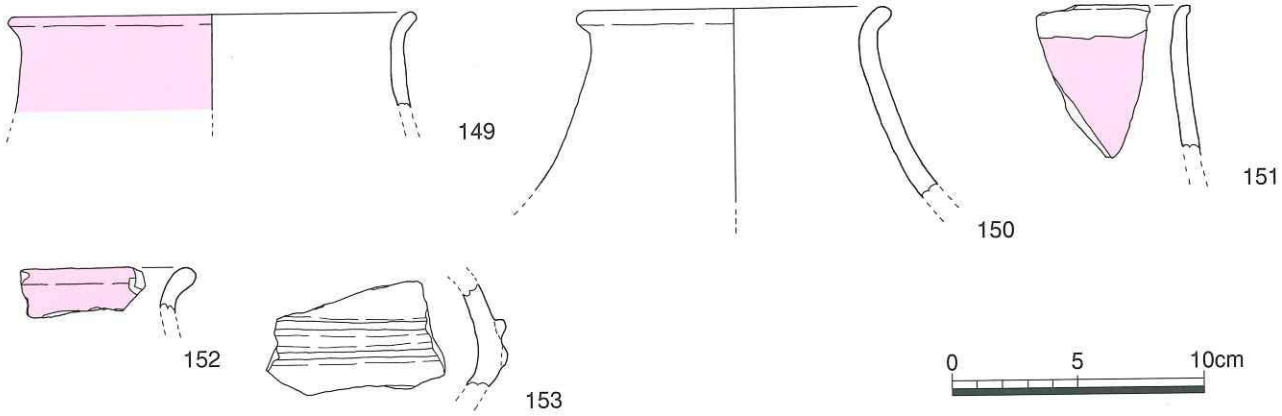
141～144は口縁が逆「く」字状であり、器体に対して短めの口縁を持つものである。**141**は復元口径16.1cmを測る。口縁を上方側へ緩く反らせ、体部の屈曲は丸みを伴う。**142・143**は体部の屈曲が鋭く、口縁端部を外側へ短く折り曲げている。**144**は復元口径42.5cmを測る大きめのサイズのものである。これも体部の屈曲は鋭い。口縁端部より少し下がった位置に刻目突帯を巡らせる。突帯貼付後のナデ整形はやや雑であり、刻目は大振りのヘラ刻みである。屈曲部以下には組織痕が見られるが、部分的なものであり礫石原式（黒川式併行）段階における型押し成形の技法とは様相が異なる。むしろ、そうした技法の痕跡器官と見なすべきであろう（注1）。**145**も逆「く」状を呈するが、口縁が長く、端部の折り曲げ、突帯貼付などは行われない。屈曲部外面には、竹管状の工具によって斜め下方へ押し込むように刻目を施す。



第32図　Ⅳ層出土土器・土製品⑦（S＝1／3）

146～148は外側へ単純に開く器形のものである。146は口縁端部より１cm程下がった位置に刻目突帯を巡らせる。外面には弧線を組み合わせたような線刻表現がみられる。147は外面の口縁下に刻目突帯を２条連続して貼付するものである。傾きは参考程度である。残存状況が悪く定かでないが、口縁が波状を呈する可能性もあるだろうか。148は外面の口縁下と体部に小さめの突帯を貼付し、棒刻みを施す。

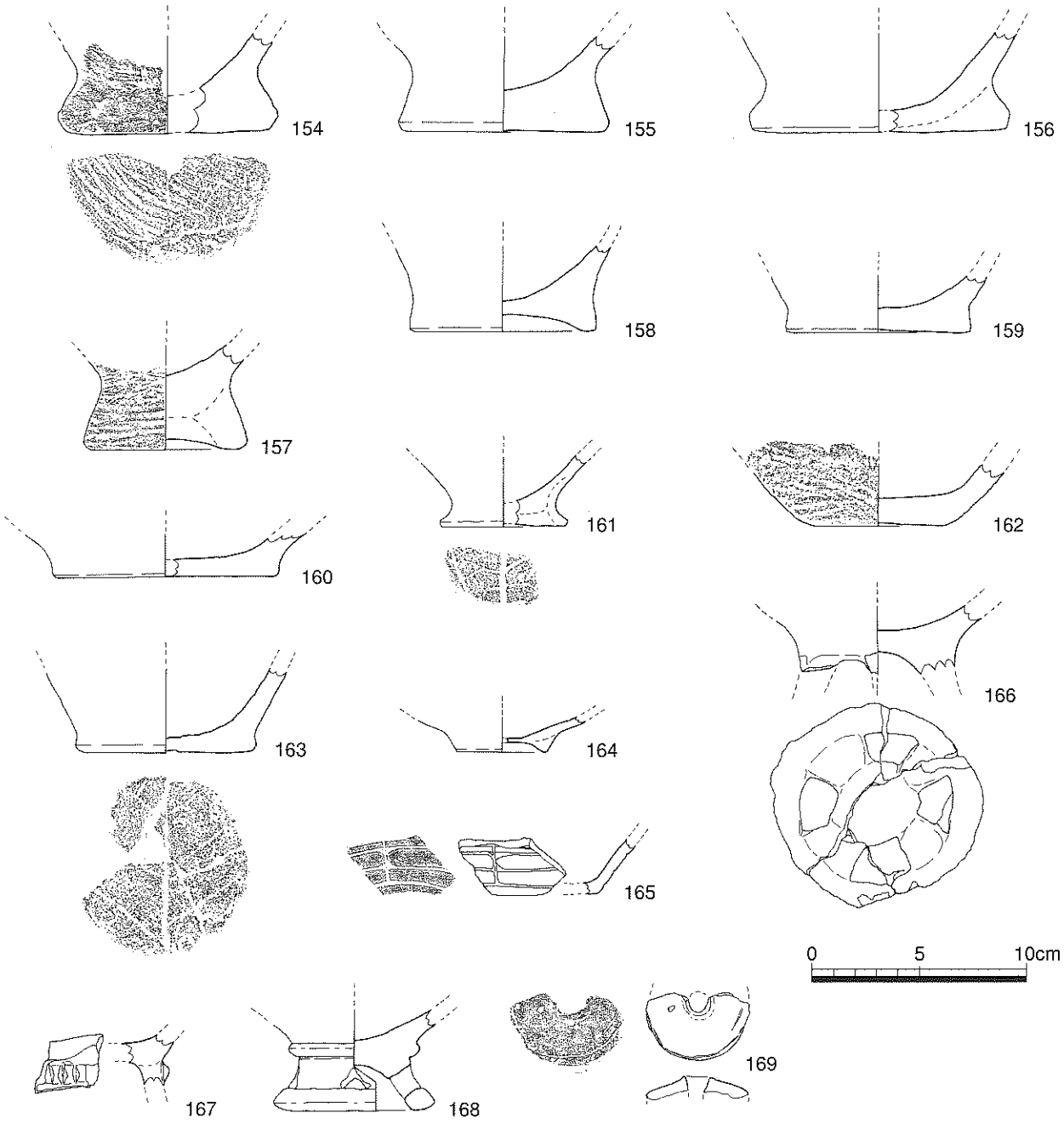
第33図は壷である。149～152は口縁部の資料である。強弱の程度差はあるが、端部は外方へ折り曲げられている。夜臼式のような肩張りの強い器形になると考えられる。149・150は口径が復元できる資料であり、それぞれ16.2cm、12.2cmを測る。152は端部がやや肥厚気味である。153は本節の冒頭で触れた弥生時代中期のものと考えられる壷胴部片である。外面の屈曲部あたりに断面台形状の突帯を２条巡らせる。149～152は内外面、153は外面に赤色顔料を施す。なお剥落により僅かな残存状況のものは、顔料範囲の図化を省略している。



第33図　Ⅳ層出土土器・土製品⑧（S＝1／3）

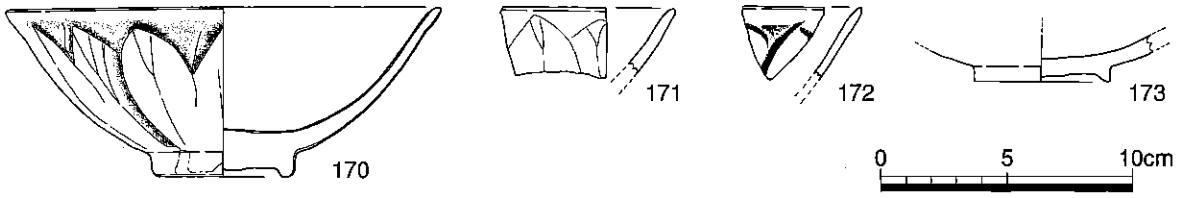
第34図は底部、脚部および土製品である。基本的に縄文時代晩期～弥生時代前期に属するものを掲載しているが、158と160については胎土が相対的にやや精良であり、形態面からも中期以降の弥生土器の可能性がある。深鉢と考えられる底部は154～156のように平底で外側へ張出すものが多い。157のような上げ底気味のものも若干みられる。154は底面に粗い二枚貝条痕のような圧痕が残る。161と163は底面に葉脈状の圧痕が残る。163は壷の底部と考えられる。焼成が不良で内面の大部分で器面の剥落がみられる。壷と考えられる資料には同様の状態ものがよくみられる。164・165は薄手の精製品で浅鉢のものと考えられる。165は外面に沈線による文様を描く。166は脚台を伴う土器の一部であり、体部と脚部の境界付近である。全て折損しているが、脚部の痕跡が４本確認できる。167は高坏の坏と脚の接合部と考えられる。外面の最も括れた部分に刻目突帯文を巡らせる。168は高坏の脚部である。接地部側の最も張り出す部分で、直径は7.5cmである。接地面から坏との境界までの高さは３cm程である。４方向から三角形の透かし孔を穿つが、あまり丁寧ではない。穿孔後の調整も雑であり、内面側では穿孔の際にはみ出した粘土の一部がそのまま残る。坏部との境界には無刻の突帯を１条巡らせる。169は紡錘車の紡輪であり、片面側の半分程度が残存している。直径は4.8cmを測る。内孔の径は器表面で1.3cm、内側に向けてすぼまっていき、確認できる部分で約半分の0.7cmになる。周縁を縁取るような形で線刻がみられる。器面には穀物のような圧痕が１箇所みられる。

第35図は中世の遺物を掲載した。170～172は龍泉窯系青磁碗である。外面にはいずれも太い鎬蓮弁



第34図　Ⅳ層出土土器・土製品⑨（S＝1／3）

文が施され、剣先の表現もしっかりとしている。また、器面にはガラス釉が掛かる。**170**は高台が完存、体部から口縁にかけては1／4程度が残存しており、完形品としての姿が窺える。やや浅めの碗であり、口縁端部付近が僅かに反り気味となる。口径は復元値で15.6cm、底径と器高は実測値でそれぞれ5.6cm、6.8cmである。見込み部分の器壁は1.5cmと分厚い。高台外面の一部、畳付、高台内面が露体である。色調はやや緑の深い緑灰色である。**171**は蓮弁文の立体感が強く、**170**と同じように蓮弁の中心線が剣先に向かって枝分かれする表現となっているが、蓮弁を縁取りするような表現はみられない。**172**は蓮弁の輪郭のみを線表現によって描いているものであり、蓮弁の中心線の表現は行われていない。



第35図　Ⅳ層出土土器・土製品⑩（S＝1／3）

173は瓦質土器碗の高台部分である。底径は実測値で5.6cmである。体部へ向けて大きく開く器形である。

表17　Ⅳ層出土土器・土製品観察表（1／4）

図	番号	グリッド	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
				内面	外面		内面	外面		
26	44	B-10	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	格子目押型文	良	押型文土器
	45	B-10	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	格子目押型文	良	押型文土器
	46	C-3	深鉢	にぶい黄橙色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	山形押型文	良	押型文土器
	47	C-9	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	擦過・ナデ	山形押型文（口唇部施文）	良	押型文土器
	48	B-5	深鉢	にぶい黄橙色	明黄褐色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	ナデ	山形押型文（口唇部施文）	良	押型文土器
	49	B-7	深鉢	灰黄褐色	黒褐色 にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	山形押型文	良	押型文土器
	50	B-9	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	山形押型文	良	押型文土器
	51	G-9	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	磨滅	山形押型文	良	押型文土器
	52	B-10	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒・砂粒	ナデ	山形押型文	良	押型文土器
	53	B-9	深鉢	にぶい黄橙色	橙色	石英・長石・角閃石・砂粒	ナデ	楕円押型文	良	押型文土器
	54	C-4	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・砂粒	ナデ	楕円押型文	良	押型文土器
	55	B-10	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	ナデ	楕円押型文（口縁下ナデ消し）	良	押型文土器
	56	B-10	深鉢	灰黄色	にぶい黄橙色	長石・角閃石	ナデ	楕円押型文	良	押型文土器
	57	B-10	深鉢	浅黄色	黄灰	石英・長石・角閃石・砂粒	ナデ	楕円押型文（口縁部ナデ消し）	良	押型文土器
	58	C-8	深鉢	にぶい黄褐色	浅黄色	石英・長石・角閃石	楕円押型文（口唇部施文）	ナデ	良	押型文土器
	59	C-8	深鉢	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・砂粒	ナデ	楕円押型文	良	押型文土器
	60	B-9	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	楕円押型文	良	押型文土器
	61	B-10	底部	浅黄色	明黄褐色	石英・長石・角閃石・砂粒	ナデ	楕円押型文 底面に網代状圧痕	良	B-10Ⅲ層との接合資料 押型文土器
	62	C-9	土製品	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	楕円押型文	良	押型文土器
27	63	D-7	深鉢	淡黄色	暗灰黄色	石英・長石・角閃石・砂粒	ナデ	研磨　口縁部：押点、沈線２条	良	
	64	D-7	深鉢	明黄褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石・砂粒	ナデ	研磨　口縁部：沈線２条、下端に縄文帯	良	
	65	J-9	深鉢	にぶい黄橙色	黒褐色	石英・長石・角閃石・赤褐色粒	ナデ	磨消縄文　刺突	良	
	66	C-6	深鉢	にぶい黄橙色	浅黄色	石英・長石・角閃石	擦過・ナデ	磨滅　平行沈線　棒状工具による刺突	良	
	67	J-8	深鉢	にぶい黄褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石・砂粒	研磨	磨消縄文・沈線４条	良	
28	68	D-7	深鉢	明黄褐色	明黄褐色	石英・長石・赤色粒子	ナデ	ナデ・凹線２条	良	
	69	D-6	深鉢	明赤褐色	黒褐色	石英・長石	研磨	研磨・凹線３条	良	
	70	D-5	深鉢	にぶい黄橙色	明黄褐色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	ナデ	良	

表17　Ⅳ層出土土器・土製品観察表（2/4）

図	番号	グリッド	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
				内面	外面		内面	外面		
28	71	G-9	深鉢	灰黄褐色	にぶい褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	沈線5条	良	
	72	C-6	深鉢	にぶい褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨・凹線4条	良	
	73	D-6	深鉢	にぶい褐色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	沈線5条	良	
	74	D-6	深鉢	黄灰色	黒褐色	石英・長石・角閃石	研磨・屈曲部に凹線1条	研磨・沈線5条	良	
	75	C-9	深鉢	褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石・金雲母	ナデ	ナデ・沈線6条	良	
	76	E-8	深鉢	にぶい黄色	暗灰黄色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	リボン状突起
	77	C-5	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕	良	リボン状突起
	78	D-7	深鉢	黄褐色	暗灰黄色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	リボン状突起
	79	C-2	深鉢	明黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過	良	リボン状突起
	80	C-2	深鉢	黒褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕・ナデ	良	
	81	F-9～10	深鉢	赤褐色	赤褐色	石英・長石・角閃石	擦過	条痕	良	口唇部刺突
	82	F-9～10	深鉢	にぶい褐色	灰褐色	石英・長石・雲母	擦過	条痕	良	煤付着
	83	C-4	深鉢	黒褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	擦過→ナデ	擦過	良	
	84	D-5	深鉢	にぶい黄褐色	黒褐色	石英・長石	粗い擦過	条痕	良	
	85	D-3	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石	擦過	条痕	良	煤付着
29	86	K-9	深鉢	明褐色	褐灰色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過	良	穿孔
	87	D-6	深鉢	にぶい黄橙色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	ナデ	良	
	88	L-8	深鉢	黄褐色	灰褐色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過	良	煤付着
	89	C-7	深鉢	黒褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過	良	
	90	E-8	深鉢	黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	口唇部沈線
	91	J-8	深鉢	橙色	橙色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	擦過	良	口唇部刻目
	92	F-8	深鉢	にぶい褐色	にぶい褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	口唇部刺突
	93	M-9	深鉢	橙色	黒褐色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	擦過・ナデ	条痕	良	
	94	G-9	深鉢	黒褐色	褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	粗い擦過	良	
	95	C-4	深鉢	橙色	橙色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	粗い擦過	良	
	96	J-8	深鉢	黒褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・砂礫	ナデ	口縁：擦過 体部：条痕	良	
	97	K-9	深鉢	黒褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	擦過	擦過	良	
	98	H-9	深鉢	黄灰色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕	良	
	99	L-8	深鉢	黒色	褐色	石英・長石・赤色粒子	擦過	擦過	良	
	100	D-4	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	条痕→ナデ	条痕	良	
	101	L-8・L-9	深鉢	にぶい黄橙色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石	擦過	条痕	良	
30	102	L-8	深鉢	明黄褐色	にぶい赤褐色	石英・長石・角閃石	擦過	条痕	良	刻目突帯文（指刻み）
	103	I-9	深鉢	黄灰色	黄褐色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過	良	刻目突帯文（指刻み）
	104	C-9	深鉢	黄褐色	黄褐色	石英・長石・赤色粒子	ナデ	擦過	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	105	D-4	深鉢	橙色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕	良	刻目突帯文（棒刻み）
	106	I-9	深鉢	黄橙色	暗褐色	石英・長石	ナデ	ナデ・線刻	良	刻目突帯文（棒刻み）
	107	B-7	深鉢	浅黄色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	108	H-7～8	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（指刻み）
	109	D-8	深鉢	灰黄色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過	良	刻目突帯文（指刻み）

表17　Ⅳ層出土土器・土製品観察表（3/4）

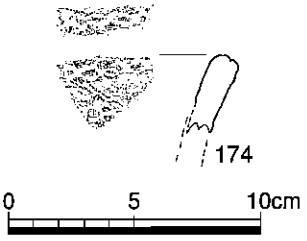
図	番号	グリッド	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
				内面	外面		内面	外面		
30	110	K-9	深鉢	明黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石	擦過・ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	111	D-9	深鉢	にぶい橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	112	K-9	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（棒刻み）
	113	I-9	深鉢	明黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石	ナデ	擦過	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	114	B-9	深鉢	にぶい褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	115	I-9	深鉢	黄褐色	褐色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過・ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	116	H-7～8	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過・ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	117	K-9	深鉢	黒褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	118	I-8	深鉢	にぶい黄橙色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過	良	刻目突帯文（棒刻み）
	119	H-8	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過・線刻	良	
31	120	C-3	浅鉢	にぶい黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨	良	
	121	C-4	浅鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	擦過・ナデ	ナデ	良	
	122	C-6	浅鉢	黒褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	研磨・ナデ	研磨・ナデ	良	
	123	D-7	浅鉢	灰色	浅黄色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨	良	
	124	F-9～10	浅鉢	黄灰色	にぶい黄色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨・ナデ・沈線１条	良	
	125	F-9～10	浅鉢	黒褐色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨・沈線１条	研磨	良	赤色顔料
	126	C-8	浅鉢	灰黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	研磨	研磨	良	
	127	C-6	浅鉢	黒褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨・沈線１条	良	
	128	D-5	浅鉢	黒褐色	黒褐色	石英・長石・金雲母	凹線２条	ナデ	良	赤色顔料
	129	E-8	浅鉢	橙色	橙色	石英・長石	研磨	研磨	良	
	130	L-8	浅鉢	暗赤褐色	暗赤褐色	石英・長石・金雲母	擦過・ナデ	擦過	良	リボン状突起
	131	D-3	浅鉢	褐灰色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨	良	リボン状突起
	132	L-8	浅鉢	にぶい黄色	にぶい黄色	石英・長石	研磨・ナデ・沈線１条	研磨・ナデ・沈線１条	良	リボン状突起
	133	C-3	浅鉢	黄褐色	黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨・沈線１条	研磨・沈線１条	良	リボン状突起
	134	K-9	浅鉢	黒色	にぶい赤褐色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨　沈線２条 未貫通穿孔	良	
	135	C-5	浅鉢	明黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	136	L-8	浅鉢	明褐色	褐色	石英・長石	研磨・ナデ	研磨・ナデ	良	
	137	C-3	浅鉢	にぶい褐色	黒色	石英・長石・金雲母	ナデ	組織痕・網目	良	
	138	L-9	浅鉢	黒色	にぶい黄褐色	石英・長石・金雲母	ナデ	組織痕・アンギン	良	
	139	H-9	浅鉢	暗灰黄色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨	良	
	140	C-4	浅鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄褐色	石英・長石	研磨・ナデ	研磨・ナデ	良	
32	141	H-9	浅鉢	灰黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石	研磨・ナデ	研磨	良	
	142	D-10	浅鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	143	A-10	浅鉢	にぶい黄色	にぶい黄橙色	石英・長石	研磨	研磨	良	
	144	K-9	浅鉢	黒褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ 組織痕・網目	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）・煤付着
	145	K-8	浅鉢	黒褐色	暗赤褐色	石英・長石・金雲母・砂礫	擦過・ナデ	擦過	良	刻目（刺突）
	146	H-9	浅鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ・線刻	良	刻目突帯文（棒刻み）
	147	G-9	浅鉢	にぶい橙色	黒	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（刺突）
	148	B-7	浅鉢	にぶい黄褐色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（棒刻み）

表17　Ⅳ層出土土器・土製品観察表（4/4）

図	番号	グリッド	器種	色調 内面	色調 外面	胎土	調整・文様 内面	調整・文様 外面	焼成	備考
33	149	D-9	壷	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色	石英・長石・雲母	ナデ（磨滅） 赤色顔料（痕跡）	研磨 赤色顔料	良	
	150	I-8	壷	橙色	橙色	石英・長石・砂礫	磨滅 赤色顔料（痕跡）	磨滅 赤色顔料（痕跡）	良	
	151	C-4	壷	にぶい橙色	明赤褐色	石英・長石	ナデ（磨滅） 赤色顔料	研磨 赤色顔料	良	
	152	D-6	壷	橙色	橙色	石英・長石	研磨 赤色顔料	研磨 赤色顔料	良	
	153	I-9	壷	明黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・砂礫	ナデ（剥落）	磨滅 赤色顔料（痕跡）	良	
34	154	D-7	底部	黒褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕	良	底面に圧痕
	155	C-5	底部	にぶい黄橙色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	156	I-9	底部	明黄褐色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	157	H-9	底部	にぶい褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕・ナデ	良	
	158	C-3	底部	明黄褐色	明褐色	石英・長石・角閃石・砂礫	ナデ	ナデ	良	
	159	L-8	底部	にぶい黄橙色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	160	F-8	底部	にぶい黄橙色	黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	161	C-6	底部	黄灰色	黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	底面に葉脈状圧痕
	162	D-9	底部	にぶい褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石・砂礫	ナデ	条痕・ナデ	良	
	163	I-9	底部	黒色（剥落）	黄橙色	石英・長石・砂礫	剥落	磨滅	不良	底面に葉脈状圧痕
	164	F-9～10	底部	灰黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・雲母	ナデ	研磨	良	
	165	D-3	底部	黒褐色	灰黄褐色	石英・長石	研磨	研磨・沈線	良	
	166	C-5	脚部	黒色	橙色	石英・長石・角閃石	研磨	ナデ	不良	
	167	D-9	脚部	橙色	橙色	石英・長石・角閃石・砂礫	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	168	D-3	脚部	明赤褐色	明赤褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ・無刻突帯 三角形透かし	良	
	169	K-8	土製品	明褐色	―	石英・長石・角閃石	―	ナデ・線刻	良	紡輪
35	170	C-4	碗	灰オリーブ	灰オリーブ	精製	無文	蓮弁文	良	龍泉窯系青磁
	171	D-9	碗	にぶい黄色	にぶい黄色	精製	無文	蓮弁文	良	龍泉窯系青磁
	172	D-8	碗	灰オリーブ	灰オリーブ	精製	無文	蓮弁文	良	龍泉窯系青磁
	173	F-8	底部	灰黄色	灰色	長石	ナデ	ナデ	良	瓦質土器

Ⅲ層出土の土器・土製品（第36～41図、表18、図版15～18）

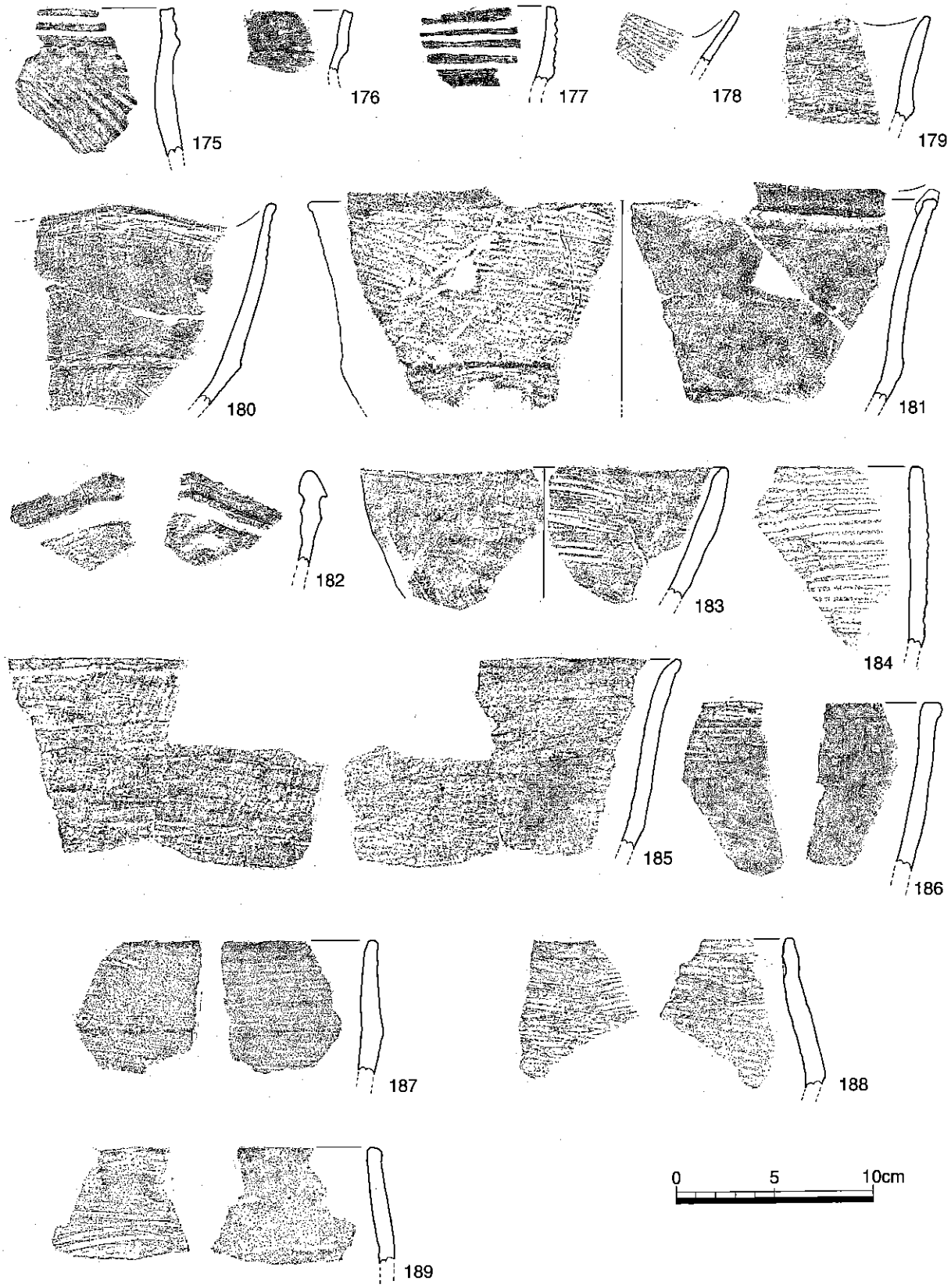
縄文時代早期の押型文土器は、Ⅳ層に比べると出土数が大幅に少ない。遺物の特徴などはⅣ層と変わりなく、少ない点数ながら楕円形の押型文が主体を占めるという傾向も同じくしている。Ⅳ層出土分で見られなかった例として、口唇部に外面施文と同一原体による楕円の押型文を施すものを第36図**174**に掲載しているが、Ⅳ層のものと同時期におけるバリエーションの一つとみなすのが適当であろう。



第36図　Ⅲ層出土土器・土製品①（S＝1/3）

第37図は縄文時代後晩期～弥生時代前期の深鉢である。**175～177**はタガ状口縁のものである。**175**は短めの口縁拡張帯外面に2条の凹線を施す。口縁から頸部にかけての屈曲は弱く、全体が直立気味

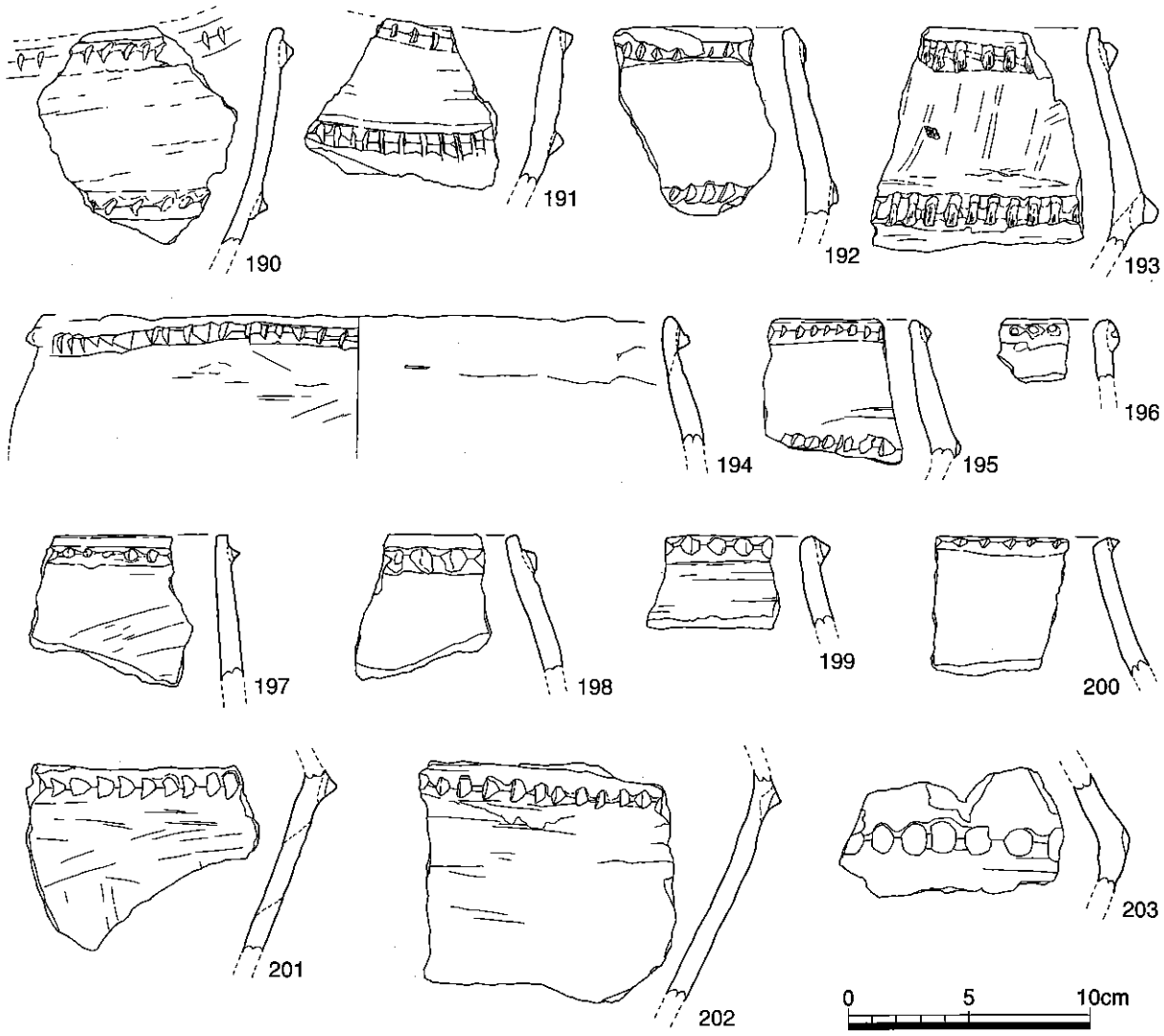
である。176は口縁帯に文様を施さないものである。177は凹線の間隔が左側でやや狭く、波状となる可能性がある。



第37図　Ⅲ層出土土器・土製品②（S＝1／3）

178は波状口縁の波頂部である。斜行する４条の沈線が外面の左側で交わる。179・180は胴の屈曲部から外方に開く器形で、口縁は波状を呈する。179は口縁が反り気味であり、180は僅かに内湾傾向である。181は胴屈曲部から反り気味に開く器形であり、復元口径は32.4cmを測る。口縁端部には幅広の突起を付加している。内面側からの付加であり、内面には明瞭な段が残る。外面は粗い条痕調整である。182は波状口縁であり、端部は肥厚する。内外面とも口縁下には太い凹線状の文様を１条ずつ施す。素口縁の深鉢には、口縁が外方へ開くもの（183・185・186）、直立気味のもの（184・187）、内傾するもの（188・189）がみられる。口縁自体にも直線的なもの、内湾傾向のもの、反り気味のものがある。胴部には屈曲を伴うものと、単純に底部へ向かってすぼまるものが認められる。外面調整は擦過または条痕、内面調整はナデまたは擦過による場合が多い。

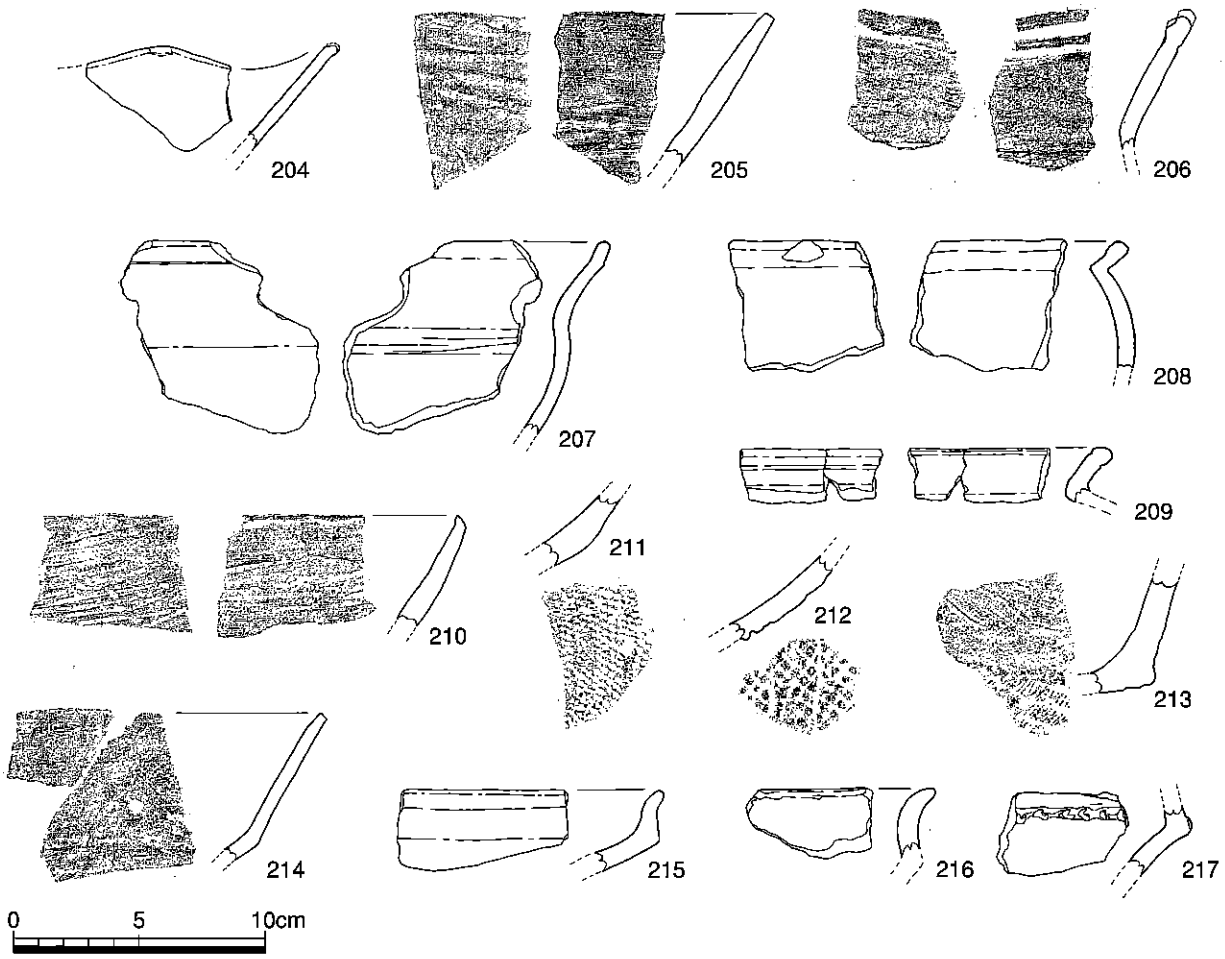
第38図は刻目または刻目突帯文を伴う深鉢である。190・191は波状口縁になると考えられるものであり、口縁と胴部に１条ずつ巡る突帯間の距離に差異が認められる。胴部側の突帯貼付位置は器形の屈曲を伴わず、ゆるやかに底部へと向かう。突帯の刻みは190がヘラ刻み、191が棒刻みによる。192・193・195は胴部での屈曲が確認できる資料である。いずれも口縁は内傾し、口縁と胴屈曲部に一条の



第38図　Ⅲ層出土土器・土製品③（S＝1／3）

刻目突帯を巡らせる。193はⅢ層・Ⅳ層間の接合資料である。紙面の都合によりⅢ層へ含めて掲載している。厚みのある板状工具の小口を上下にずらし押し当て、大振りの刻目を作り出している。刻目内部にみられる小口痕の切り合いによって、「上→下」の順で施文された事が判る。194は口径が26.1cmに復元されるものである。成形段階の調整が粗雑であり、内面においては、粘土板の接合痕が明瞭に残る。突帯貼付後のナデ調整、刻目も丁寧ではない。復元図化により表現が漏れた恰好であるが、破片右端においては本来刻目が施されるべき間隔の位置に、刻目が施されていない（図版16参照）。196は口縁端部に接する位置に突帯を貼り付け、棒状工具による刺突によって刻目を施すものである。197・198は内傾する口縁であり、口縁端部よりやや下がる位置に刻目突帯を巡らせる。刻目はいずれも指刻みによる。199・200は口縁端部に接する位置に刻目突帯を巡らせる。200の刻目は小振りなヘラ刻みである。201～203は体部片である。201・202は屈曲部にヘラ刻みの突帯を巡らせる。203もⅢ層・Ⅳ層の接合資料である。便宜的にⅢ層へ含めた。屈曲部に直接、指押さえによる刻みを施す。

第39図は浅鉢である。204・205は直線的に開く口縁部である。204は波状を呈し、波頂部が小突起状となる。206は緩い波状を呈し、口縁内面には凹線状の文様を２条施す。外面では端部下の段状となる箇所に赤色顔料の痕跡がわずかに残る。体部との境界は、内面で明瞭な稜を伴う。207は体部がいったん内湾気味に立ち上がり、緩やかな屈曲で口縁が開く。端部はやや上方へ向け、外面に浅い沈

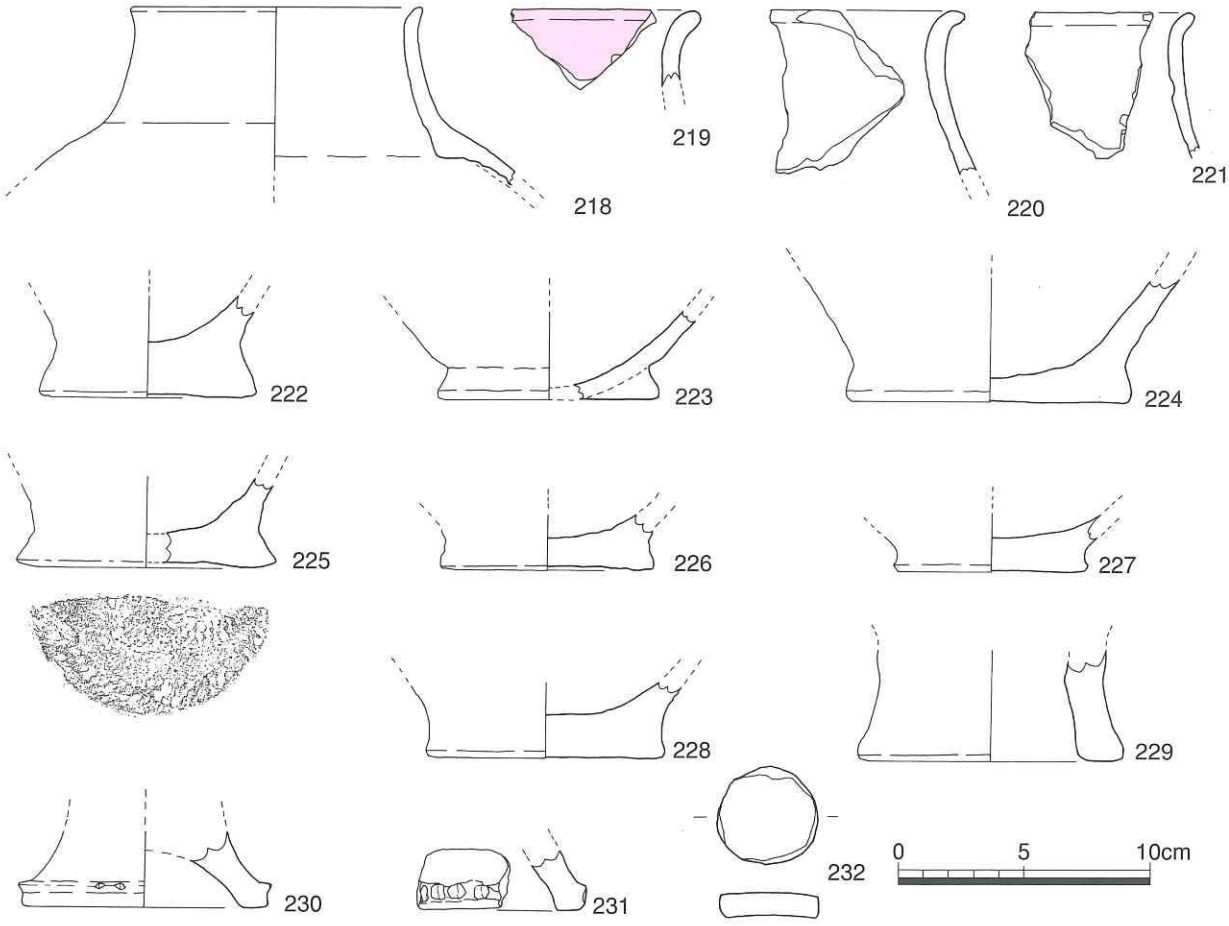


第39図　Ⅲ層出土土器・土製品④（S＝1／3）

線を１条施す。208は丸みのある体部から、口縁が「く」字状に短く屈曲する。口縁端部は肥厚する。209は短く開く口縁部であり、端部はやや肥厚する。内外面に１条ずつの沈線を施す。210は碗形に開く口縁部であり、端部は先細りする。211～213は組織痕の残る資料であり、番号順に籠目、網目、アンギンである。213は口縁と体部の境界が強く屈曲しており、外面側はやや突き出した状態となっている。214は体部の屈曲部から、口縁が直線的に開く。215は強く屈曲して口縁が短く立ち上がり、端部は小さく外反する。216は強く外反する口縁部である。217は屈曲する体部片であり、屈曲部に刺突による刻目を施す。

第40図218～221は壷である。特徴としては長めの口縁を持ち、内傾の度合いはさほど高くない。Ⅳ層にみられたもの同様、夜臼式に類似する形態の資料として捉えられる。やはり程度の強弱はあるが、端部は外反する傾向にある。218は復元口径が11.7cmを測る。肩張りの強い器形である。219は端部がやや肥厚気味のものであり、内外面に赤色顔料を塗布する。220は端部付近の反りが強い。

222～232は底部・脚部・土製品である。縄文時代晩期～弥生時代前期の深鉢と考えられる222～226は、Ⅳ層出土のものと同様に平底で、接地部が外側に張出す傾向にある。225は底面に網目状の圧痕が残る。228は弥生時代中期以降の可能性がある。229～231は脚部の資料である。230は脚端部に断面三角形の小さい突帯を巡らせ、刻目を施す。231は脚端部の外面に直接刻目を施す。232は土器片を円

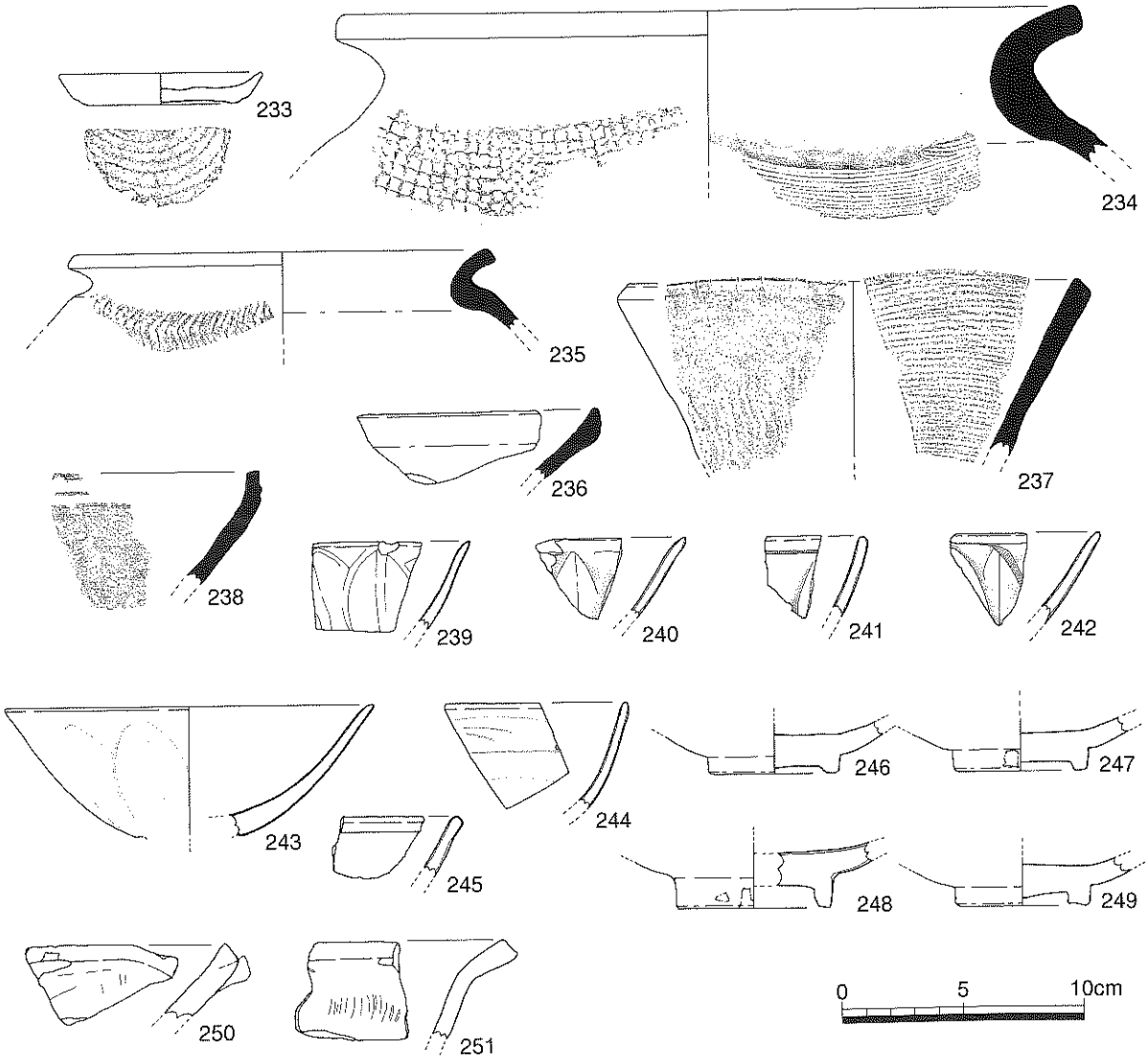


第40図　Ⅲ層出土土器・土製品⑤（S＝1／3）

盤状に打ち欠いたと考えられる土製品であり、直径約3.6cmを測る。

第41図には中世以降の資料を掲載した。233は土師皿であり、口径8.4cmを測る。底の切り離しはヘラ切りによる。234～238は須恵器である。234・235は口縁が短く外反する甕である。234は口径が約30.7cmと大型に復元されるもので、器壁も厚手である。外面肩部に格子目タタキ、頸部内面にカキメを施す。235は復元口径17.1cmを測る。外面肩部に羽状文風のタタキを施す。236は鉢の口縁であり、端部は肥厚する。東播系か。237はこね鉢である。口径は復元値で18.8cmとなる。内面に横位の粗いハケ調整を施しており、擂鉢としても機能し得る。238は直線的に開き、端部を上方へ折り曲げる口縁部である。鉢の一種であるだろうか。端部外面に２条の凹線を施す。

239～249は龍泉窯系青磁碗である。うち239～245は口縁部、246～249は高台を伴う底部資料である。239～243は外面に太い蓮弁文を描くものである。239・240・242は立体感のある鎬蓮弁である。241は蓮弁文の状態が判然としないが、直口気味の口縁形態と、口縁外面に１条の界線を描く点が特徴的である。243は線描きによる蓮弁文であり、剣先の表現がやや曖昧となるなど文様の退化傾向がみられ



第41図　Ⅲ層出土土器・土製品⑥（S＝1／3）

る。復元口径は15.3cmを測る。**244**は直口口縁である。外面の文様は雷帯文の一種か。**245**は口縁が肥厚気味のものである。底部資料は共通して内面、体部から高台の外面および畳付を施釉し、高台内面のみを露体とする。見込み部分の器壁は厚みがある。**246・247・249**は底径が約5.4cmでまとまる。**248**は底径が6.4cmと一回り大きいものであり、高台もやや高めである。

250・251は瓦質土器である。**250**は片口鉢の口縁である。口唇部を面取りする。**251**は鉢であり、口縁を軽く外方へ折り曲げるものである。端部付近はやや肥厚しており、口唇部は面取りする。

注1）中尾篤志氏より、肥賀太郎遺跡（中尾編2006）の調査を事例に教示頂いた。器壁も肥賀太郎遺跡出土品の方が分厚い造りで、差異が認められるとの事である。

＜参考文献＞

諫見富士郎編 2001『大野原遺跡』焼土群・粘土貯蔵穴群を伴う縄文時代後期の調査報告
有明町文化財調査報告書第12集　有明町教育委員会
清田純一 1998「縄文後・晩期土器考」『肥後考古』第11号　肥後考古学会
小林達雄編 2008『総覧　縄文土器』『総覧　縄文土器』刊行委員会
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社
辻田直人・竹中哲郎編 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報
国見町文化財調査報告書第３集　国見町教育委員会
中尾篤志編 2006『肥賀太郎遺跡』県道愛野島原線上流付替工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
長崎県文化財調査報告書第189集　長崎県教育委員会
藤尾新一郎 1990「西部九州の刻目突帯文土器」国立歴史民俗博物館研究報告第26集
宮地総一郎 2004a「刻目突帯文土器県の成立（上）」『考古学雑誌』88巻１号　日本考古学会
2004b「刻目突帯文土器県の成立（下）」『考古学雑誌』88巻２号　日本考古学会

表18　Ⅲ層出土土器・土製品観察表（1/2）

図	番号	グリッド	器種	色調 内面	色調 外面	胎土	調整・文様 内面	調整・文様 外面	焼成	備考
36	174	D-9	深鉢	明黄褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	楕円押型文（口唇部施文）	良	押型文土器
37	175	C-10	深鉢	橙色	にぶい橙色	石英・長石	研磨（磨滅）	条痕・研磨 凹線２条	良	
	176	D-6	深鉢	にぶい橙色	黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	177	D-4	深鉢	にぶい黄橙色	暗灰黄色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ・凹線４条	良	
	178	C-6	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ・沈線４条	良	
	179	D-3	深鉢	にぶい黄橙色	暗灰黄色	石英・長石・角閃石	擦過	擦過	良	
	180	D-4	深鉢	黄褐色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過・ナデ	良	
	181	D-3	深鉢	にぶい黄色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕・ナデ	良	口縁部突起
	182	J-9	深鉢	暗灰黄色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	擦過・ナデ 凹線１条	擦過・ナデ 凹線１条	良	
	183	D-2	深鉢	黒褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	条痕・ナデ	擦過・ナデ	良	
	184	D-2	深鉢	黒色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕	良	
	185	D-4	深鉢	にぶい黄褐色	黒褐色	石英・長石・砂礫	擦過	擦過	良	
	186	E-8	深鉢	明黄褐色	暗褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕・ナデ	良	
	187	C-1	深鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過・ナデ	良	
	188	C-6	深鉢	明赤褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石・砂礫	擦過	粗い擦過	良	
	189	C-8	深鉢	にぶい黄橙色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	条痕・ナデ	良	
38	190	D-8	深鉢	明黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石	擦過・ナデ	擦過	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	191	B-8	深鉢	にぶい黄橙色	灰黄色	石英・長石・金雲母	ナデ	擦過	良	刻目突帯文（棒刻み）
	192	L-9	深鉢	明黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	193	C-6 Ⅲ B-5 Ⅳ	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過	良	刻目突帯文（板状工具）
	194	L-9	深鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	擦過・ナデ	擦過・ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	195	D-8	深鉢	明黄褐色	橙色	長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	196	G-9	深鉢	橙色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（刺突）
	197	J-9	深鉢	明黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石	ナデ	擦過・ナデ	良	刻目突帯文（指刻み）
	198	I-8	深鉢	明褐色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（指刻み）
	199	D-2	深鉢	にぶい黄橙色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過・ナデ	良	刻目突帯文（指刻み）
	200	D-8	深鉢	にぶい黄褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）・煤付着
	201	L-8	深鉢	黒褐色	浅黄色	石英・長石・角閃石	擦過・ナデ	擦過・ナデ	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	202	L-8	深鉢	暗灰黄色	にぶい黄褐色	石英・長石	擦過	擦過	良	刻目突帯文（ヘラ刻み）
	203	J-9 Ⅲ J-8 Ⅳ	深鉢	浅黄色	暗灰黄色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目（指刻み）
39	204	D-4	浅鉢	褐灰色	にぶい褐色	石英・長石・角閃石・金雲母	研磨・ナデ	研磨・ナデ	良	
	205	D-8	浅鉢	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨	擦過・研磨	良	
	206	E-10	浅鉢	黒褐色	褐灰色	石英・長石・角閃石	研磨・凹線１条	研磨 赤色顔料（痕跡）	良	黒色磨研
	207	D-7	浅鉢	黒褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	研磨	研磨・沈線１条	良	黒色磨研
	208	D-7	浅鉢	黒褐色	黒褐色	石英・長石・角閃石	研磨・ナデ	研磨・ナデ	良	
	209	C-1・G-8	浅鉢	暗灰黄色	暗灰黄色	石英・長石・角閃石	研磨・沈線１条	研磨・沈線１条	良	
	210	D-2	浅鉢	黄灰色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	擦過・ナデ	擦過	良	
	211	L-8	浅鉢	暗黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	組織痕・籠目	良	
	212	D-6	浅鉢	黒褐色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	組織痕・網目	良	
	213	L-8	浅鉢	にぶい褐色	橙色	石英・長石	ナデ	擦過 組織痕・アンギン	良	
	214	C-1	浅鉢	にぶい黄色	黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨	擦過	良	

表18　Ⅲ層出土土器・土製品観察表（2/2）

図	番号	グリッド	器種	色調		胎土	調整・文様		焼成	備考
				内面	外面		内面	外面		
39	215	C-3	浅鉢	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	216	H-7～8	浅鉢	黄褐色	にぶい黄色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	217	H-9	浅鉢	明黄褐色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目
40	218	L-9	壷	にぶい黄橙色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	研磨・ナデ（剥落）	研磨	良	
	219	H-9	壷	明赤褐色	明赤褐色	石英・長石	研磨 赤色顔料	研磨 赤色顔料	良	
	220	D-9	壷	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石英・長石	研磨	研磨	良	
	221	C-10	壷	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	石英・長石	研磨（剥落）	研磨	良	
	222	C-2	底部	にぶい黄橙色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	223	B-10	底部	にぶい褐色	褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	224	L-9	底部	褐灰色	明褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	擦過・ナデ	良	
	225	D-8	底部	黄灰色	明黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ 炭化物付着	ナデ	良	底面に網目状の圧痕
	226	C-9	底部	灰黄褐色	灰黄褐色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	227	J-9	底部	黒色	褐灰色	石英・長石・角閃石・雲母・礫	ナデ	ナデ	良	
	228	K-8	底部	にぶい黄橙色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	229	D-8	脚部	明黄褐色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	
	230	C-1	脚部	明黄褐色	明黄褐色	石英・長石・角閃石・雲母	ナデ	ナデ	良	刻目突帯（指刻み）
	231	H-9	脚部	明黄褐色	橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	刻目（指刻み）
	232	K-9	土製品	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	石英・長石・角閃石	ナデ	ナデ	良	円盤状土製品
41	233	I-9	皿	橙色	橙色	長石・角閃石・赤色粒子	ナデ	ナデ 底面ヘラ切り	良	中世土師器
	234	I-9	甕	黄灰色	黄灰色	長石	口縁：横ナデ 体部：カキメ	口縁：横ナデ 体部：格子目タタキ	堅緻	須恵器
	235	B-6	甕	青灰色	青灰色	長石	横ナデ	口縁：横ナデ 体部：羽状タタキ	堅緻	須恵器
	236	D-5	鉢	明黄褐色	明黄褐色	石英・長石	ナデ	ナデ	堅緻	須恵器
	237	H-9	こね鉢	灰色	灰色	長石	横位のハケ目（擂目）	ハケ目・ナデ	堅緻	須恵器
	238	H-9	鉢？	灰色	黄灰色	長石	ナデ	ナデ・凹線2条	堅緻	須恵器
	239	C-6	碗	にぶい黄色	にぶい黄色	精製	無文	鎬蓮弁文	良	龍泉窯系青磁
	240	B-10	碗	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精製	無文	鎬蓮弁文	良	龍泉窯系青磁
	241	B-8	碗	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精製	無文	蓮弁文	良	龍泉窯系青磁
	242	E-10	碗	緑灰色	緑灰色	精製	無文	鎬蓮弁文	良	龍泉窯系青磁
	243	D-6	碗	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精製	無文	蓮弁文（ヘラ先細線）	良	龍泉窯系青磁
	244	D-4	碗	明緑灰色	明緑灰色	精製	無文	雷帯文か	良	龍泉窯系青磁
	245	G-9～10	碗	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精製	無文	無文	良	龍泉窯系青磁 口縁肥厚
	246	M-8	底部	にぶい黄色	にぶい黄色	精製	無文	蓮弁文か	良	龍泉窯系青磁
	247	I-9	底部	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精製	無文	蓮弁文か	良	龍泉窯系青磁
	248	B-8	底部	オリーブ灰色	オリーブ灰色	精製	無文	蓮弁文か	良	龍泉窯系青磁
	249	G-7～8	底部	灰オリーブ色	灰オリーブ色	精製	無文	不明	良	龍泉窯系青磁
	250	B-8	片口鉢	灰色	灰色	長石	ハケ目（磨滅）	ハケ目・ナデ（磨滅）	良	瓦質土器
	251	H-9	鉢	灰黄色	黄灰色	長石・角閃石	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	良	瓦質土器

第3節　石器・石製品(表19)

石器・石製品は2,495点が出土した（表19）。縄文時代後期～弥生時代前期の所産と考えられるものが多いが、縄文時代早期の可能性を持つものも一部含む。主な器種は、石核、剥片などの素材類、ツールとしては狩猟具である石鏃、スクレイパー類、石錐、伐採または加工用の磨製石斧、土掘用の打製石斧、石器製作または製粉用と考えられる礫石器などである。特に黒曜石の剥片に二次加工あるいは使用痕があり、小型の削器・掻器と考えられるものもあるが、判断の難しいものの多くあるため表の集計では「二次加工または使用痕のある剥片」に含めている。層位間の差としては、剥片を中心としてⅢ層出土品がⅣ層より多く、Ⅳ層の倍程度の点数になっている。器種別では礫石器の出土比がⅣ層で高く、石鏃はⅢ層で出土比が高いという特徴がみられた。

表19　包含層出土石器・石製品内訳表

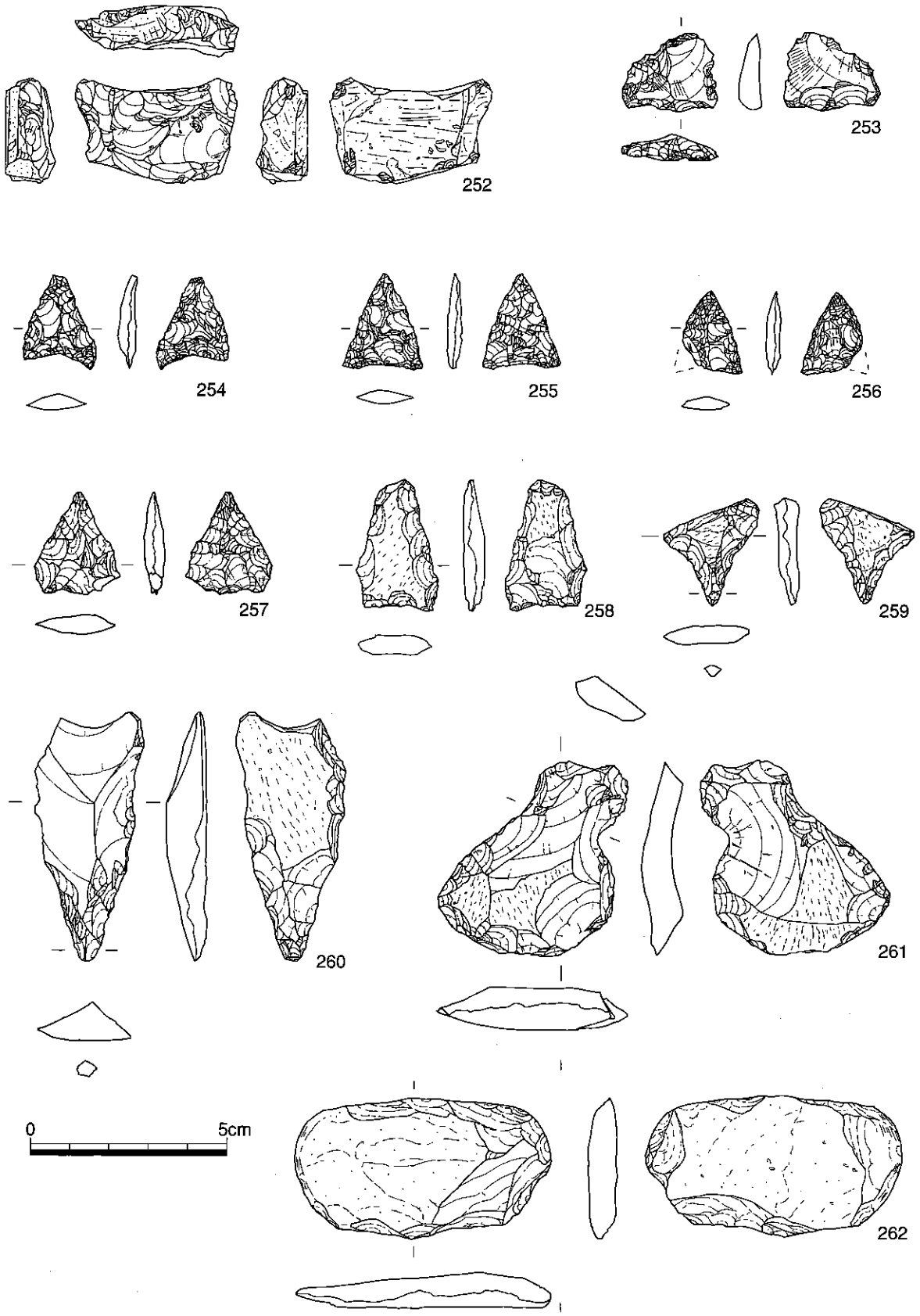
器種（石材）		出土層位 Ⅳ層	出土層位 Ⅲ層	計	計
石核	黒曜石	27	49	76	107
	玄武岩	10	21	31	
剥片	黒曜石	336	730	1,066	1,587
	玄武岩	162	359	521	
砕片	黒曜石	18	85	103	236
	玄武岩	29	104	133	
二次加工または使用痕のある剥片	黒曜石	27	128	155	203
	玄武岩	17	31	48	
剥片類・石器素材（黒曜石・玄武岩を除く）		72	109		181
石鏃（未成品含む）	黒曜石	5	24	29	42
	玄武岩	3	10	13	
石　錐	玄武岩	2	1		3
スクレイパー（石匙・収穫具系のものを含む）	黒曜石		1	1	37
	玄武岩	17	15	32	
	その他	1	3	4	
磨製石斧	蛇紋岩		1	1	2
	頁岩	1		1	
打製石斧	安山岩	9	2	11	14
	その他	1	2	3	
礫石器	凹み石	1		1	46
	磨石または敲石	31	6	37	
	石皿	2		2	
	台石	1		1	
	砥石	5	5	5	
つまみ形石器	黒曜石		1		1
バレン状石製品		1	1		2
滑石片（石鍋）		3	28		31
その他・不明		3			3
計		784	1,711		2,495

石材として最も多く出土しているのは黒曜石であり、次いで玄武岩（いわゆるサヌカイト質のものも含む）が多く、この二種が大部分を占める。黒曜石は漆黒色良質のものが殆どであり、不純物を多く含むものも少量ある。また、青灰色のものがごく僅かにみられた。

器種と石材の関係は概ね明瞭である。石鏃の場合は黒曜石製が最も多く、玄武岩製のものも一定量あり、これを補完している。掌に一握りする程度のスクレイパーは玄武岩製のものが多い。石錐は出土数が少ないが、いずれも玄武岩製であった。磨製石斧には硬質の岩石が使用されており、打製石斧には安山岩などの比較的軟質の素材が選択されている。礫石器の素材であると砂岩質のものが多い。製作しようとする石器のサイズ、機能上必要となる硬度などを考慮したうえで、石材の選択が行われていたものと考えられる。このほか中世に属する石製品も少量出土している。

Ⅳ層出土の石器・石製品（第42～46図、表20、図版19～21）

252は偏平な形状を呈する黒曜石製の石核である。作業面は一面で固定され、自然面を多く残す。上面からの作業の後、90°の打面転移による剥片剥離が行われている。



第42図　Ⅳ層出土石器・石製品①　0　5　10cm
（252～260　S=2/3、261・262　S=1/2）

253は黒曜石の二次加工剥片であり、掻器としての使用が考えられるものである。素材の下端に急角度の調整を施し機能部としている。背面の周縁には調整剥離がみられる。

254～258は石鏃である。254～256は漆黒色良質の黒曜石を素材とする。いずれも丁寧な平坦剥離によって成形されるが、一部に大きめの剥離面も残る。254は基部の抉りがやや深く、側縁には膨らみがあるため、短い脚部を呈している。255・256はいずれも基部を浅く抉る二等辺三角形のものである。257・258は玄武岩を素材とするものである。257は五角形を呈するものである。やや大きめの調整剥離によって成形する。左面右下の白抜きは調査時のものと考えられる剥離面である。258は五角形を呈し、横幅に対して長めのものである。周縁が粗い剥離で成形され、素材面を多く残している。

259・260は石錐である。いずれも玄武岩を素材とする。259は小型のものであり、折断した剥片を両側縁から加工して機能部を作出する。260は大振りの剥片を素材とし、原礫面も多く残る。下半部を側縁からの両面加工によって機能部を作出する。

261は石匙である。厚手の玄武岩剥片を素材とし、素材面と主要剥離面を多く残すものである。刃部は片面からの調整剥離によって作出する。上部には大振りのつまみを作出する。

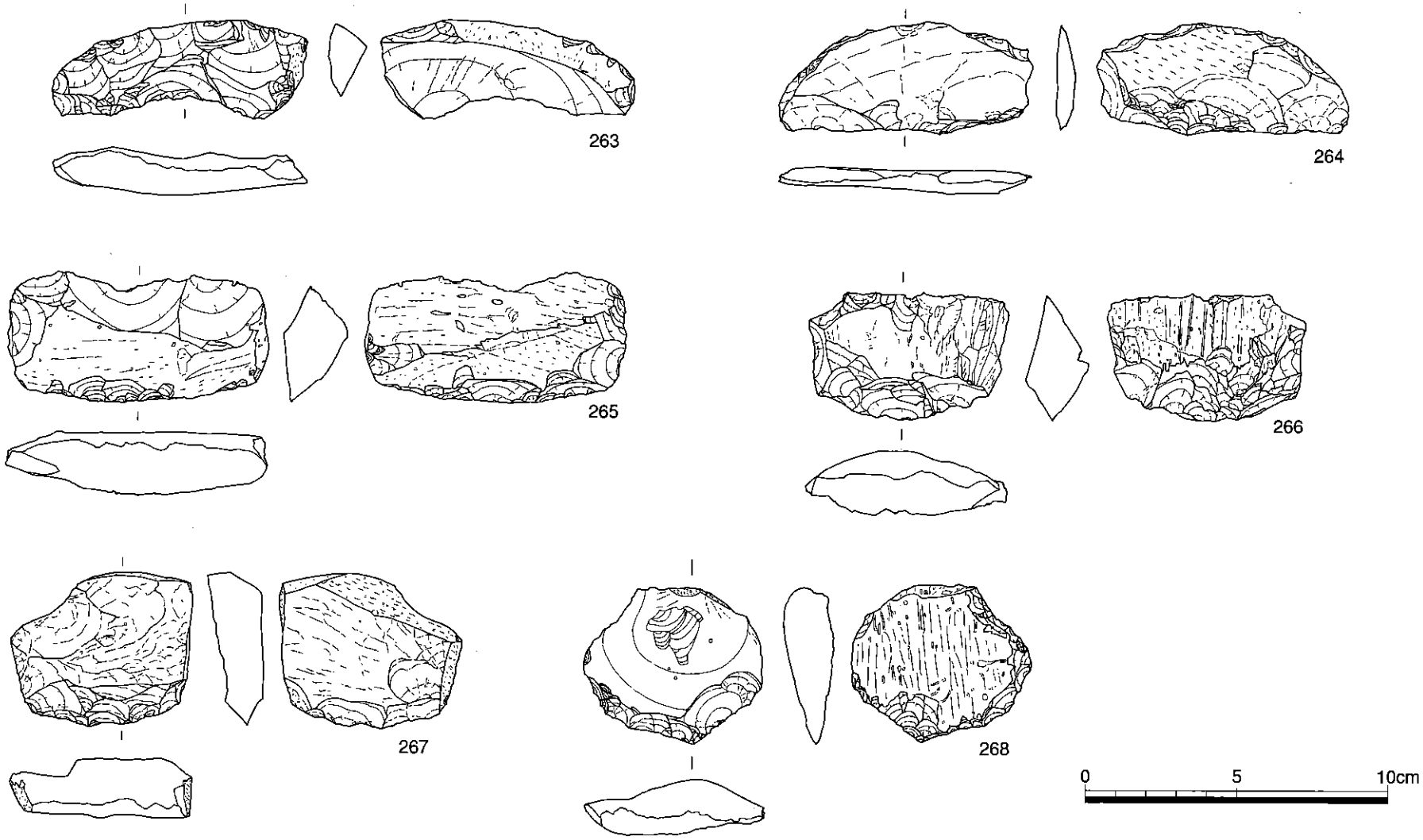
262は石庖丁様石器である。偏平な頁岩の素材を周縁加工によって成形する。左面の左側縁とその裏面には研磨の痕跡がみられ、磨製石庖丁の未成品の可能性もある。

263～268はスクレイパーである。263・264は摘み鎌風の形態を呈する。263は大型の玄武岩剥片を素材とする。左面を中心に成形加工がみられ、右面の大部分は原礫面と素材の主要剥離面によって占められている。264は頁岩を素材とする。下縁の一部に刃部作出のための細かい調整がみられる。また背部に成形のための調整加工を施す。全体的に摩耗が著しい。265は平面形が横長の方形を呈する。玄武岩を素材とし、原礫面と風化面を多く残す。下縁に簡易な調整剥離を施し、刃部を作出する。片方の側縁に見られる剥離は、使用しやすい長さに調整を行ったものか。266～268はやや小振りで、掌にすっぽり握り込める程の大きさのものである。素材はいずれも玄武岩である。礫面や風化面を多く残し、下端を中心に加工を施して刃部を作出する。266は平面方形、267は板状を呈する。268は楕円形であり、刃部の中ほどがやや突出する。石錐として使用することも可能ではあるか。

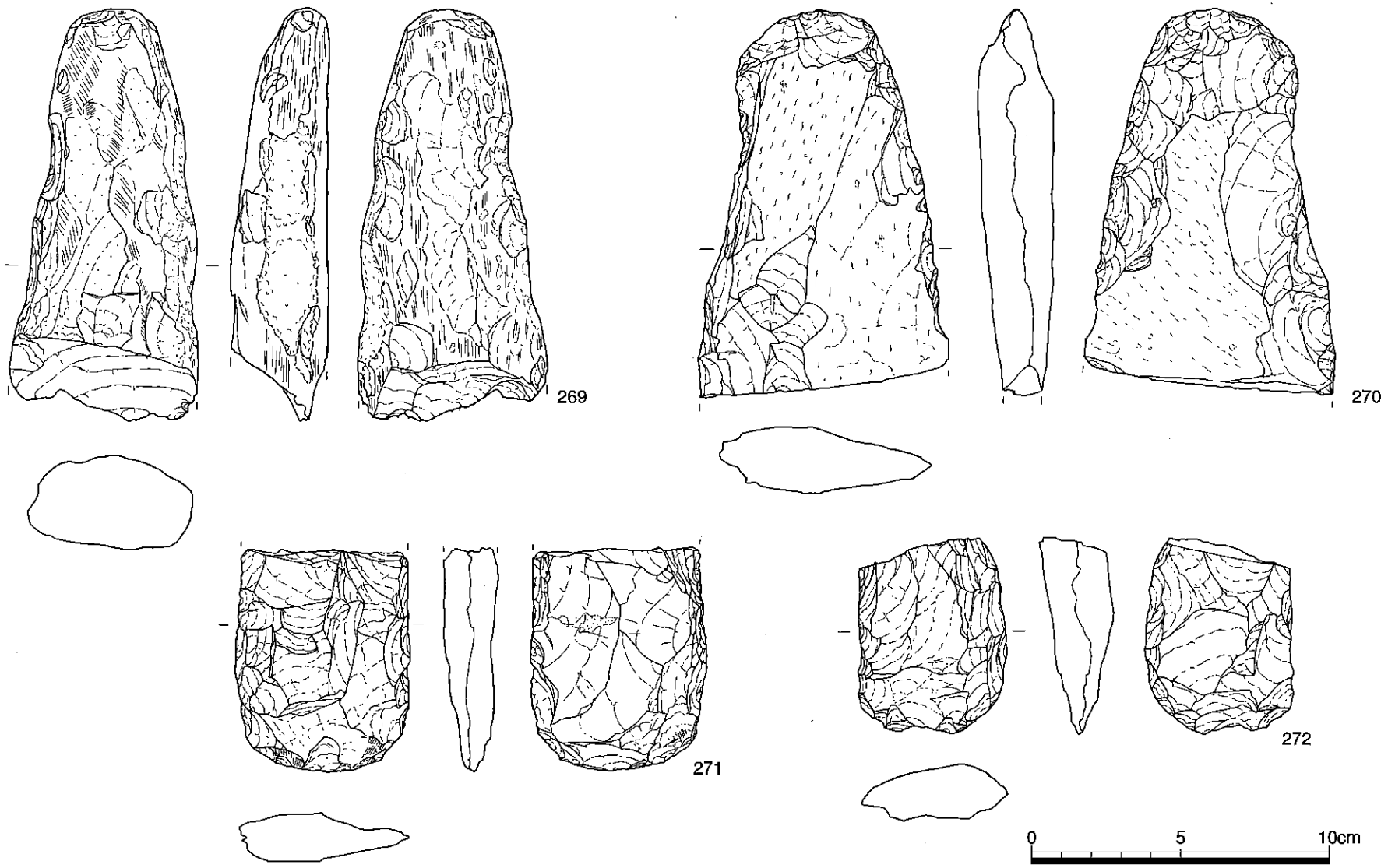
269は頁岩を素材とする磨製石斧の基部側である。丁寧な研磨加工によって製作されている。両側縁には研磨調整を切るような敲打痕がみられ、再加工を行おうとしていた可能性がある。

270～272は打製石斧である。270は大きめのサイズのもので、基部側の資料である。厚みのある安山岩の板状素材を用い、周縁加工を中心に成形する。結果、中央には礫面や風化面を大きく残す。271は黒味を帯びる頁岩を素材とする。打製石斧としては比較的丁寧な成形が行われており、形態的な均整がある。刃部付近に擦痕がみられる。272は安山岩を素材とするやや小振りなものである。

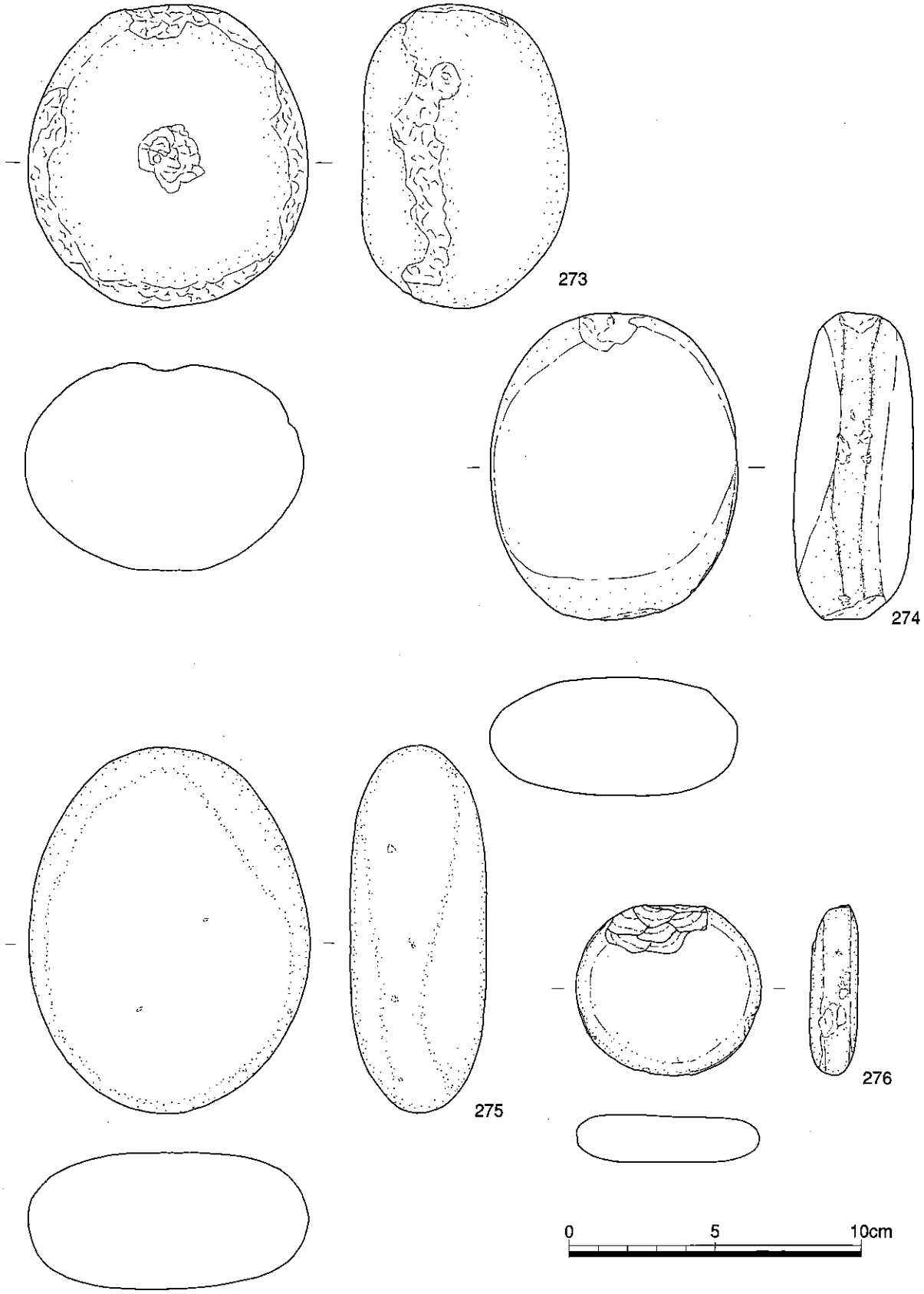
273～279は礫石器である。273は凹み石である。厚みのある円礫を素材としており、上面の中央とおよび側面に敲打の痕がみられる。274～276は磨石である。274は使用面の周囲に稜線が立つほど平滑化している。276は小振りなサイズのものであり、一部打ち欠きの痕がみられる。277・288は棒状礫を素材とする敲石である。先端の機能部を中心に敲打の痕がみられる。278は大きく厚みがあり、断面形状は丸みを帯びた三角形を呈する。279は石皿である。長軸で約25cmを測る完形品である。平面図の下側が掃き出し口にあたる。機能面には使用による縦位の擦痕がみられる。



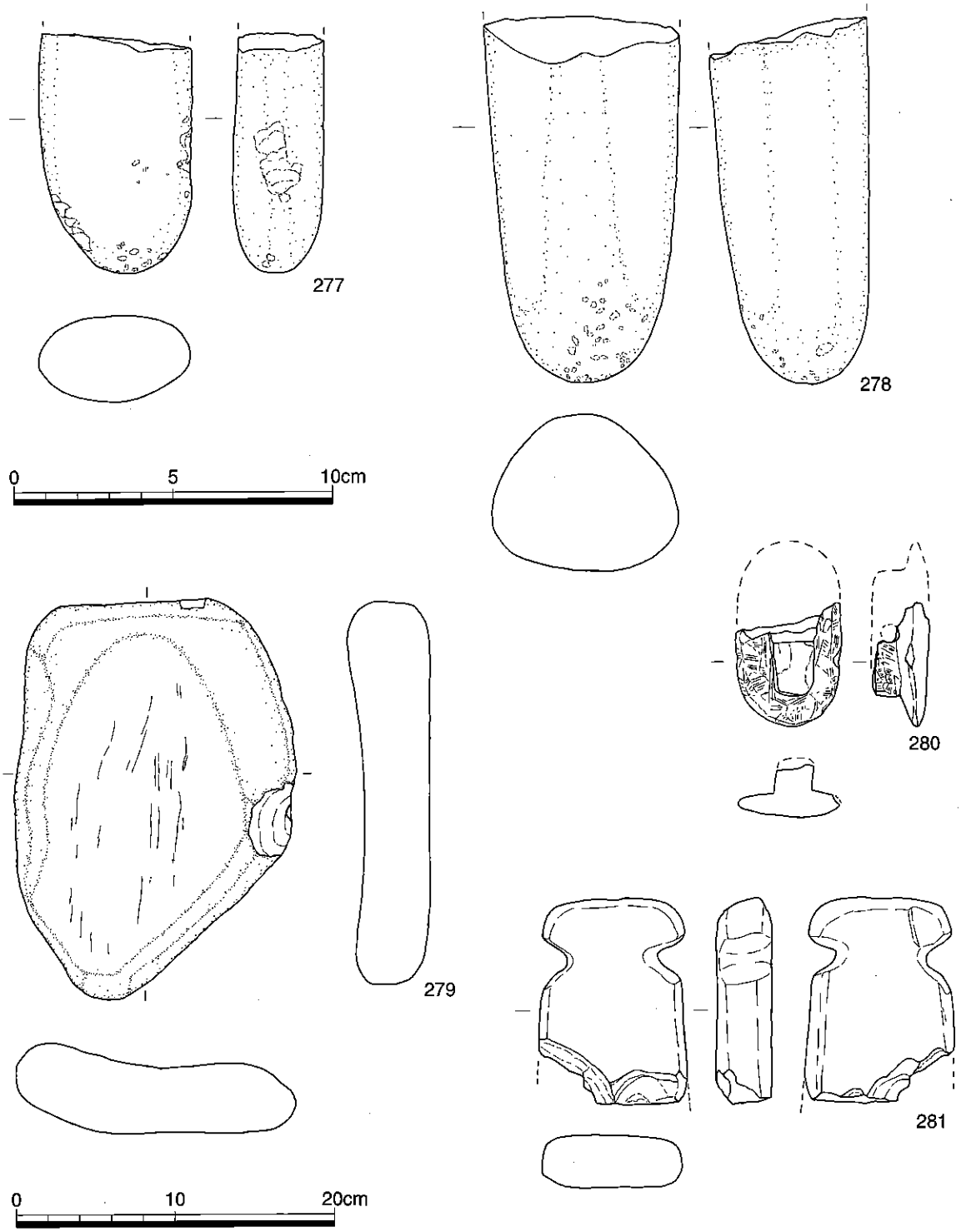
第43図　Ⅳ層出土石器・石製品②（S＝1／2）



第44図　Ⅳ層出土石器・石製品③（S＝1/2）



第45図　Ⅳ層出土石器・石製品④（S＝1／2）



第46図　Ⅳ層出土石器・石製品⑤（S＝1／2、279のみS＝1／4）

280は中世の遺物であり、バレン状石製品である。石鍋の補修具と考えられているものである(注1)。素材は滑石である。半分程残る穿孔の位置を参考に対称復元すると、挿入部は長方形となり、器壁部は幅3.4cm、長さが約6cmの小判形となるだろう。器面にはノミによる加工痕が残る。なお石鍋そのものについては図化向きのものがなく提示していないが、加工痕や煤の付着のある滑石片が少量出土しており、これらを石鍋とみることができるだろう。

281は類例を知り得ず、不明石製品として扱った。素材は砂岩である。図の上部に近い位置に左右一対の抉りがあり、残存状態の平面観は分銅に似た形状である。用途の候補として錘、携帯用の砥石、石偶などを想定したが判断できなかった。ご教示下さると幸いである。

表20　Ⅳ層出土石器・石製品観察表

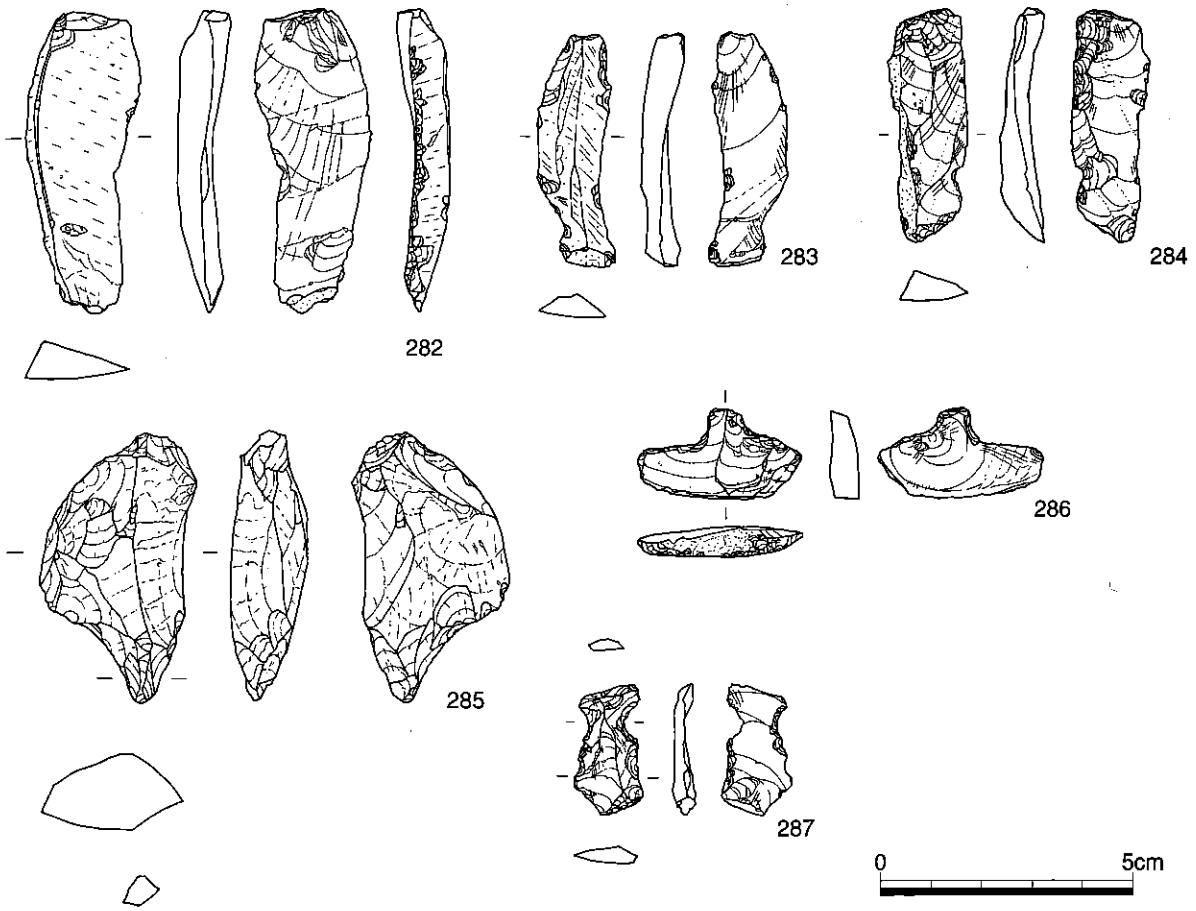
図	番号	グリッド	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
42	252	F-8	石核	黒曜石	2.70	4.10	1.30	14.3	
	253	G-9	二次加工剥片	黒曜石	2.00	2.45	0.60	2.5	掻器
	254	G-8	石鏃	黒曜石	2.40	1.80	0.45	1.2	
	255	G-7～8	石鏃	黒曜石	2.40	2.05	0.40	1.2	
	256	L-8	石鏃	黒曜石	2.10	1.55	0.35	0.9	
	257	D-5	石鏃	玄武岩	2.60	2.20	0.50	2.1	
	258	J-8	石鏃	玄武岩	3.35	2.10	0.50	4.0	
	259	E-9	石錐	玄武岩	2.70	2.40	0.50	2.4	
	260	G-7～8	石錐	玄武岩	6.30	2.80	1.00	14.6	
	261	D-6	石匙	玄武岩	6.65	6.40	1.00	54.7	
	262	D-10	石庖丁様石器	頁岩	4.80	8.65	1.00	70.9	
43	263	J-9	スクレイパー	玄武岩	3.35	8.50	1.30	34.2	
	264	D-9	スクレイパー	頁岩	3.80	8.40	0.60	30.0	
	265	I-9	スクレイパー	玄武岩	4.40	8.70	2.10	83.1	
	266	I-8	スクレイパー	玄武岩	4.30	6.60	2.10	56.6	
	267	F-9～10	スクレイパー	玄武岩	5.20	6.10	1.90	69.1	
	268	G-9	スクレイパー	玄武岩	5.20	6.00	1.65	50.6	
44	269	D-3	磨製石斧	頁岩	14.05	6.40	3.20	373.0	
	270	D-4	打製石斧	安山岩	13.10	8.50	2.25	304.9	
	271	B-5	打製石斧	頁岩	7.60	5.90	1.65	95.0	
	272	J-8	打製石斧	安山岩	6.70	5.05	1.95	86.9	
45	273	F-9～10	凹み石	安山岩	10.45	9.60	7.15	971.5	
	274	K-9	磨石	砂岩	10.50	8.50	4.10	572.2	
	275	H-9	磨石	砂岩	12.60	9.70	4.70	871.2	
	276	D-8	磨石	砂岩	5.90	6.40	1.65	93.2	
46	277	D-7	敲石	砂岩	7.60	4.90	2.75	161.4	
	278	L-9	敲石	砂岩	11.60	6.20	4.95	470.2	
	279	H-9	石皿	砂岩	25.20	17.65	4.25	3540.8	
	280	J-9	バレン状石製品	滑石	3.95	3.35	1.70	20.1	
	281	H-9	不明石製品	砂岩	6.60	4.75	1.70	80.7	

Ⅲ層出土の石器・石製品（第47～50図、表21、図版22～24）

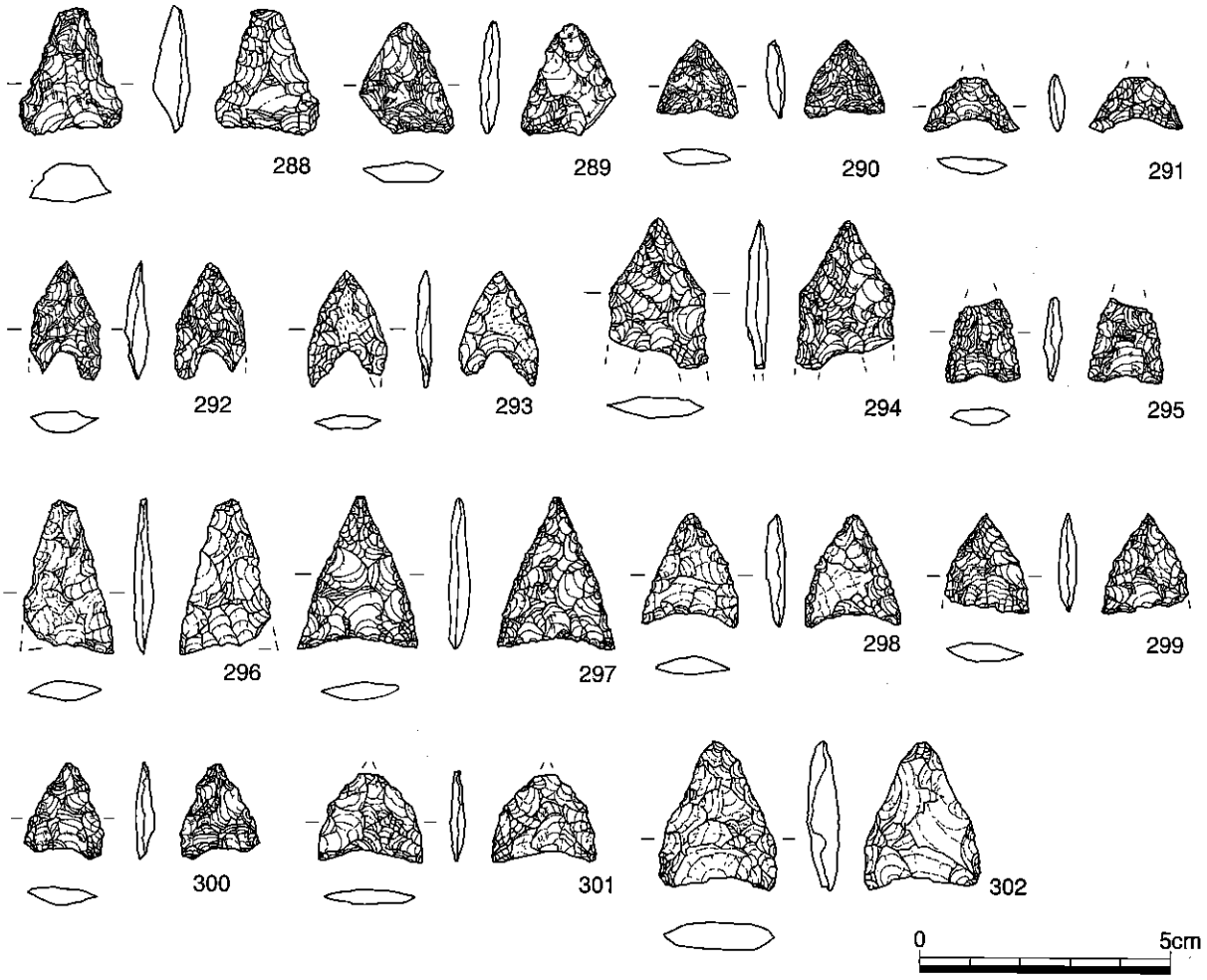
282・283は黒曜石の初期剥片であり、礫面を残すものである。縦長剥片に分類される。上部は打面の調整が行われている。調整剥片などを除く、ある程度形の整った剥片を見る限り、縦長剥片に分類されるものが多い。**284**は二次加工のある黒曜石の剥片であり、削器としての利用が考えられるものである。右面の左側縁に平坦剥離による調整加工があり、これを刃部としている可能性がある。

285は石錐である。厚みのある玄武岩剥片を素材としている。下端部に細かい調整を施して、機能部を作出する。**286**は石匙の未成品と考えられるものである。やや厚みのある黒曜石剥片を素材とする。背面側からの剥離によって、つまみ部の作出を大まかに行う。刃部の作出には至っておらず、下面には礫面が残る。**287**はいわゆる、つまみ形石器である。上端に近い位置に、背面の右側縁および腹面の右側縁より対となるノッチ状の剥離を施し、つまみ部を作出する。

第48図は未成品を含む石鏃である。**293・296・298・301・302**の５点が玄武岩製であり、他の10点が黒曜石製である。黒曜石製は漆黒色で良質のものが多いが、**290**と**295**の２点は、透明度がやや高く、不純物を多く含む。出土石鏃の大部分は縄文時代晩期頃のものとみなされるが、**290**のような小型品や基部の抉りが深くなるものの一部については、縄文時代早期に属する可能性もある。形態的なバリエーションを網羅する形で図化を行っているが、図化できなった分も含めると、三角形凹基式の無茎鏃に分類されるものが多い。長さと幅の比が５：４程度で、基部を浅く抉り、また側縁に僅かな膨ら



第47図　Ⅲ層出土石器・石製品①（S＝2/3）



第48図　Ⅲ層出土石器・石製品②（S＝2／3）

みを持たせるものが主体である。**297**～**300**などがこれにあたる。

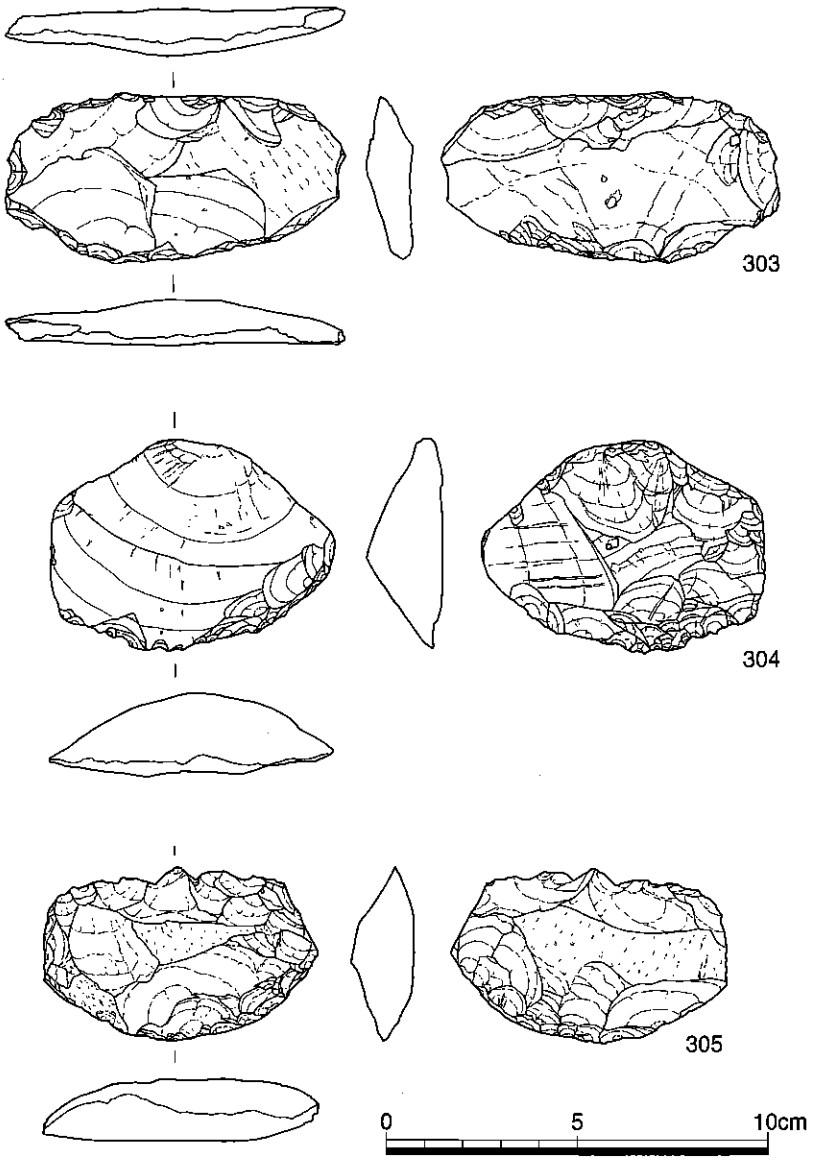
288・**289**は未成品である。**288**は左面の中心よりやや下がった位置が分厚く盛り上がる。素材の不適合により、製作を断念したものか。**289**は右面の左上からの剥離が、右下にまでおよび基部を欠いている。失敗品であろう。**290**は小型で正三角形に近いバランスのものである。上述のように不純物を多く含む黒曜石製である。特に左面には大きめの剥離面を残しており、作りはさほど丁寧ではない。サイズに対してやや厚みがある。**291**は先端を欠く。基部の抉りはそれほど深くないが、脚部を作出する意図が見受けられる。**292**は五角形を呈し、基部を深く抉るもので、やや厚みがある。**293**も基部を深く抉るものである。比較的粗い調整で作られており、両面に素材面を残す。**294**ははっきりとした五角形のもので、基部を深く抉る。相対的に大きめのものである。丁寧な平坦剥離によって作られる。**295**は先端を欠くものであり、前述のように不純物を多く含む黒曜石製である。やや細身のバランスの三角形になると考えられ、基部は浅く抉る。少し粗めの平坦剥離によって作られている。**296**も少し細身のものである。全体的に大振りな平坦剥離によって作られる。**297**は大きめのサイズのものである。主要剥離面を残すが、周縁の加工は丁寧である。**298**は側縁のバランスがやや偏向している。やや粗めの調整によるもので、右面には剝片の素材面を残している。**299**は少し粗い剥離によって作られている。製品として機能しうる状態ではあるが、製作段階の可能性もあるか。**300**もやや粗

い剥離であるが、先端付近をみると、左右両面ともに左側縁にあたる部分に細かい剥離がみられる。一方の右側縁は粗いままである。片面からの仕上げが行われたものと考えられる。**301**は幅と推定長が同程度で、潰れ気味の五角形のような形態である。大きめの平坦剥離によって作られる。薄手の作りである。**302**は五角形を呈し、基部を浅く抉るものである。厚みのある剥片を素材としており、右面に素材の主要剥離面を大きく残している。

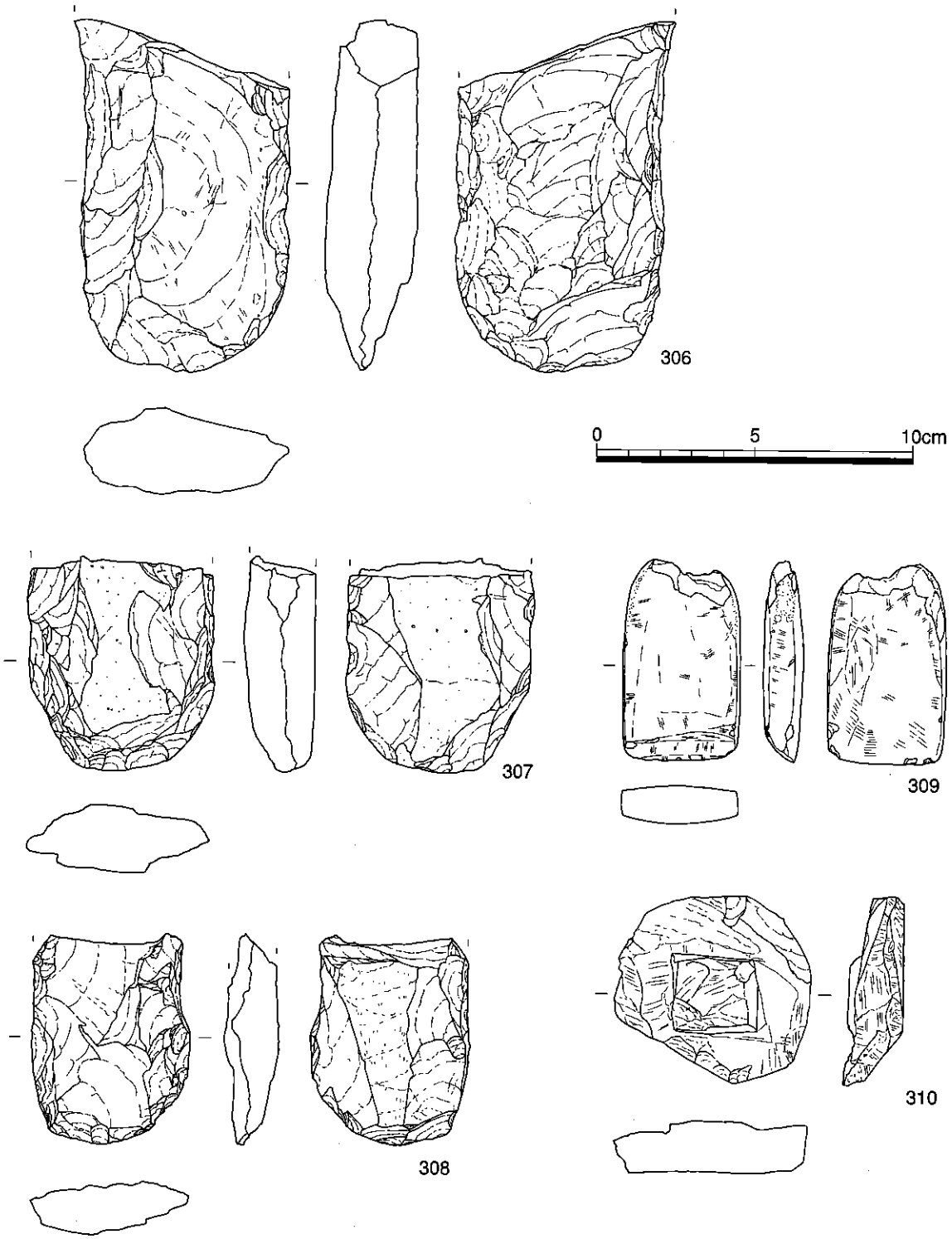
303は石庖丁様石器、**304・305**はスクレイパーである。**303**は凝灰岩を素材とし、上端と下端の周縁に加工を施して刃部とする。**304**は厚手の玄武岩剥片を素材とし、平面観はおよそ貝のような形状を呈する。下縁に細かい剥離を施して刃部とする。右面では周縁からの求心的な剥離痕がみられる。石核の転用品の可能性もあるだろうか。**305**も厚手の玄武岩剥片を素材とする。周縁に加工を施して、刃部を作出する。中央付近には原礫面を残す。

306・307は安山岩、**308**は凝灰岩を素材とする打製石斧である。**306**左面の中央から右半にかけての広い剥離面は他の面に比べて風化が進行しており、成形前の素材面にあたると考えられる。またこの面は平坦であり、この面に傾斜を持たせ、これに合わせる形で製作が行われたと考えられる。左面の左側縁はぼってりとした作りである。摩耗が著しい。**307**は厚みがあり、**308**はやや小型で薄手のものである。いずれも周縁からの粗い加工が中心で、素材面を残す傾向にある。

309は蛇紋岩を素材とする小型の片刃石斧であり、丁寧な研磨によって製作されている。基部付近の側縁には敲打痕があり、円基に仕上げられている。刃部は両側に丸みがあり、弧状に近い。左面にみられる刃部の鎬は、弱い弧鎬である。体部の中央付近が相対的に厚く、横断面、側面観とも



第49図　Ⅲ層出土石器・石製品③（S＝1/2）



第50図　Ⅲ層出土石器・石製品④（S＝1／2）

に中膨れした形状である。以上の特徴からは縄文系の小型片刃石斧である可能性が高いであろう（注2）。

310はバレン状石製品であり、前述のとおり中世の遺物である。器壁部は左下を欠くが直径約6㎝の円形であり、1.2～1.4㎝程度の厚みを持つ。挿入部は一辺約2.6㎝の正方形であるが、付け根の部

分が痕跡的に残るのみである。穿孔の痕も確認できない。挿入部を削り出した際のものとみられる擦痕が周囲に残る。挿入部を欠いた面にも調整痕が施されているようであり、別製品への再加工を行おうとしていた可能性もある。

注１）文献（松尾 2007)。部位の名称は左記文献に従った。文献で紹介されている門前遺跡、里田原遺跡例のほか、佐世保市の竹辺Ｃ遺跡において本事例とよく似た形状のものが出土している（江上編 2008　p83 - 25、p128 - 18)。
注２）下條信行氏の分類（下條 1996）によるＪ(縄文)形の片刃石斧の諸特徴をほぼ備えている。

＜参考文献＞
江上正高編 2008『竹辺Ｃ遺跡　竹辺Ｄ遺跡』一般国道佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ｖ
長崎県佐世保文化財調査事務所調査報告書第３集
下條信行 1996「扁平片刃石斧について」『愛媛大学人文学会創立20周年記念論集』愛媛大学人文学会
松尾秀昭 2007「石鍋の補修具とは―バレン状石製品―」『西海考古』第７号　西海考古同人会

表21　Ⅲ層出土石器・石製品観察表

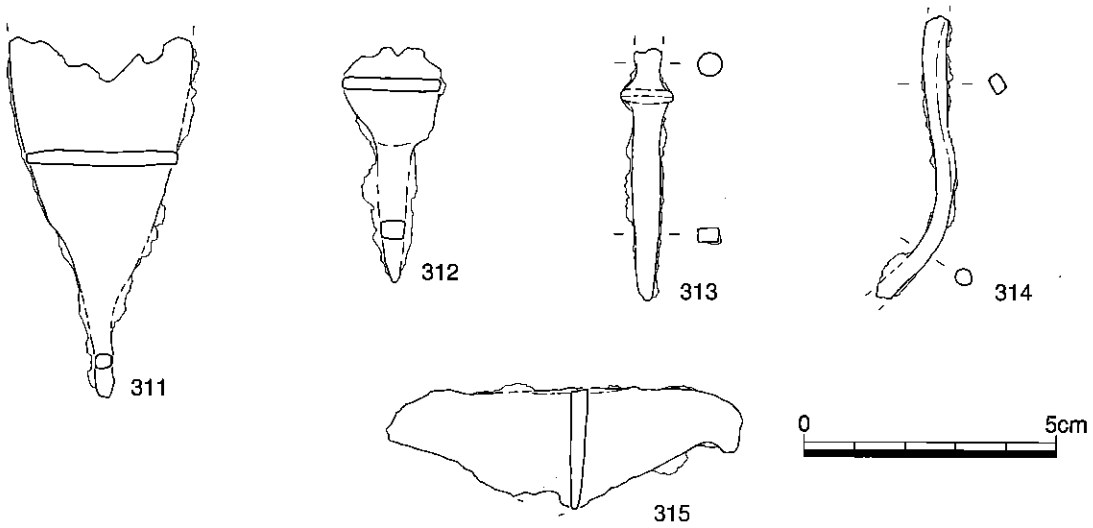
図	番号	グリッド	器種	石材	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
47	282	E-8	剥片	黒曜石	6.00	2.30	0.75	9.7	
	283	G-9	剥片	黒曜石	4.60	1.50	0.50	3.5	
	284	G-9	二次加工剥片	黒曜石	4.50	1.60	0.60	4.2	削器
	285	H-7～8	石錐	玄武岩	5.30	3.05	1.50	20.4	
	286	C-8	石匙（未成品）	黒曜石	1.80	3.30	0.60	2.7	
	287	H-7～8	つまみ形石器	黒曜石	2.60	1.40	0.30	1.1	
48	288	H-7～8	石鏃	黒曜石	2.50	2.05	0.80	2.5	
	289	C-8	石鏃	黒曜石	2.20	1.90	0.40	1.3	
	290	D-8	石鏃	黒曜石	1.55	1.60	0.30	0.7	
	291	B-8	石鏃	黒曜石	1.10	1.80	0.35	0.4	
	292	B-7	石鏃	黒曜石	2.35	1.40	0.45	1.0	
	293	J-8	石鏃	玄武岩	2.30	1.60	0.25	0.9	
	294	H-7～8	石鏃	黒曜石	3.00	2.00	0.45	2.2	
	295	B-10	石鏃	黒曜石	1.70	1.50	0.35	0.7	
	296	J-8	石鏃	玄武岩	3.05	1.75	0.40	1.6	
	297	G-7～8	石鏃	黒曜石	3.05	2.35	0.40	1.8	
	298	G-8	石鏃	玄武岩	2.25	1.90	0.40	1.2	
	299	H-7～8	石鏃	黒曜石	2.00	1.70	0.35	0.9	
	300	F-9	石鏃	黒曜石	1.90	1.60	0.40	0.7	
	301	C-4	石鏃	玄武岩	1.80	2.05	0.30	0.9	
	302	H-9	石鏃	玄武岩	3.00	2.30	0.55	3.6	
49	303	L-9	石庖丁様石器	凝灰岩	4.50	8.90	1.20	48.8	
	304	I-9	スクレイパー	玄武岩	5.60	7.50	2.00	74.9	
	305	B-10	スクレイパー	玄武岩	4.60	7.30	1.65	60.7	
50	306	D-3	打製石斧	安山岩	11.30	7.00	2.75	277.9	
	307	B-7	打製石斧	安山岩	6.85	5.90	2.10	125.8	
	308	I-9	打製石斧	凝灰岩	6.75	5.10	1.70	64.7	
	309	L-8	磨製石斧	蛇紋岩	6.40	3.70	1.20	62.0	
	310	D-5	バレン状石製品	滑石	6.00	6.25	1.70	90.2	

第４節　金属製品（第51図、表22･23、図版24）

古墳時代以降のものと考えられる遺物がⅢ層より出土した。**311・312**は鉄鏃である。**311**は雁又鏃である。身の部分は３㎜程の厚さに鍛打する。茎の断面は方形気味に成形する。**312**は先端を欠いている可能性があり正確に判らないが、基部の形状からすると鑿頭式のようなものか。茎は断面方形を呈し、しっかりとした作りである。**313・314**は棒状の鉄製品である。**313**については鉄鏃の可能性がある。上下は逆となるかも知れない。環状の突起部があり、その上位では断面円形、下位では断面方形となる。**314**はねじれるように湾曲する。上半では断面方形であり、下半に向かって断面円形に転じている。**315**は板状の鉄製品である。背の部分が３㎜程度の厚さで、下に向かって厚みを減ずる。刃物の一種か。右端部分は鉤手状となる。

表22　Ⅲ層出土金属類内訳表

器種	点数	備考
鉄鏃	2	311・312
棒状鉄製品	3	うち２点　313・314
板状鉄製品	1	315
その他	6	
鉄滓	1	
計	13	



第51図　Ⅲ層出土金属製品（S＝2/3）

表23　Ⅲ層出土金属製品観察表

図	番号	グリッド	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
51	311	C-6	鉄鏃	7.10	3.70	身 0.30 茎 0.30	18.1	
	312	B-5	鉄鏃	4.60	2.00	身 0.25 茎 0.30	7.5	
	313	B-5	棒状鉄製品	5.00	0.45 1.00 0.40	- - 0.30	4.9	鉄鏃か。
	314	B-10	棒状鉄製品	5.60	0.40 0.30	0.25 -	3.2	
	315	D-6	板状鉄製品	7.00	2.40	0.30	17.5	

第6章　総　　括（表24・25）

亀の首遺跡からは縄文時代晩期～弥生時代前期を主とし、他にも縄文時代早期、中世など複数の年代の遺物が出土した。遺構は性格や年代を十分に評価できるだけの状況ではなかったが、各年代のある程度纏まった資料が得られた点は一定の成果と言えるだろう。出土遺物はあまりローリングを受けておらず、調査地周辺において断続的に遺跡が消長したものと考えられる。なだらかな丘陵上に位置することや、水場に近い点など立地面での好条件も遺跡の形成に影響を与えた一因と考えられる。

次に包含層出土資料を中心に主な年代の遺物を振り返り、成果と課題について述べたい。縄文時代早期の押型文土器は約150点の出土で、数量的に一定の纏まりをもつ資料である。押型文土器以外に縄文時代早期の土器は出土しておらず、亀の首遺跡における縄文時代早期は押型文土器の単純な様相である。文様は山形・楕円・格子目の外面施文が基本で、内面施文は**58**の一例のみと内面無文の傾向が顕著である。底部資料は一例（**61**）の確認で、底面に網代状圧痕が残る平底であった。個々の資料の特徴を見ると、基本的には水ノ江和同氏が設定した「弘法原式土器」の範疇と考えられる（水ノ江 1998）。ただし「弘法原式土器」の標識遺跡である弘法原遺跡においては山形文が圧倒的な主体を占め、これが大きな特徴の一つであるが、亀の首遺跡の場合は楕円文が全体の約76.8％を占めるといった相違もある。弘法原式という型式内での小地域差または小時期差が反映されている可能性を想定しておきたい。なお亀の首遺跡の楕円文のうち、いわゆる粗大楕円文と呼ばれる施文後に押し潰したタイプは**56**のように存在するが、比率としては少ない（破片数で12点、同一個体の可能性の高い破片も多く、個体数にするとさらに少ない）。

ところで弘法原式土器の他地域との年代関係について、水ノ江氏は東九州編年の稲荷山式併行とし、押型文土器の中でも最古段階の年代観を与えている。水ノ江氏の論攷を受ける形で発表された渡邊康行氏の論文においては、長崎県出土の厚手無文土器および押型文土器と共伴する石器の検討などから、弘法原式が田村式以降に位置付けられる可能性を指摘しており（渡邊 1999）、必ずしも弘法原式の年代観が定まっているとは言えない。近年では雲仙市国見町の龍王遺跡の調査報告において、自然科学分析による弘法原遺跡出土資料との年代測定値の比較が行われており、渡邊氏の見解を補足する結果が示されている（辻田・小野編 2008、注1）。なお龍王遺跡の測定資料2点は口縁内面に原体条痕が施され、外面に押し潰した粗大楕円文が施されるタイプのものである（注2）。

亀の首遺跡資料は口縁内面に原体条痕を伴わない点など、稲荷山式段階と共通する特徴で理解できそうな一面もある。ただ一方で、田村式段階に特徴的な粗大楕円文が脆弱な出土量ながら存在しており、弘法原式を稲荷山式併行とみた場合、逆に田村式併行の単純段階が成立し得たかという事について多少の躊躇も覚える（注3）。渡邊氏の指摘した共伴石器との関係、龍王遺跡で示された年代観など、まさに水ノ江氏も重要性を説くように押型文土器の「地域での性格付けを的確に行う」部分でいまだ課題や検討の余地が多いと思われる。弘法原式を田村式以降に見ようとする場合は、当然ながら弘法原式のみでなく、島原半島内における田村式併行期の特徴を把握することが重要である。例えば雲仙市瑞穂町の京ノ坪遺跡出土の押型文土器は、田村式の特徴をよく備えた一群と思われるが（町田編 1994、報告書1～40番の遺物）、楕円文と山形文の比率が亀の首遺跡の押型文土器と類似している点に注目したい。弘法原式が田村式以降に位置付けられるという仮説のうえでは、亀の首遺跡資料は文様比率という点において、京ノ坪遺跡資料と弘法原遺跡資料の間のヒアタスを埋める可能性があるのかも知れな

い。出土した資料の特徴より弘法原式および文様構成の面から述べたが、貝殻文円筒形土器（島原半島における一野式）の年代観とも深く関わる問題であり、機能・形態論も含め慎重な検討が必要である（注4）。

縄文時代前期から中期は遺跡が断絶しており、後期では太郎迫式段階の遺物が少量出土しているが、遺跡周辺での活動が本格化するのは早くとも百花台段階（注5）以降であろう。礫石原式段階（黒川式併行）を経て、刻目突帯文期に遺跡はピークを迎えたと考えられる（注6）。後期の土器としては少量の磨消縄文土器がみられ、タガ状口縁深鉢の一部（**68・175**）、浅鉢の一部（**120・121・204・205**）なども後期に属する可能性がある。礫石原式段階の土器は主に素口縁や口縁装飾のある深鉢、黒色磨研浅鉢などで構成されるが詳細については割愛する。

刻目突帯文期の土器の様式観について述べておく。深鉢は口縁から体部付近にかけて残存する資料によると、体部屈曲部に突帯を貼付し口縁部とともに二条突帯とするものが基本となっている。砲弾形の器形と刻目突帯が組み合う例も存在するが、比率としては少ないようである。底部は外方へ突出する平底が主である。浅鉢は**141**～**144**例のように逆「く」字状のものが主体となり、碗形など他の器形がこれを補完する状況と考えられる。丁寧な研磨調整によらない粗製品が目立つ点や、刻目突帯を伴う浅鉢がみられることも特徴として挙げられる。これらに伴う壷は、前述のとおり夜臼式に類似する特徴をもつものである。高坏の一部も出土したが、点数が少なくここでの位置付けは控えたい。

周辺の権現脇遺跡の調査報告（本多 2007）を参考として、刻目および刻目突帯の状況をみておきたい。方法としては深鉢とした土器の口縁部資料を対象に（注7）、突帯位置および刻目手法（施文原体）の整理を行った後、上記報告との比較を行うものである。突帯位置は、口縁端部から下がる位置に突帯を貼り付けたものを「A類」、突帯が口縁端部に接するものを「B類」、突帯を施さず口縁端部または口唇部に直接刻目を施したものを「C類」として分類した。外見上、突帯が口縁端部より1㎜前後下がっている場合でも、口唇部と一体的にナデ整形が加えられているような場合は「B類」に含めた。これら突帯位置と刻目手法（指刻み、棒刻み、ヘラ刻み、刺突）の関係をⅣ層およびⅢ層でそれぞれ示したものが表24と表25である。Ⅳ層、Ⅲ層に共通する全体的な特徴は次のように整理される。

突帯位置についてはA類が7割近くの主体を占め、B類がこれに次いで多い。C類は少量ながらみられる。刻目手法（原体）についてはヘラ刻みが4割強の割合で最も多く、次いで指刻みが3割前後の割合となる。棒刻みはⅣ層において2割弱、Ⅲ層において1割強ほどである。全体的に指刻みのものを、ヘラ刻みを主とする工具系の施文が上回る関係となっている。指押さえによる大振りな指刻みは総じて少ないが、Ⅳ層出土のC類においては指刻みの比率が高く、これらが軒並み大振りなものとなっている。この辺りが層位間の差異としてやや認められるが、他に特筆すべき違いは見られず、亀の首遺跡出土の突帯文土器は全体として時期的な纏まりのある資料と言えそうである。

表24　口縁部刻目・刻目突帯の属性（Ⅳ層）

		刻目の種類					計
		指	棒	ヘラ	刺突	不明	
突帯位置	A類	20	15	29	5	-	69
	B類	4	4	15	1	1	25
	C類	6	-	-	1	-	7
計		30	19	44	7	1	101

表25　口縁部刻目・刻目突帯の属性（Ⅲ層）

		刻目の種類					計
		指	棒	ヘラ	刺突	不明	
突帯位置	A類	26	7	31	-	8	72
	B類	11	6	11	1	1	30
	C類	1	-	3	4	-	8
計		38	13	45	5	9	110

権現脇遺跡との比較であるが、まず報告内容か

ら関連の高い事項について抽出しておく。同遺跡では纏まった点数が出土しているⅢb上層において指刻みがヘラ刻みを上回っており（前掲p67・第25表）、同層よりさらに上層の状況を踏まえて「指刻み」→「棒刻み」→「ヘラ刻み」の時間経過に伴う相対的移行が想定されている。突帯位置については、対象資料108点中8点が口縁端部より「0㎝」の位置に突帯があり、うち6点がヘラ刻みとなっている（同p67・第26表）。外面調整と刻目の関係について、貝殻条痕は指刻み、棒刻み、ヘラ刻みの順で比率が低くなり、ナデ調整では逆にヘラ刻み、棒刻み、指刻みの順で比率が低くなるとしている（同p66参照）。こうした成果を踏まえて、亀の首遺跡資料と照らしてみたい。刻目の比率であるが、亀の首遺跡ではヘラ刻みの比率が指刻みを上回っている。相対的に新相の可能性があるヘラ刻みは、権現脇遺跡において口縁端部と同位の突帯と強く相関しているが、亀の首遺跡においては突帯の口縁部近接例がより高い比率となっている。外面調整の比率について数量的な提示は行わなかったが、亀の首遺跡において貝殻条痕が施される刻目突帯文土器は**102・105**のように存在するものの、一定量みられる権現脇遺跡に比べると非常に稀である。以上の点より、権現脇遺跡で指摘された時間的移行に基づくならば、亀の首遺跡出土の突帯文土器は少なくとも権現脇遺跡Ⅲb上層資料よりも新相であると考えられる。島原半島東部における突帯文土器編年において、今後の有効な手掛かりとなり得よう。ただし時間的に一部重複も含み得る、緩やかな時期差の可能性もあるだろう。また、他地域との併行関係を見据えた他器種も含む精査など、課題がなお多いのも事実である。

石器であるが石核、剥片および未成品が出土する点から、遺跡内で生産と消費が行われていたことは確実であろう。縦長剥片及びこれを素材とした石器も比較的よくみられ、一定量は縄文時代後期に属すると考えられる。ツールとしては石鏃、削器または収穫具としてのスクレイパー、石斧、礫石器などが中心であり、ほかに剥片石器や石錐などがある。礫石器の素材は砂岩系のものが多く、他の石器であれば黒曜石、玄武岩の利用頻度が高い。器種に応じた石材選択も行われているようである。こうした石器組成、石材利用の在り方は権現脇遺跡で確認された内容とほぼ共通している（注8）。類似した生業形態、石器生産の背景を有していたものと考えられる。このほか紡錘車の紡輪が1点出土したが（**169**）、これも権現脇遺跡および山ノ寺梶木遺跡において出土例がある。

上に例示した遺跡とは距離的にも近く、共通性の多さを認めたところである。こうした状況を踏まえつつ市の南部方面に目を向けると、相対的に丘陵地が少なく、生業面において海浜への依存度が高くなる可能性がある（注9）。こうした点の確認と小地域圏の抽出も、今後の重要な地域課題であろう。

古墳時代～古代の遺物は少量の出土であり不明な点も多いが、近くに古墳が残ることもあり、周辺での調査情報の蓄積を待って検討する機会を得たい。

中世の出土遺物として特に注目しておきたいのは龍泉窯系青磁である。碗の破片資料が100点余り出土したが、同一個体と考えられるものはあまり無く、点数が個体数に近くなりそうな状況である。大部分は外面にしっかりとした鎬蓮弁文の施されるものであり、13～14世紀台が中心とみられる。身分までは不明だが、纏まった数の貿易磁器を所持している点からは、相応な有力者層が近隣に居していたと推察される。年代的な背景としては、有馬氏の勢力台頭と地域が連動していく時期であろうが、実際のところ地域経営の実態というものはよく判っていない。当時の社会像を復元するため、さらに情報の蓄積と検討を重ねていく必要があろう。

代表的資料の紹介に終始し、資料の詳細評価や他遺跡との比較など検討課題を多く残した感があるが、今後の責として明示し、ひとまず報告としたい。

（謝辞）現地調査、資料整理を通じて、渡邊康行氏、山口勝也氏、中尾篤志氏より貴重な助言を頂いた。特に中尾氏については資料全体を実見頂き、文献の紹介についても配慮頂いた。このほか工事関係者、現地調査および整理作業に従事して頂いた方々にも大変お世話になった。また文中でいちいち触れなかったが同僚諸氏からも何かと協力と助言を頂いた。編集の都合により文末となりましたが、記して謝意を表します。

注１）龍王遺跡資料は測定可能な試料２点の結果が示されており、一点は8,250±60B.P.であり、もう一点は7850±60B.P.で平均値は8050±60B.P.とする。一方の弘法原遺跡については調査報告書（高野編 1983）より、測定値の得られた試料２点が「平均値で7800BPが実年代に近いものと思われる」との引用が示されている。（※龍王遺跡資料は放射性炭素年代測定、弘法原遺跡は熱ルミネッセンス法による年代測定値。）

注２）風倒木痕１（SX-１）出土遺物が試料となっている。下菅生Ｂ式または田村式に併行する資料と思われる。同じ特徴を持つ土器については、亀の首遺跡に程近い大崎鼻遺跡（土橋編 2001）や下末宝遺跡（本多編 2005）でも出土している。亀の首遺跡資料は既に述べている様に、原体条痕はもとより内面施文そのものが殆どみられず、粗大楕円文も極めて少ない。龍王遺跡例に当てはめると風倒木痕２（SX-２）と同じ様相である。風倒木痕１および風倒木痕２出土資料に時期差があることは、報告者の辻田氏も指摘されており、同遺跡で得られている年代測定の成果を亀の首遺跡に直接援用することは出来ない。

注３）年代によって遺跡の中心が移動している可能性は当然考慮しておかねばなるまい。ただし、ある程度年代観の定まっている土器型式であれば、こうした考え方で整理が可能だが、弘法原式の年代観については前述のように問題提起がなされている状況であり慎重性が求められる。

注４）早水台式～下菅生Ｂ式併行とされる近隣の下末宝遺跡（本多編 2005）ではまとまった数の底部資料が出土しているが、弘法原式に比べて小さめの平底や丸底気味の底部が多い。弘法原式を稲荷山式併行とみる場合、土器の自立機能という面では、地域内で時間の経過に沿って退化が進むということになる。東九州系の尖底の影響という理解で処理が可能なものか、検討の余地が未だあると思われる。結果的に弘法原式を新しくみる説に準ずる書きぶりとなったが、筆者にこれを結論づける力量はない。一つ言える点は、弘法原式が島原半島の遺跡で設定された型式である以上、その編年的位置付けについて出土状況を踏まえた島原半島内での点検を今後も進めていく必要があり、今のところ水ノ江氏の指摘された課題に帰結する。

注５）文献（水ノ江 1997）。肥後編年の古閑Ⅱ式段階に位置付けられている。

注６）タガ状口縁、黒色磨研土器、リボン状突起を伴う土器、刻目突帯文土器の数量を参考としている。黒色磨研土器、リボン状突起について数量は示していないが、刻目突帯文土器には及ばない。なお第５章・表16で「素口縁ほか」とした深鉢のうち無文のものは、厳密な区分は難しいが礫石原式期と刻目突帯文期の両方を含むと考えられる。

注７）第５章・表16に掲げた点数のうち、二層間の接合である**193**および掲載外で**194**と同一個体と見なされた資料の２点を除外している。なお**90**～**92**の口唇部装飾のみられるものは、系統的に異なると思われ「素口縁ほか」に含めている。

注８）渡邊康行氏によって詳細な分析が行われている（本多編 2006）。

注９）遺跡の年代は異なるが、今福遺跡における宮崎貴夫氏の指摘がある（宮崎 1997）。

＜参考文献＞

上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No. 2　日本貿易陶磁研究会
高野晋司編 1983『弘法原遺跡』吾妻町の文化財第７集　吾妻町教育委員会
辻田直人・小野綾夏編 2008『龍王遺跡Ⅲ』(縄文時代･古墳時代編) - 国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査 - 雲仙市文化財調査報告書第３集　雲仙市教育委員会
土橋啓介編 2001『大崎鼻遺跡』布津町文化財調査報告書第１集　布津町教育委員会
本多和典編 2005『下末宝遺跡・上畔津遺跡』深江町文化財調査報告書第１集　深江町教育委員会
本多和典編 2006『権現脇遺跡』深江町文化財調査報告書第２集　深江町教育委員会
本多和典編 2007『権現脇遺跡』 - 赤松谷川１号床固工工事に伴う発掘調査 - 南島原市文化財調査報告書第１集　南島原市教育委員会
町田利幸編 1994『京ノ坪遺跡』瑞穂町文化財保護協会調査報告書第２集　瑞穂町文化財保護協会
水ノ江和同 1997「北部九州の縄文後・晩期土器」『縄文時代』８号　縄文時代文化研究会
水ノ江和同 1998「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器 - 論攷編 - 』縄文集成シリーズ３ 九州縄文研究会
宮崎貴夫 1997　「今福遺跡」『原始・古代の長崎県』資料編２
村川逸朗編 1992『弘法原遺跡』吾妻町の文化財第13集　吾妻町教育委員会
渡邊康行 1999　「一野式・弘法原式の設定をめぐって」『西海考古』創刊号　西海考古同人会

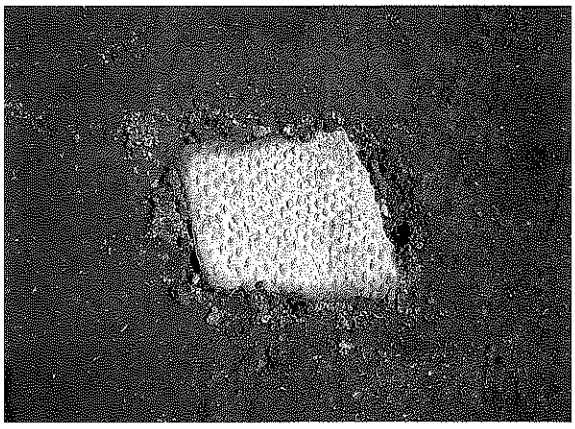
図　版

調査前

表土剥ぎ

調査杭設置作業

作業風景



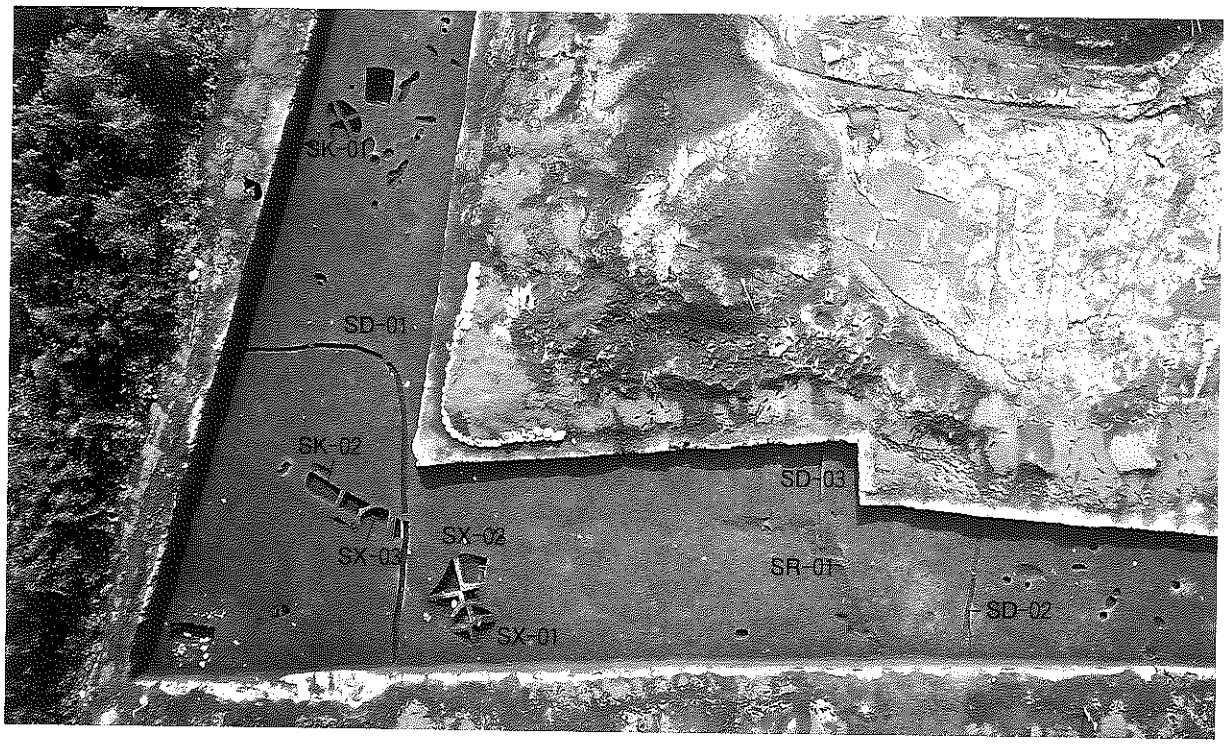
遺物出土状況（押型文土器）

遺物出土状況（壷）

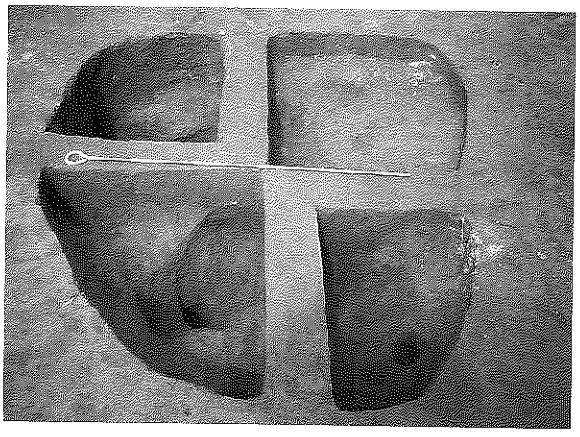
遺物出土状況（磨製石斧）

遺物出土状況（土製品）

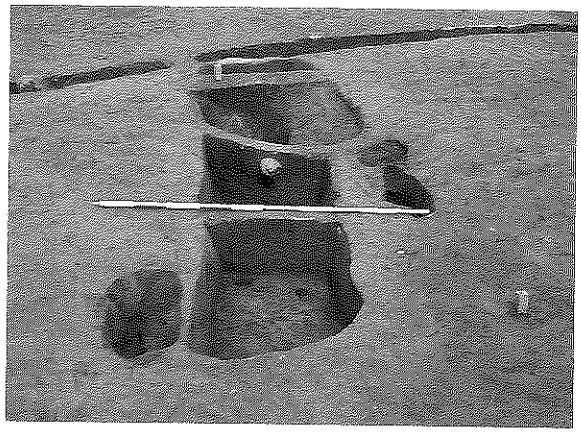
図版 2



主な遺構配置（右下が北）



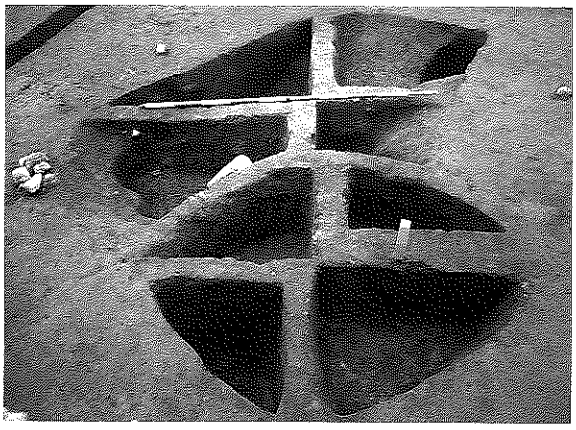
SK-01　南より



SK-02・SX-03（奥）　南より

SR-01・SD-03（右奥）　北より

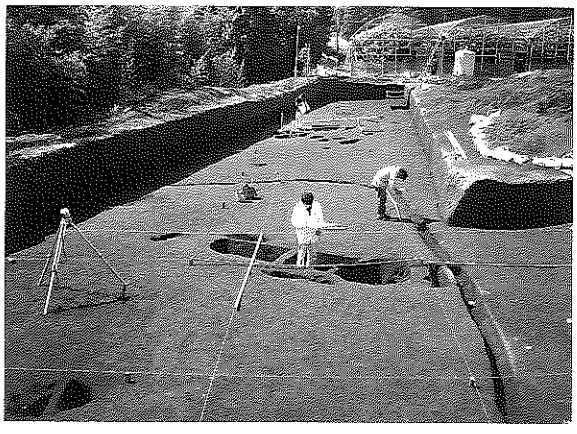
SD-02　北東より



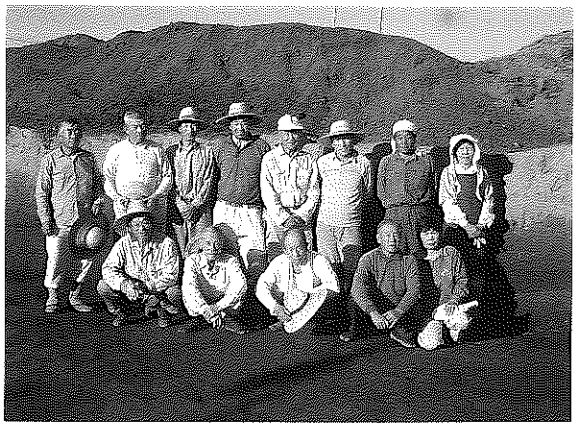
SX-01（手前）・SX-02（奥）　北より

自然礫の確認（サブトレンチ）

集石遺構　北西より

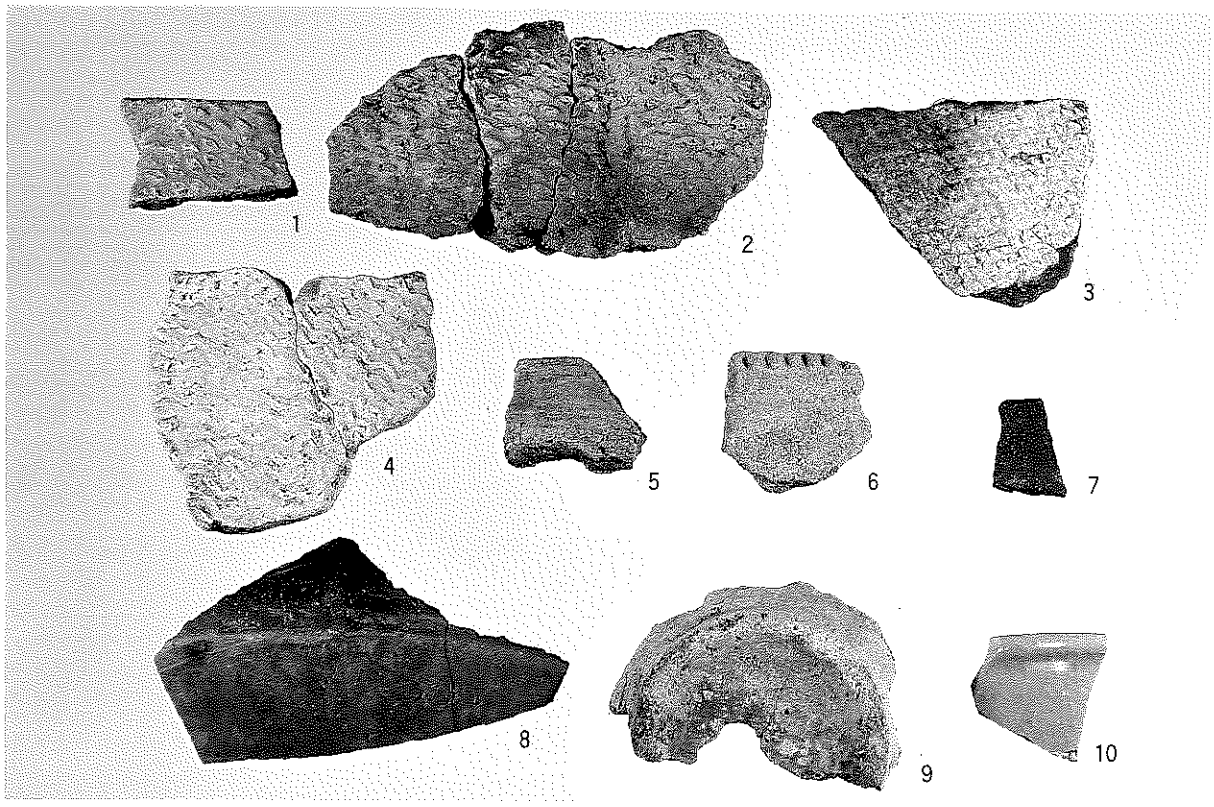


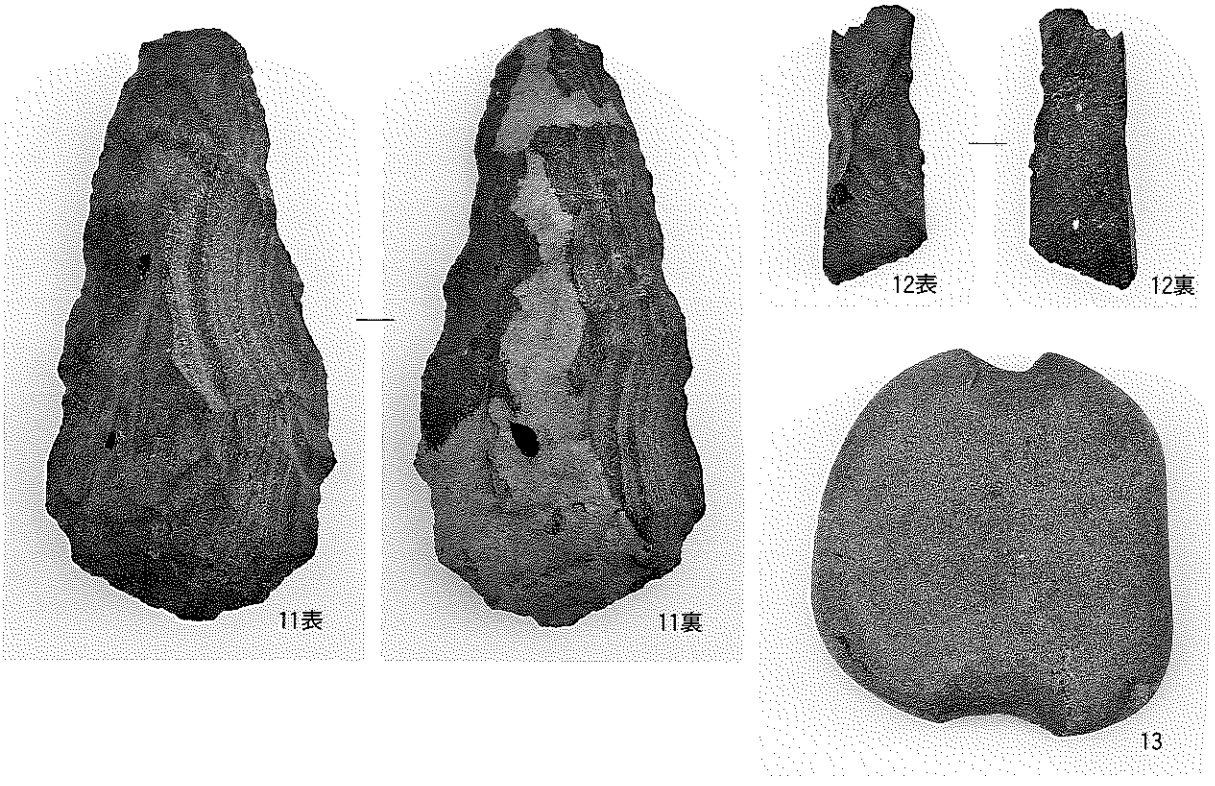
測量作業風景



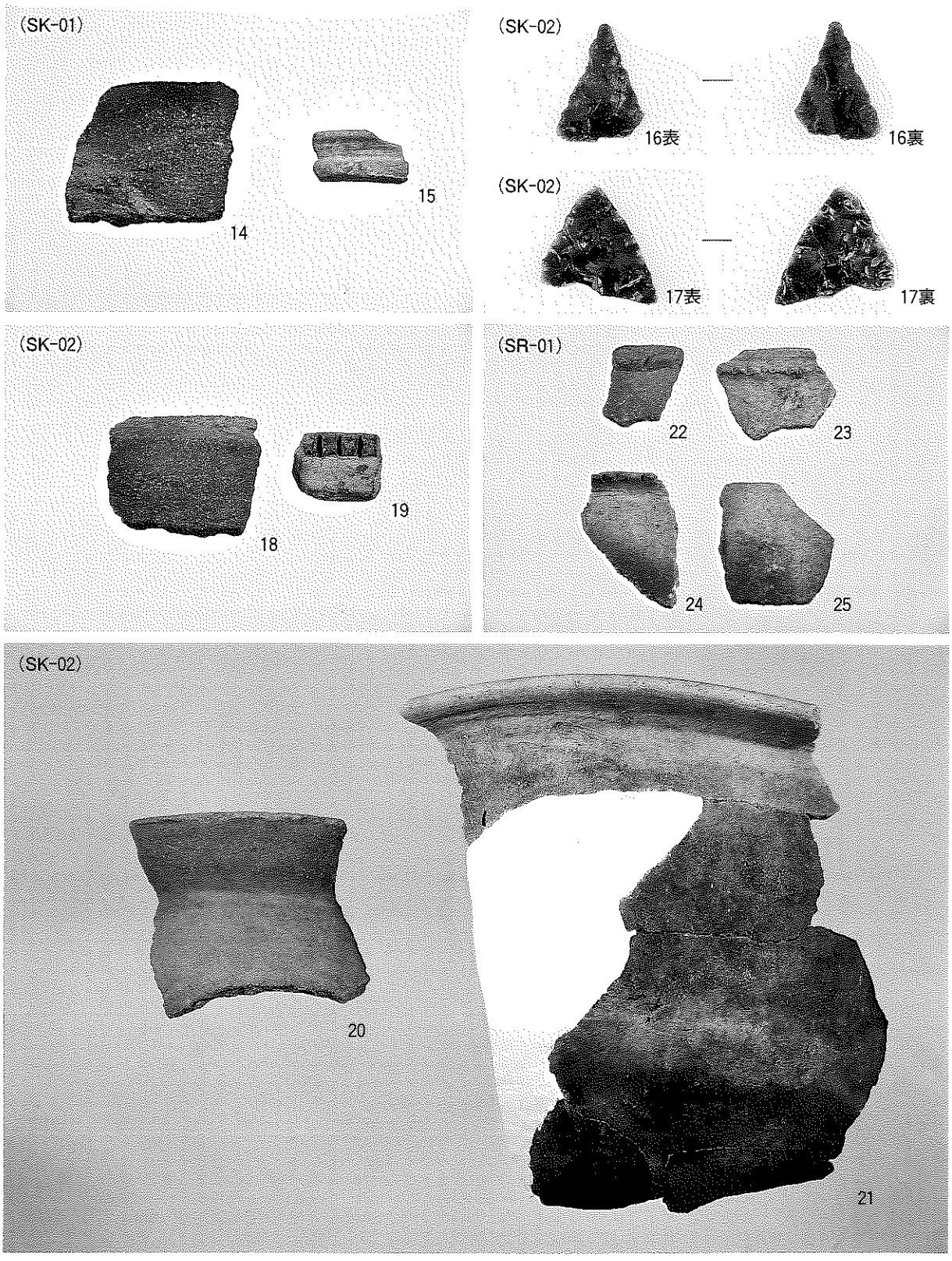
現地調査に参加して頂いた方々

図版 4



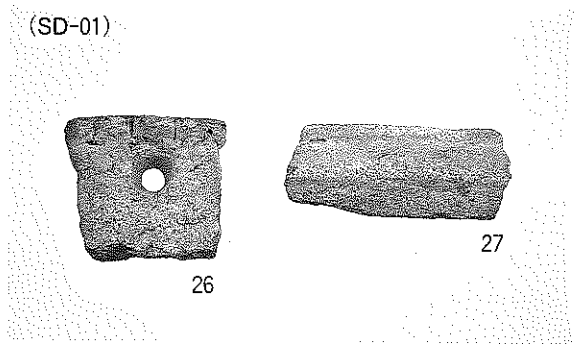


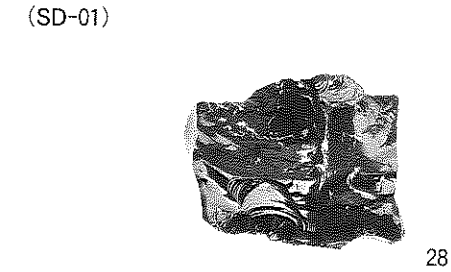
範囲確認調査出土遺物

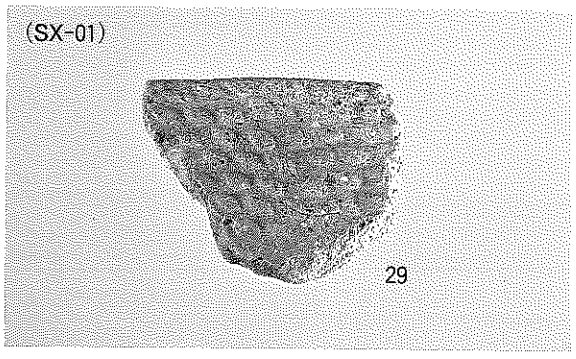

(SK-01)
14
15
(SK-02)
16表
16裏
(SK-02)
17表
17裏
(SK-02)
18
19
(SR-01)
22
23
24
25
(SK-02)
20
21

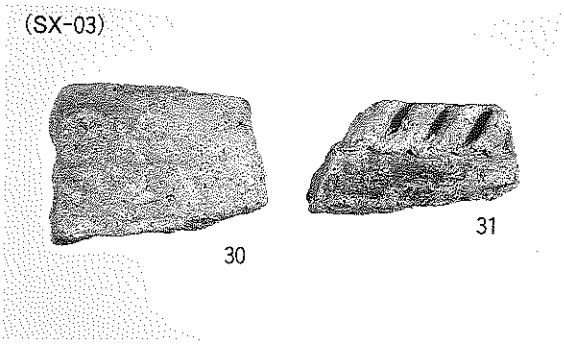
遺構内出土遺物①

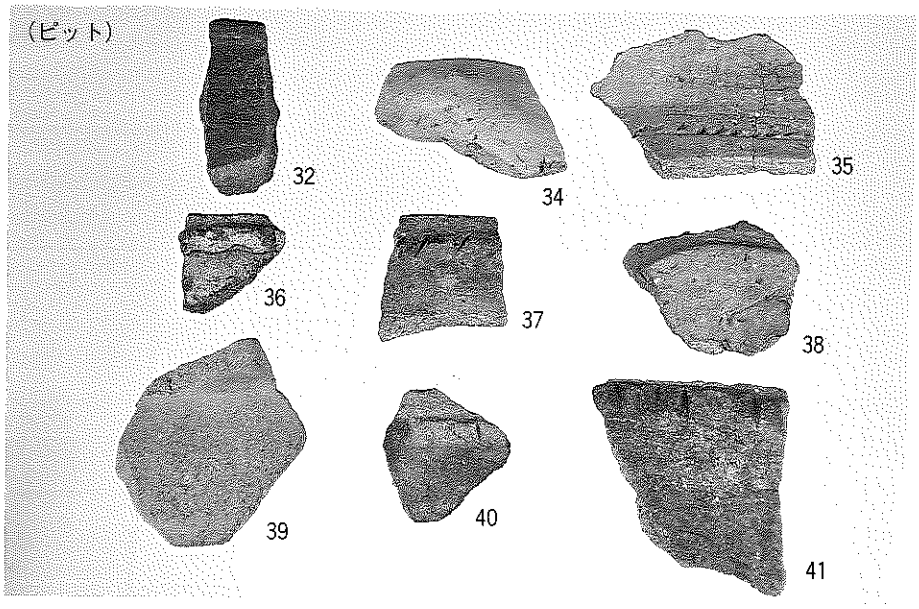
図版 6

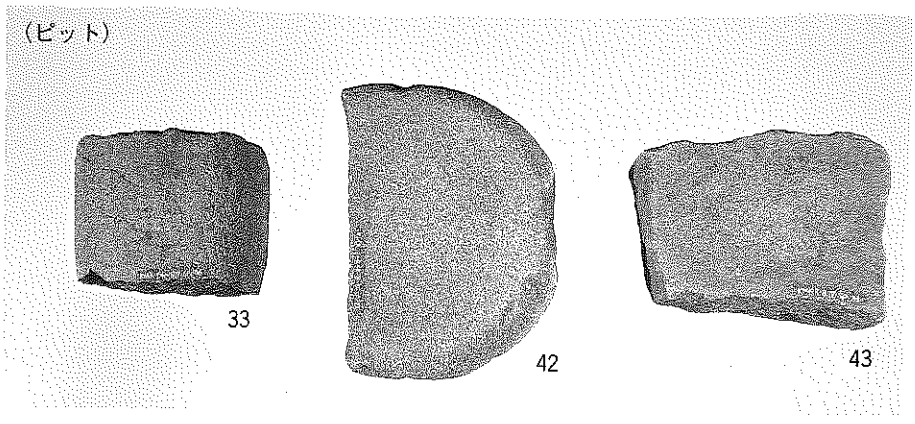




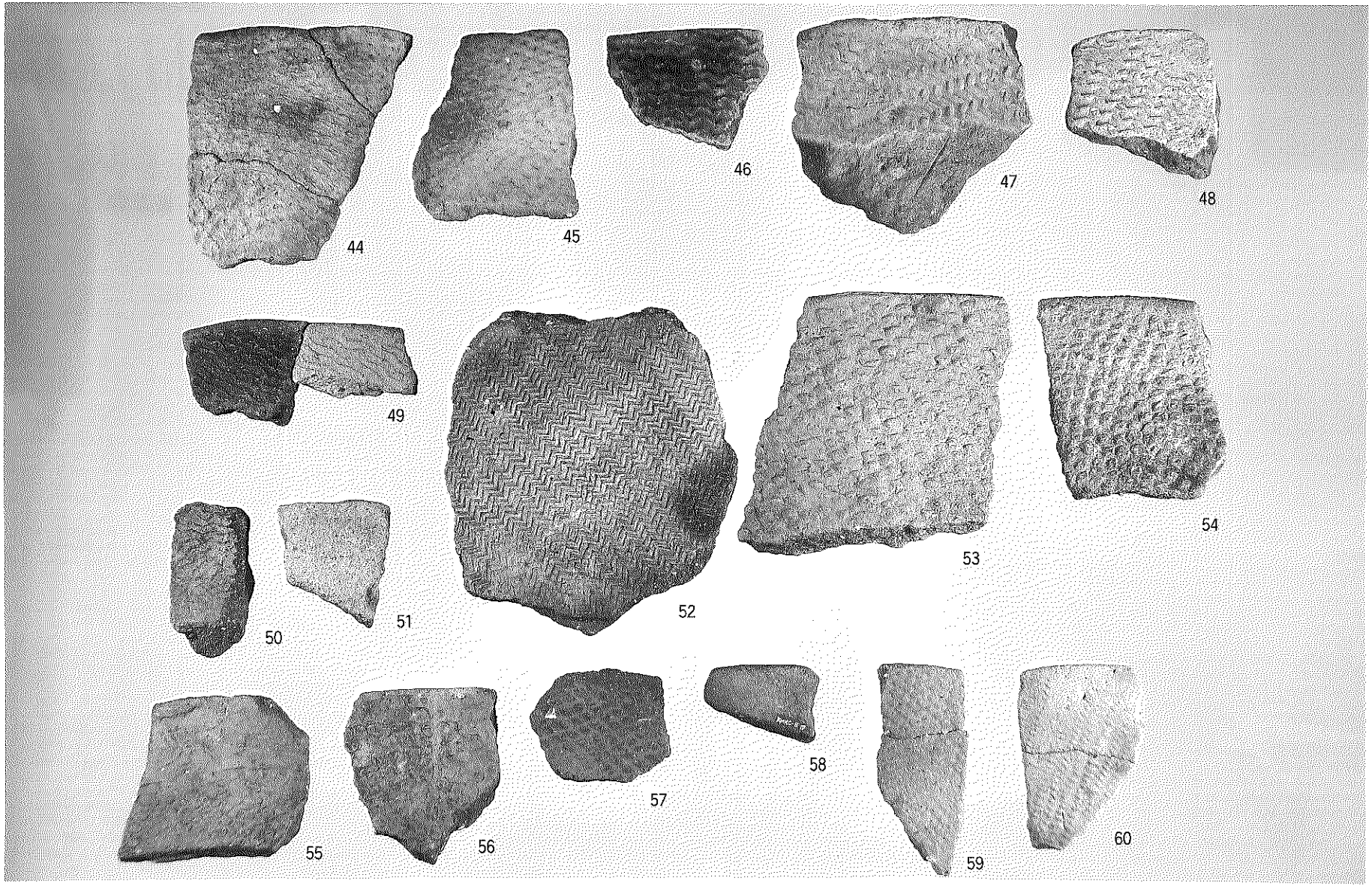






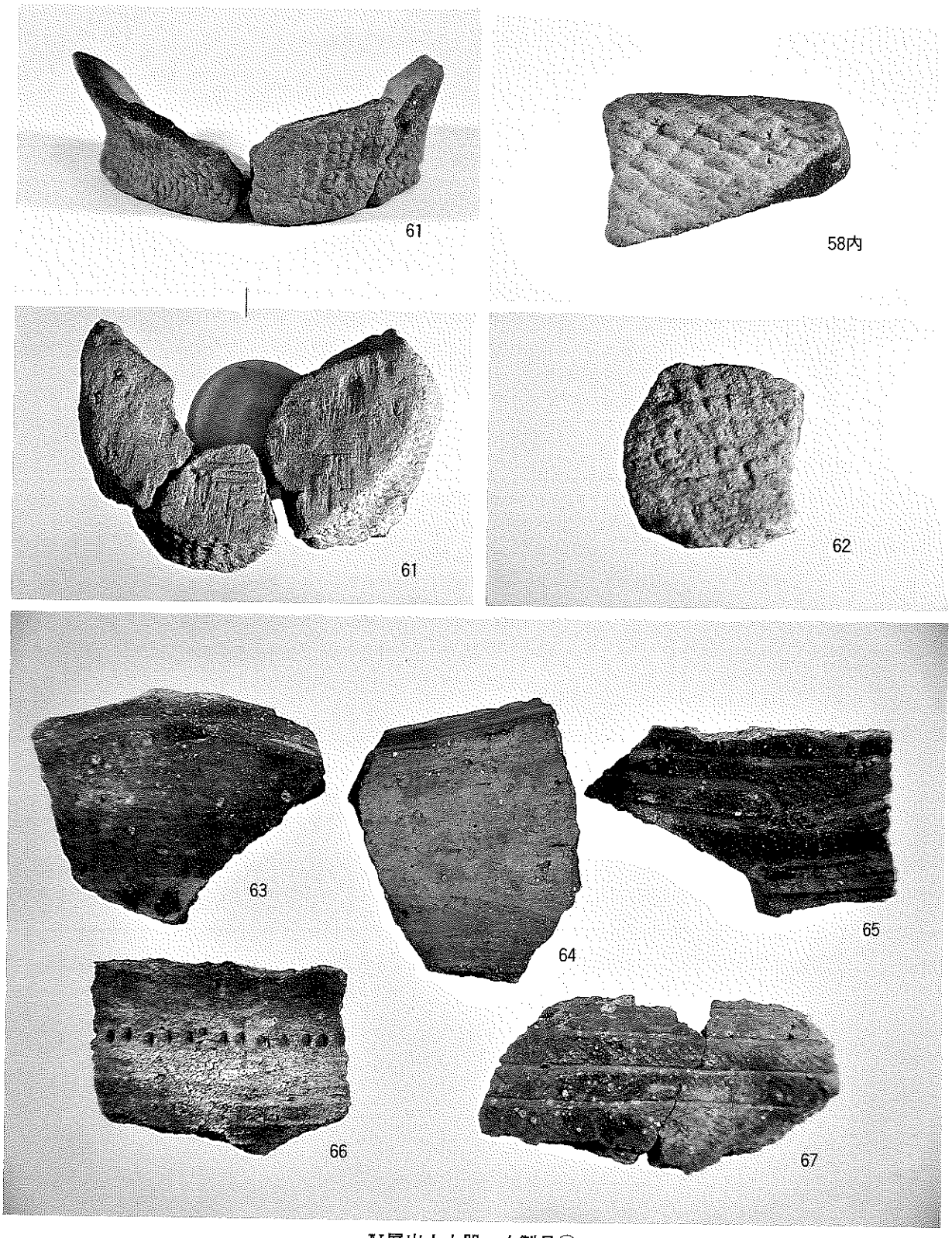


遺構内出土遺物②

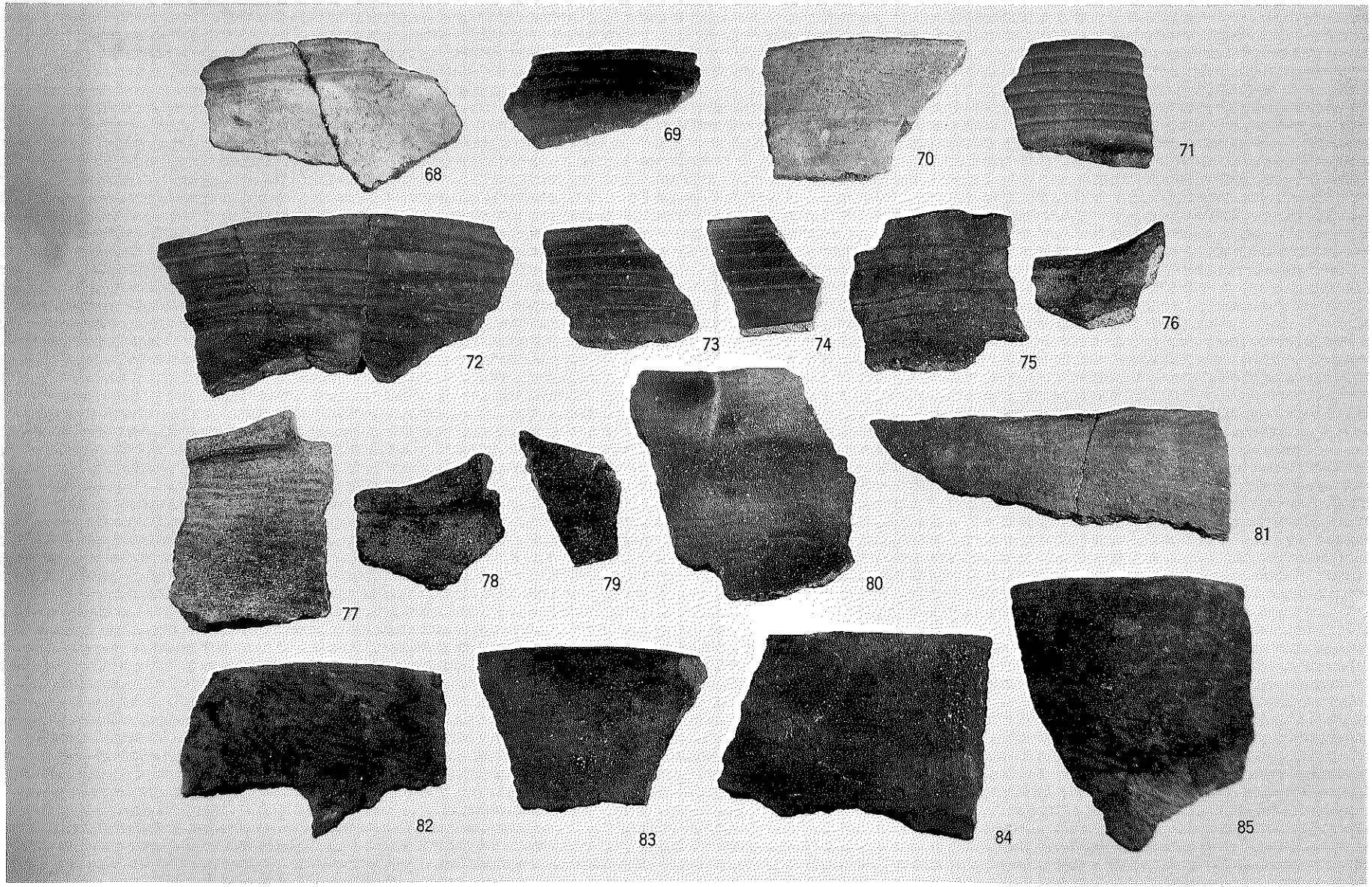


Ⅳ層出土土器・土製品①

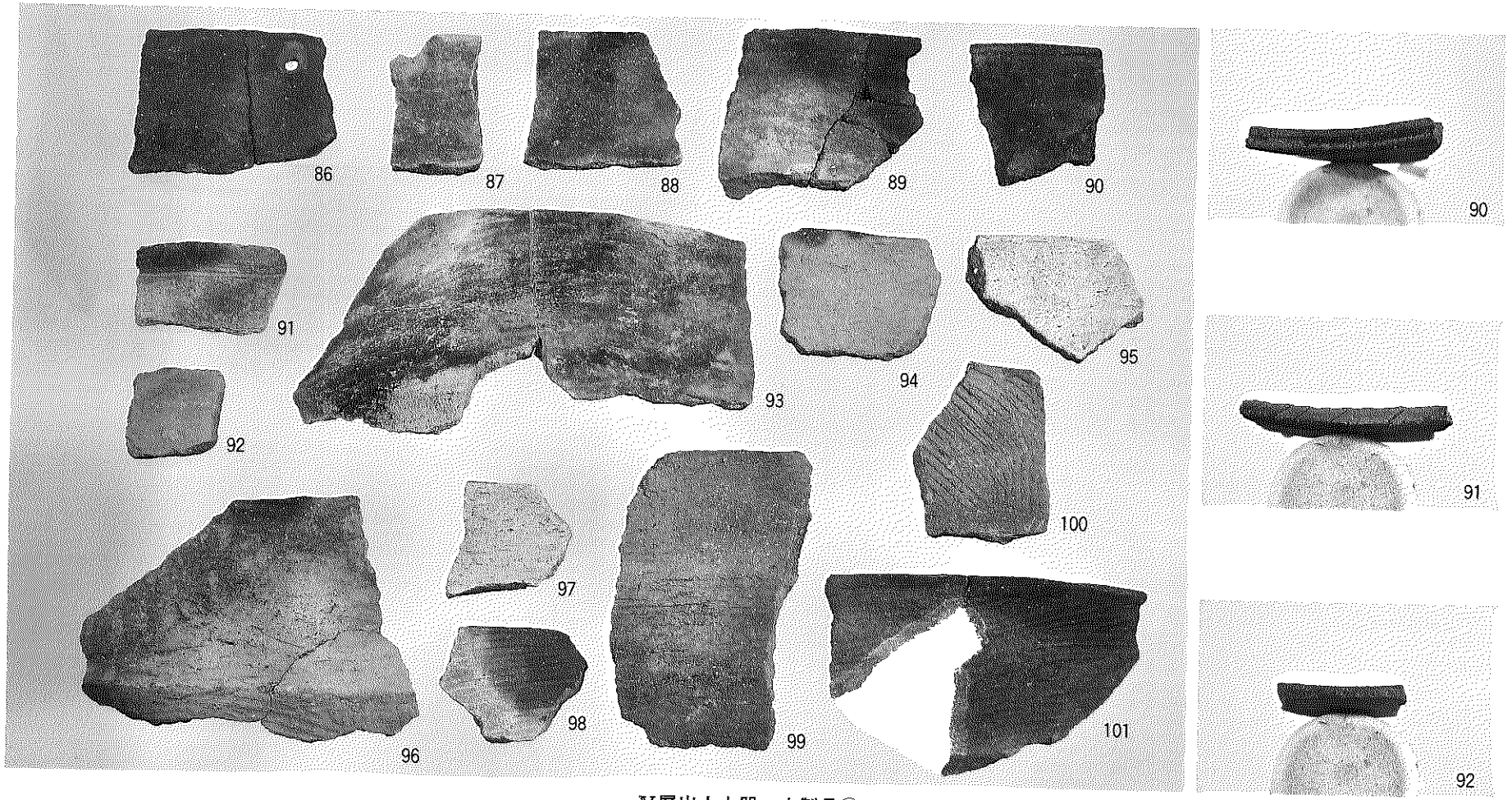
図版 8



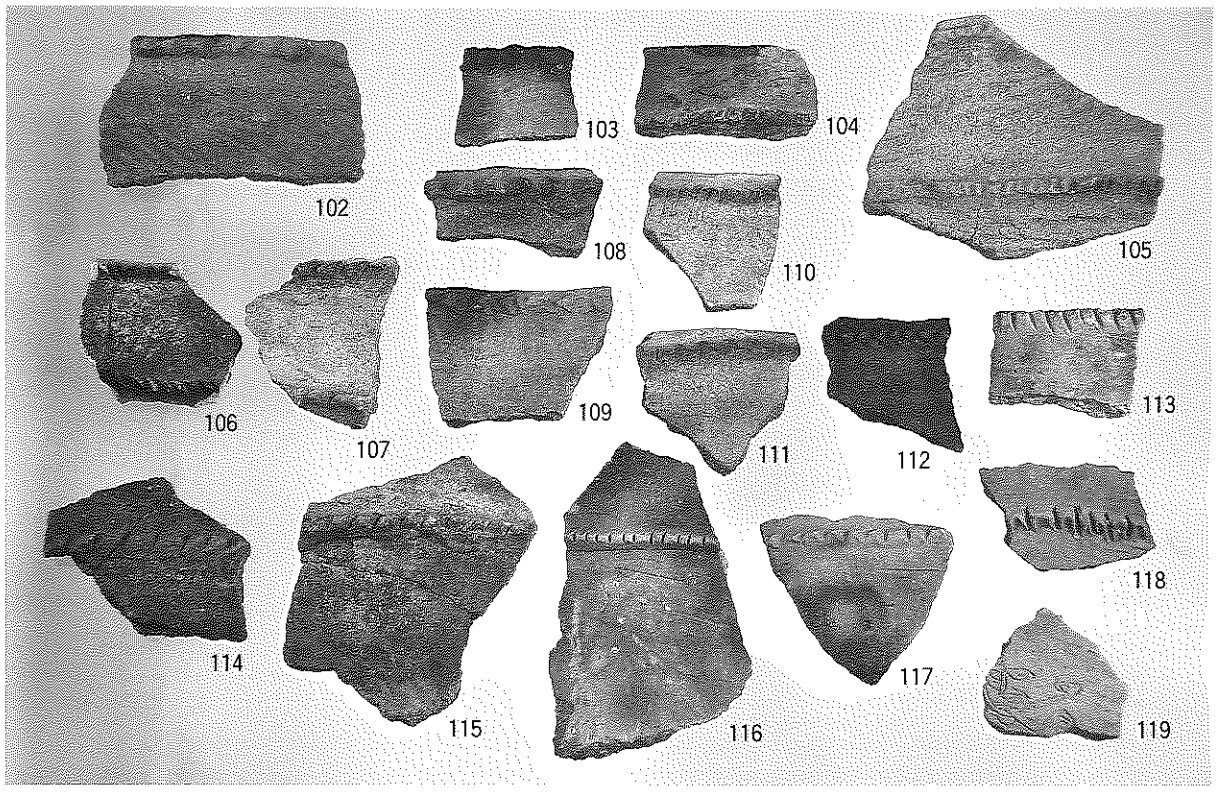
Ⅳ層出土土器・土製品②

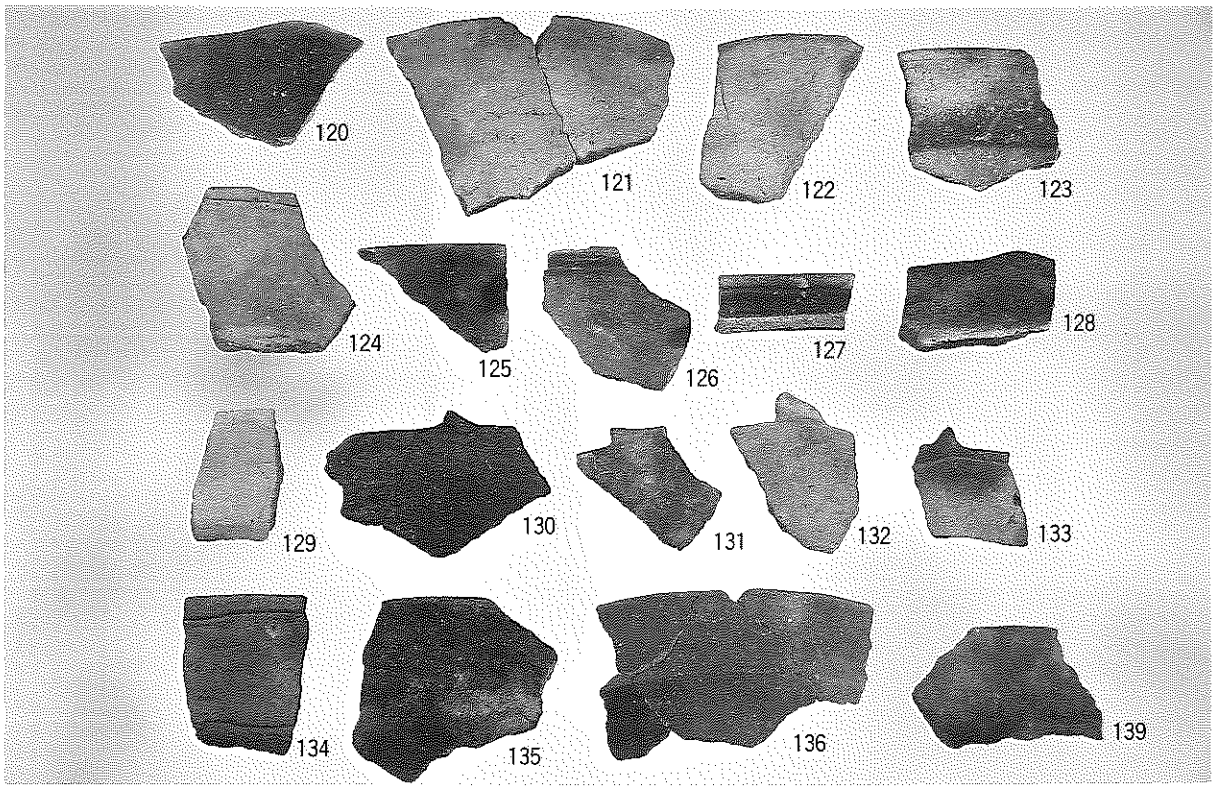


Ⅳ層出土土器・土製品③



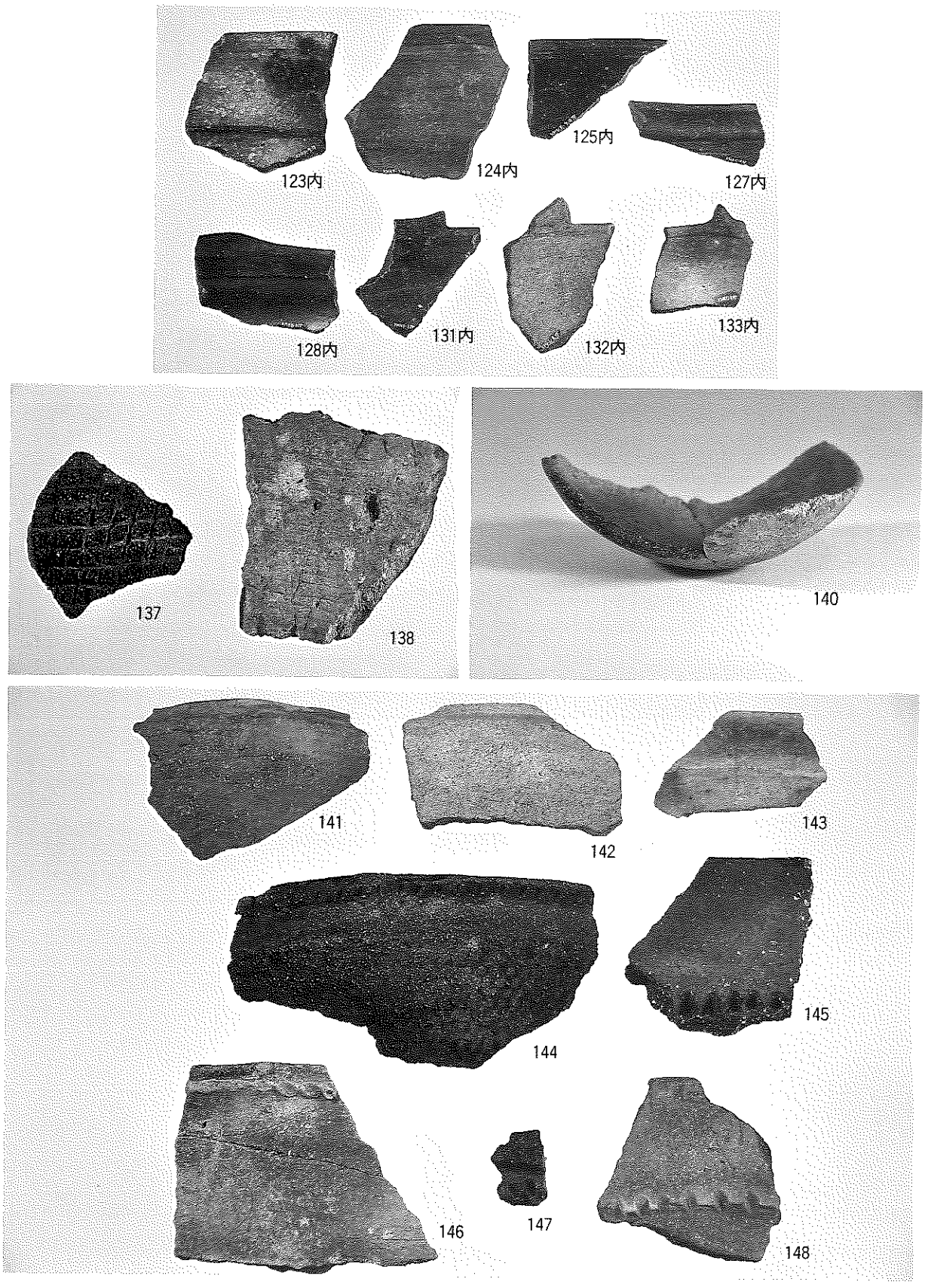
Ⅳ層出土土器・土製品④


102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119

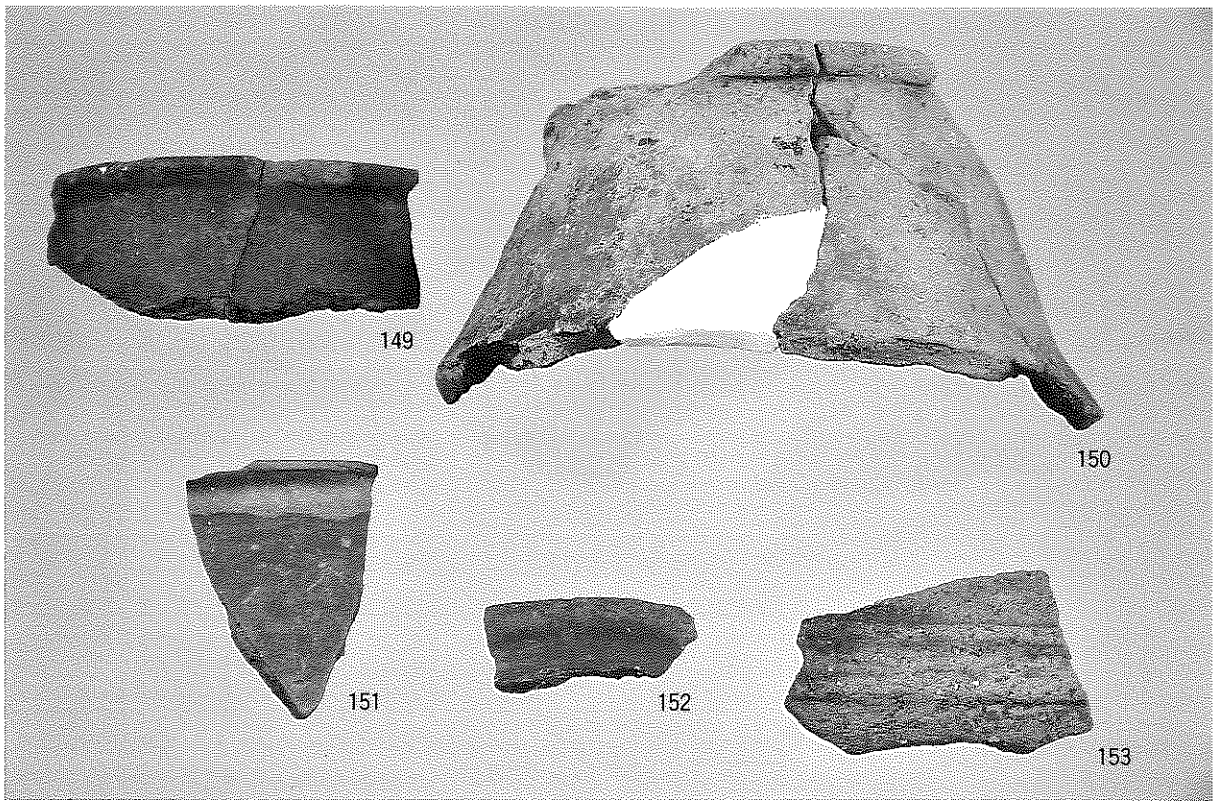

120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
139

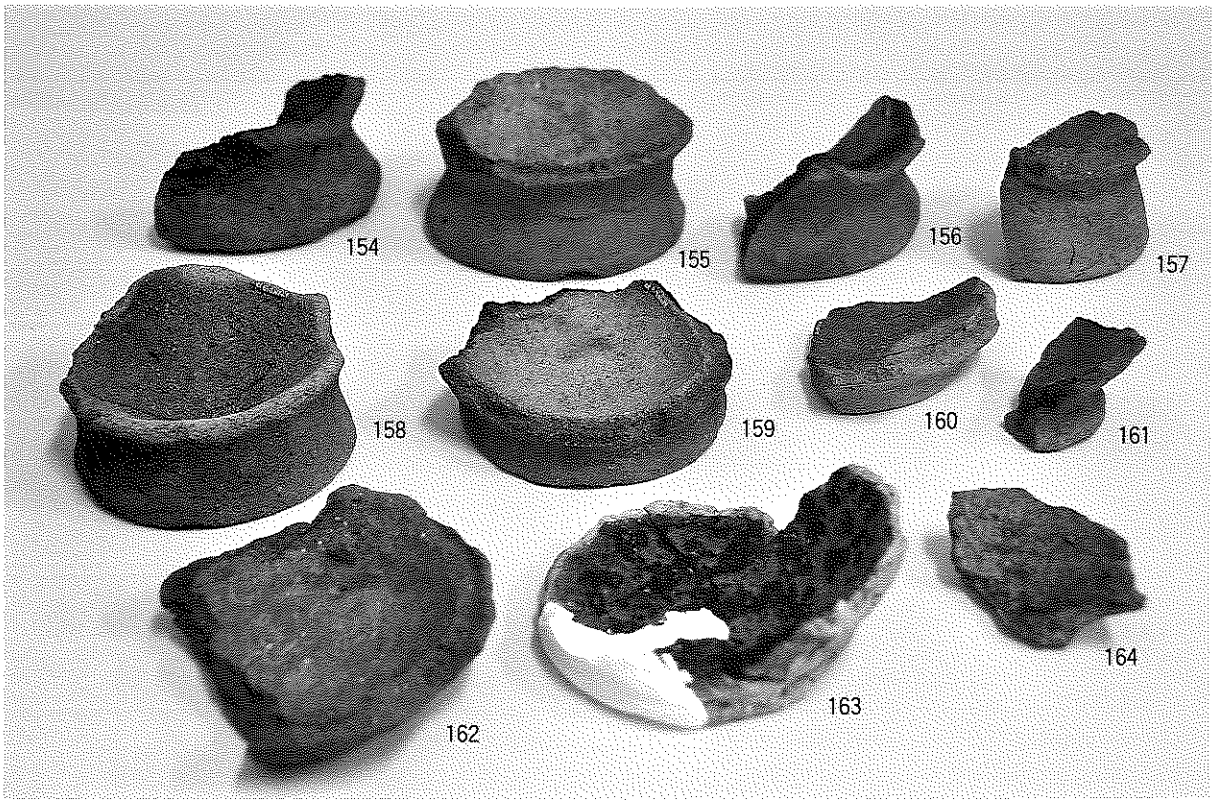
Ⅳ層出土土器・土製品⑤

図版12



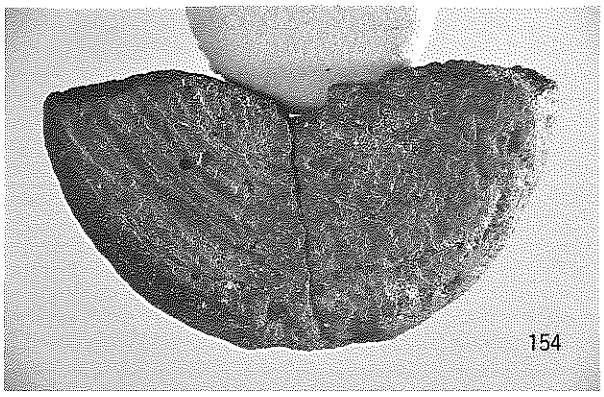
Ⅳ層出土土器・土製品⑥

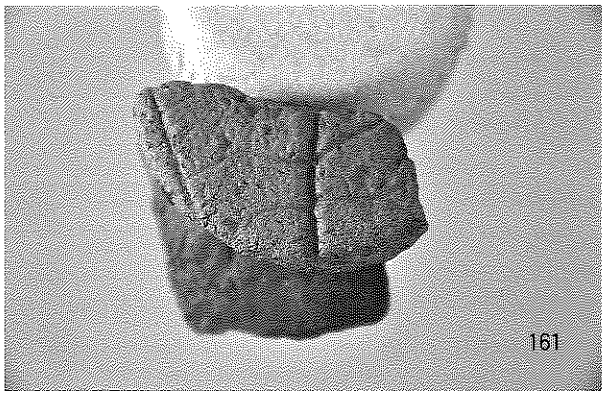


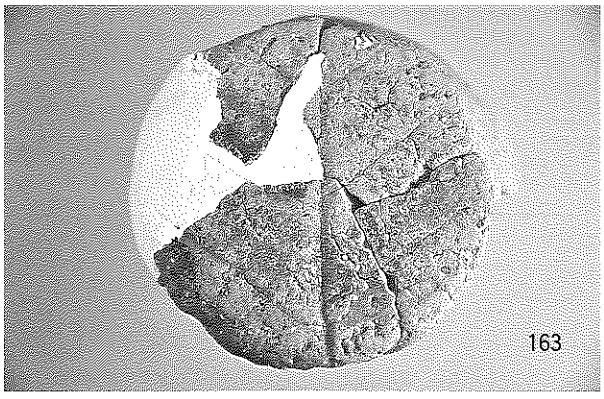


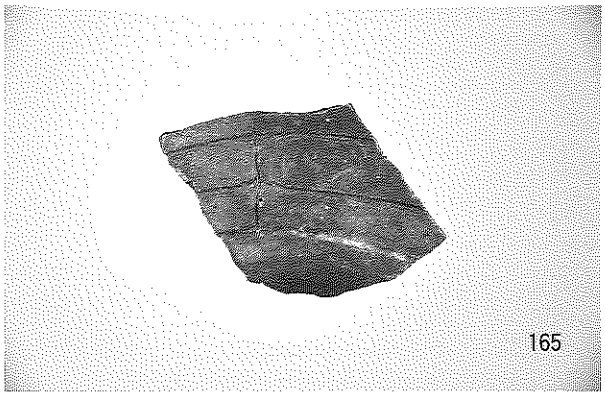
Ⅳ層出土土器・土製品⑦

図版14

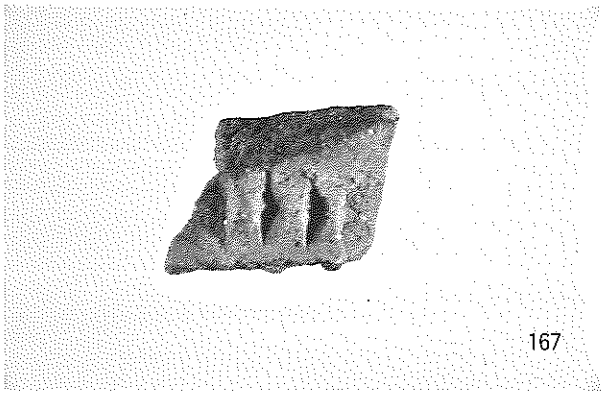

154


161


163


165

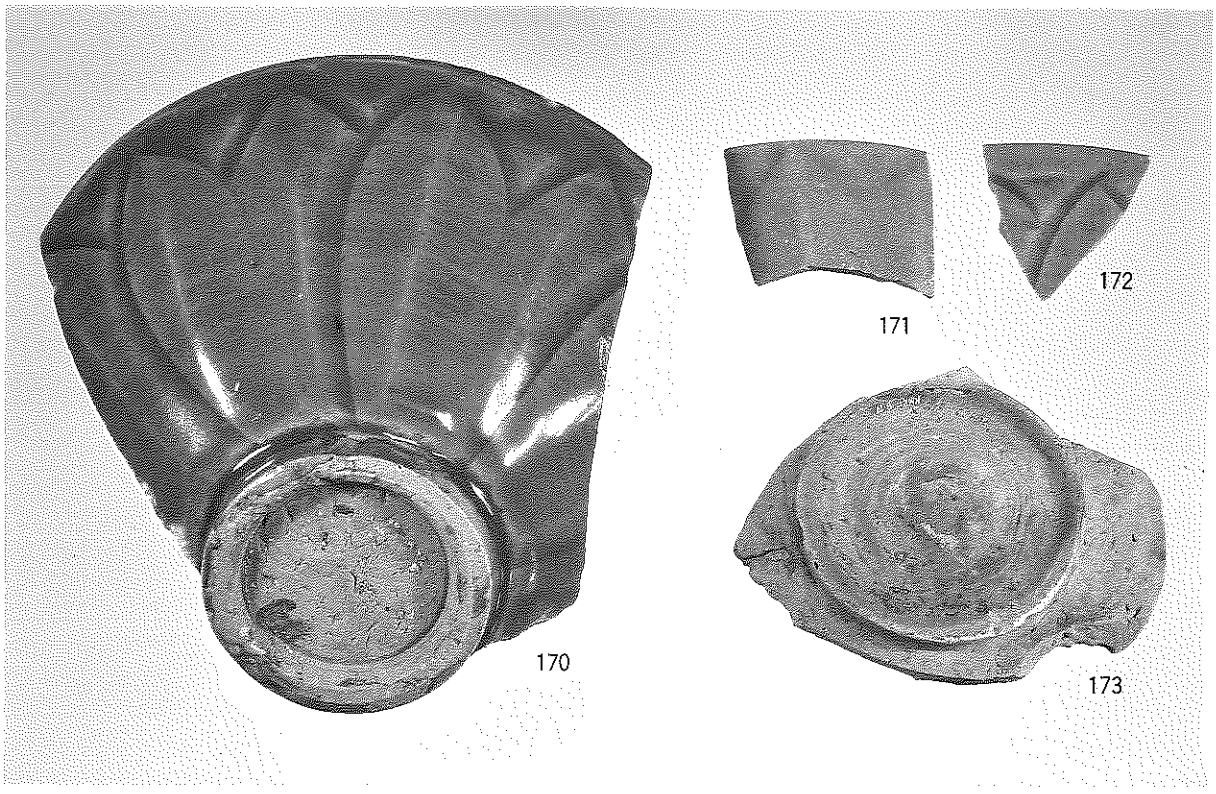
166


167

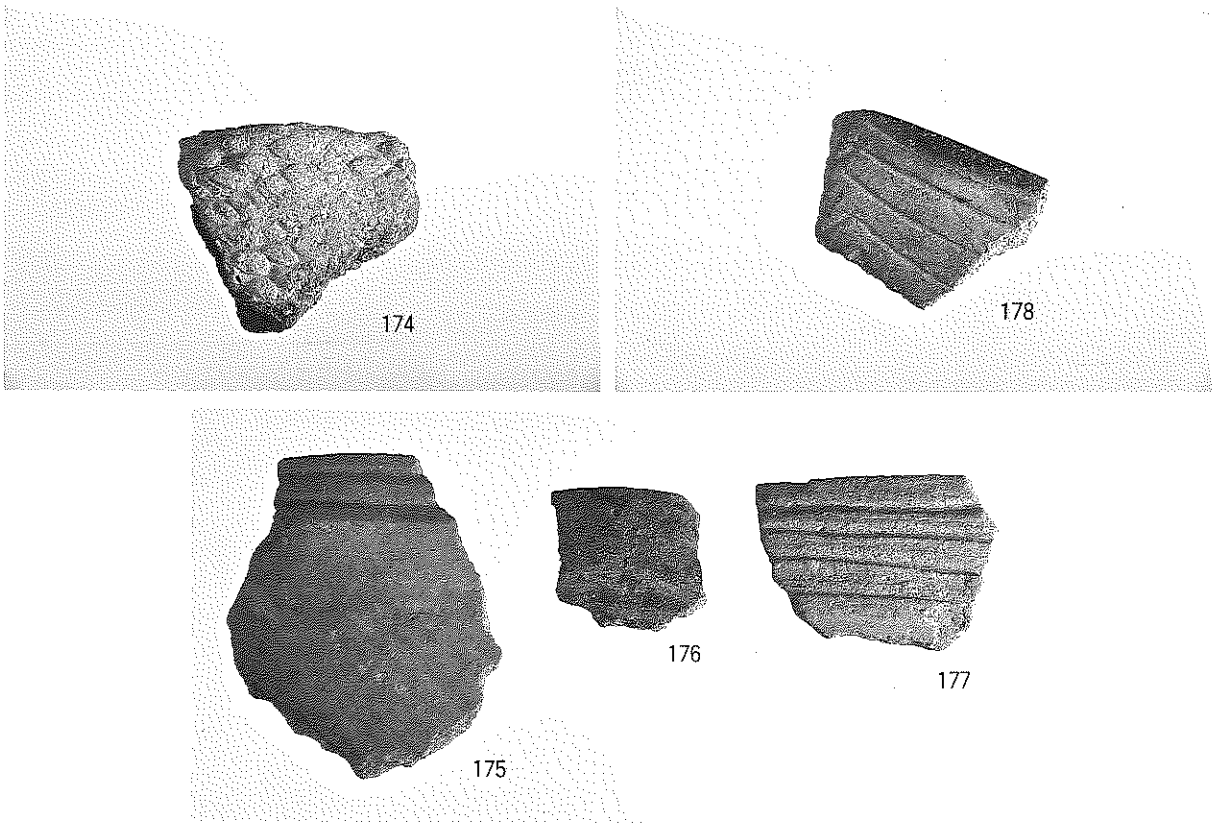
168

169

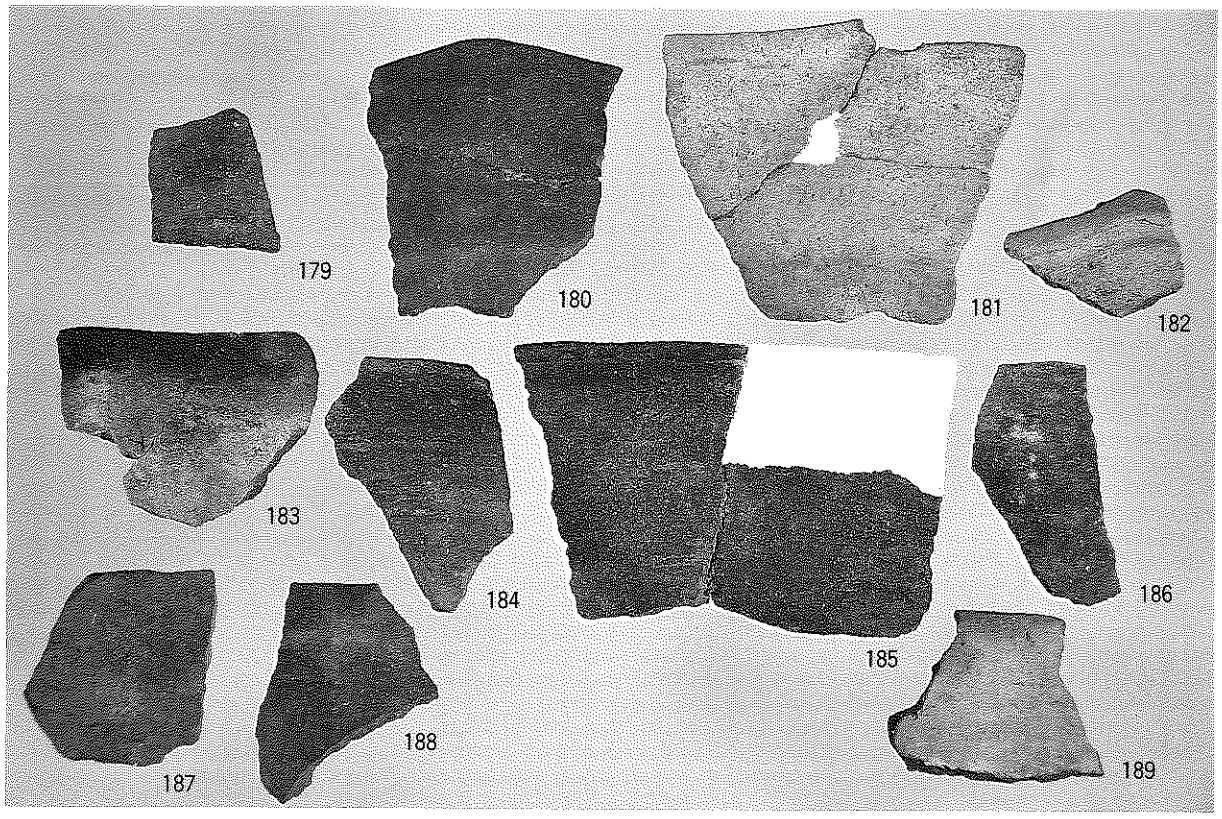
Ⅳ層出土土器・土製品⑧

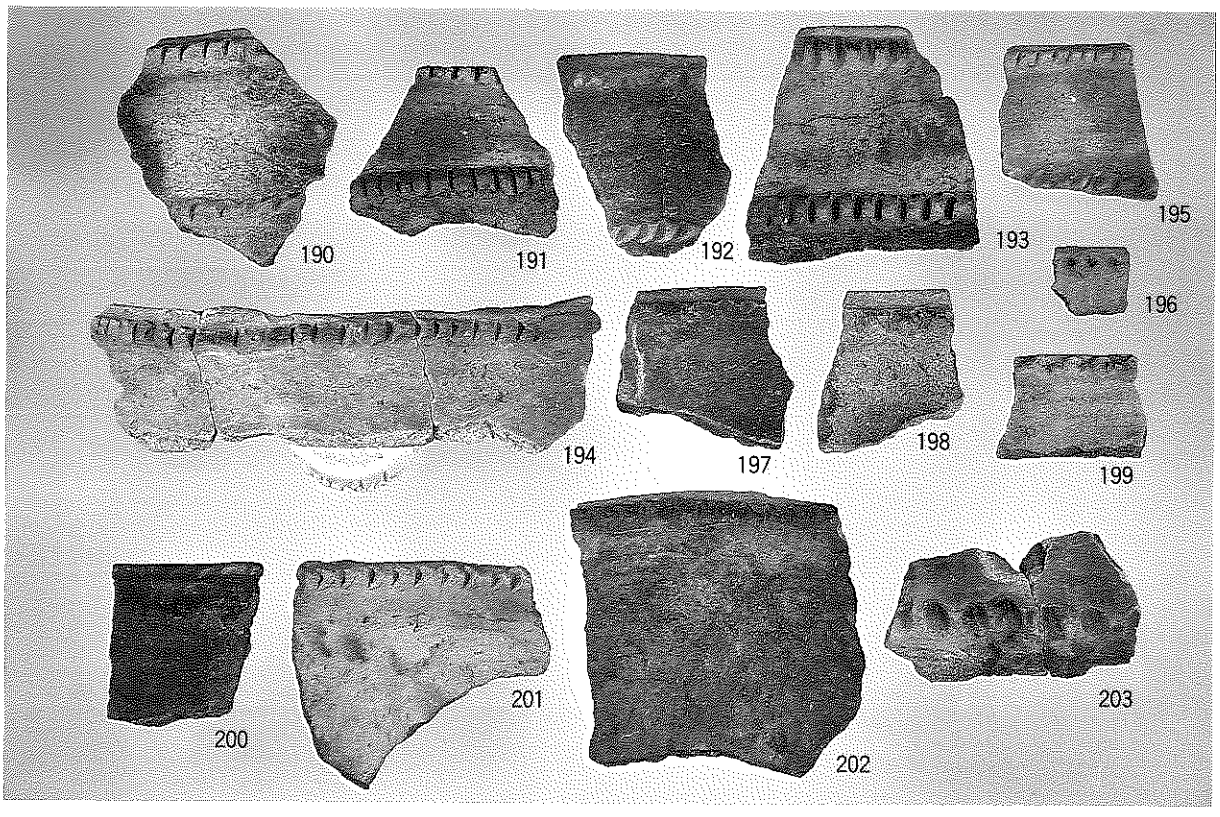


Ⅳ層出土土器・土製品⑨

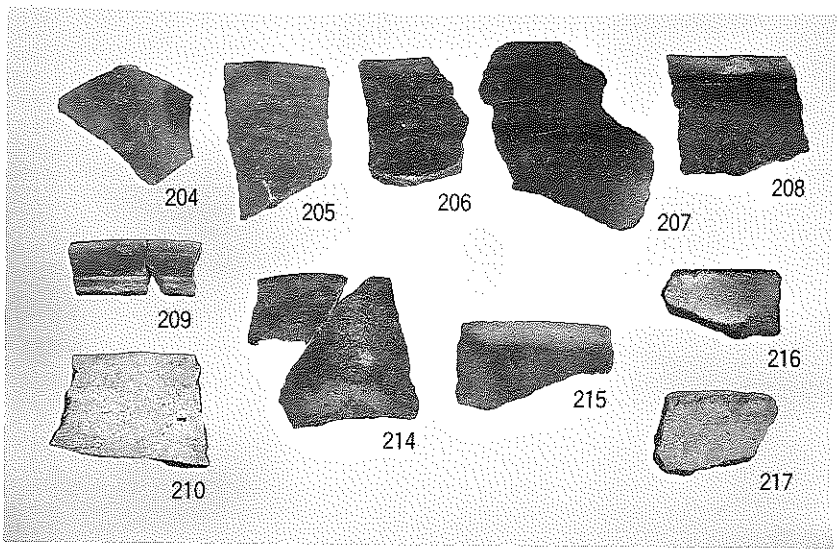


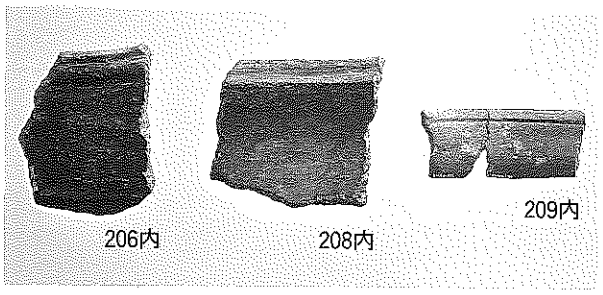
Ⅲ層出土土器・土製品①

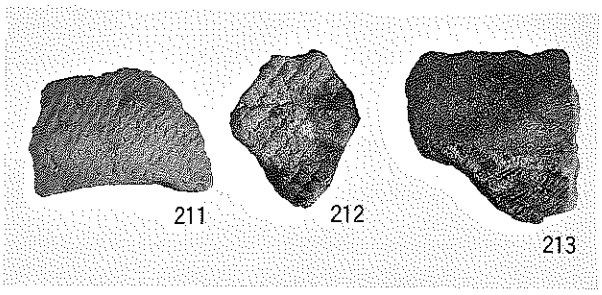

179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189

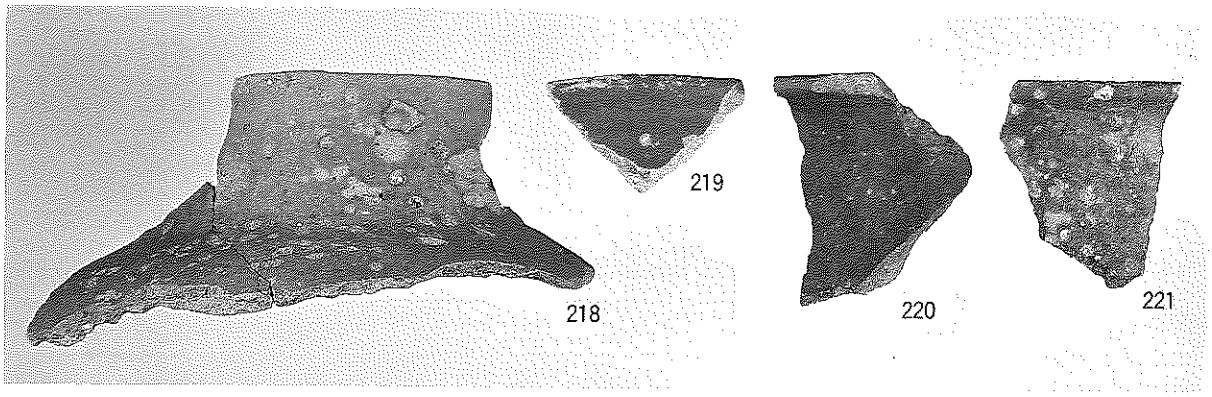

190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203

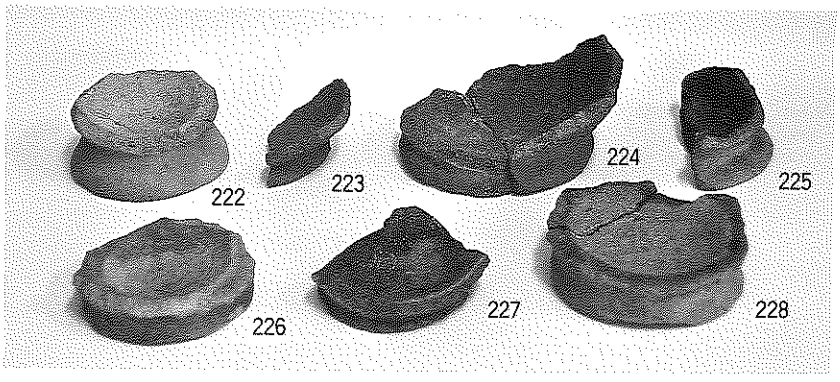
Ⅲ層出土土器・土製品②


204
205
206
207
208
209
210
214
215
216
217


206内
208内
209内

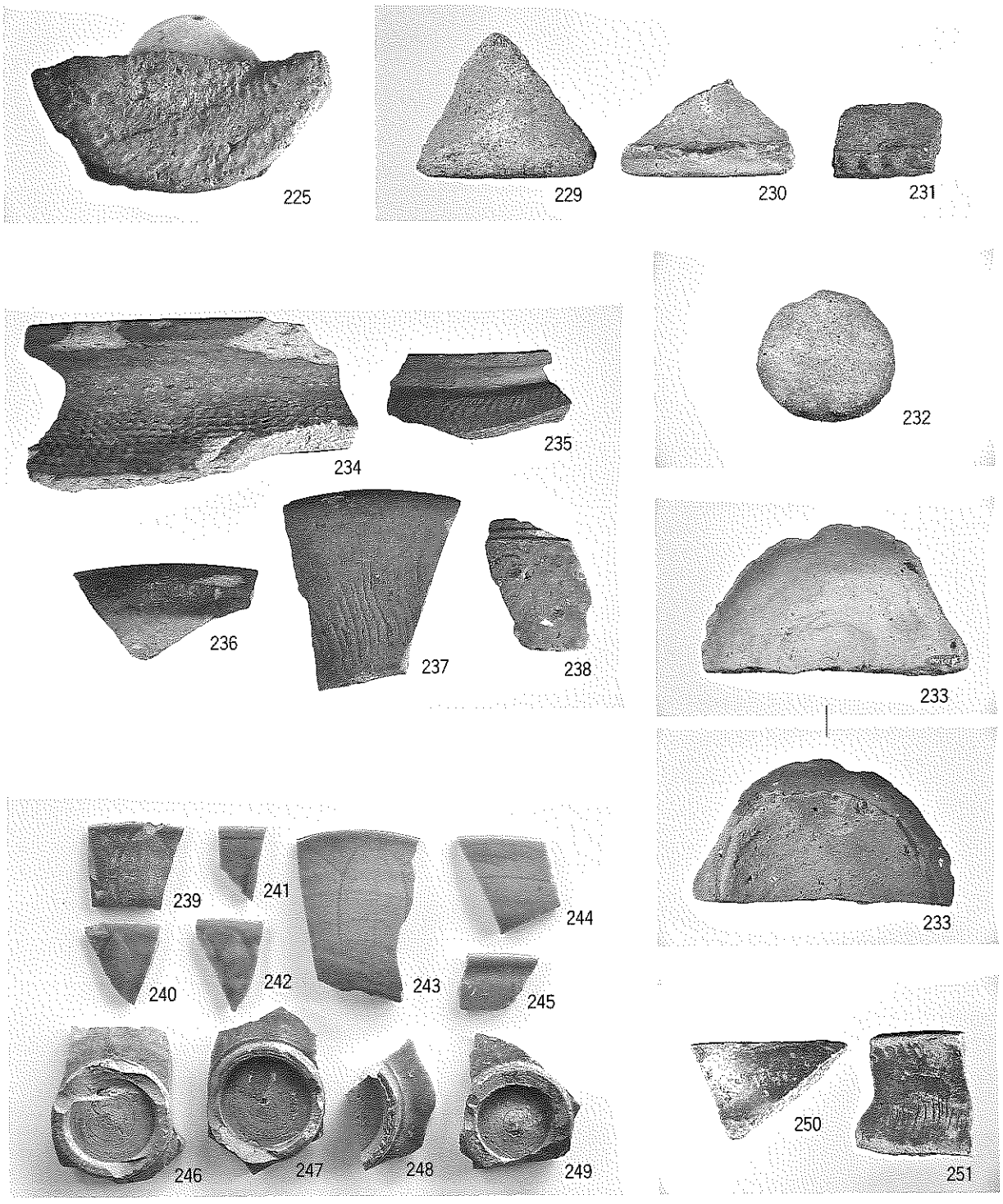

211
212
213


218
219
220
221

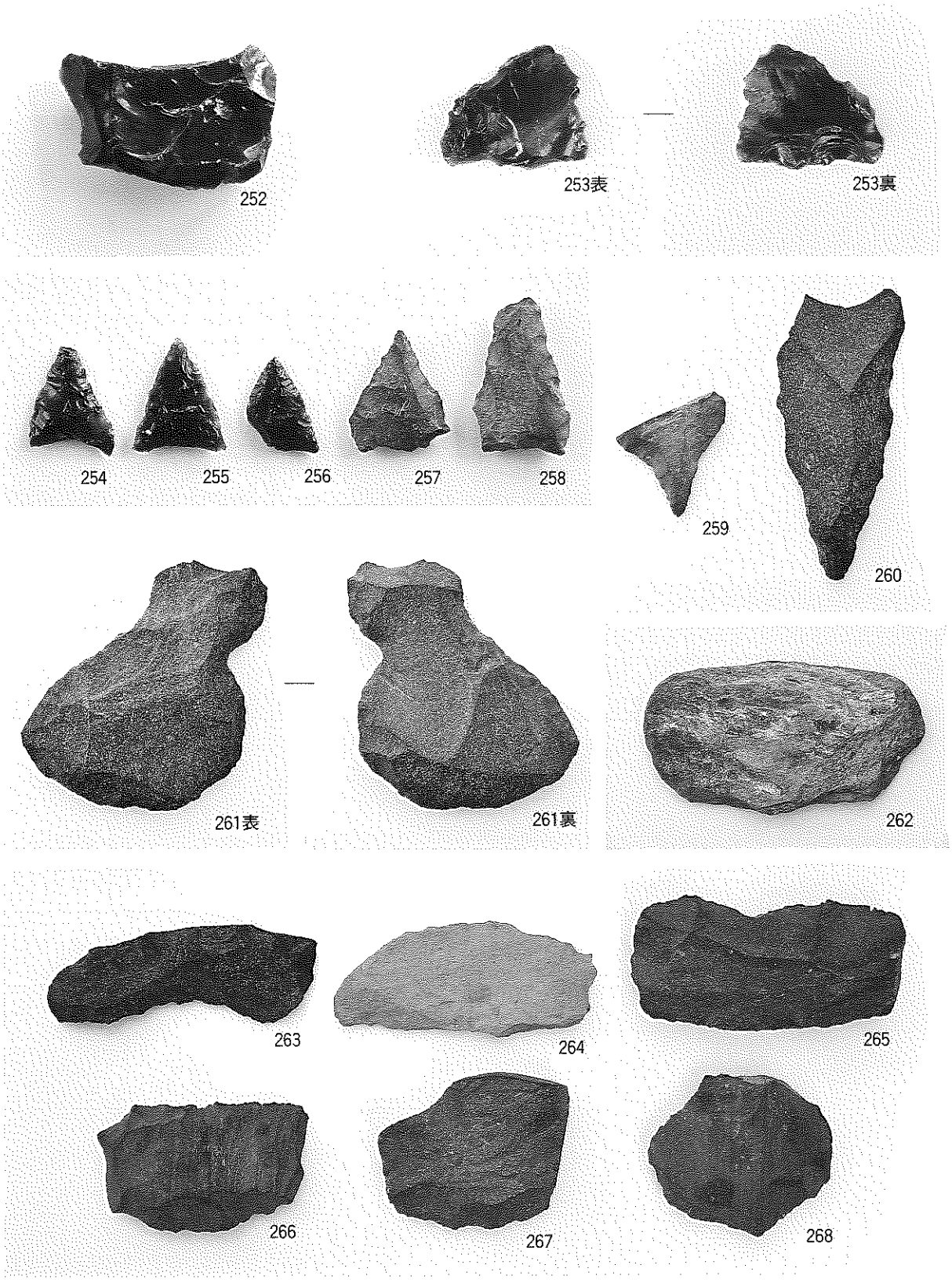

222
223
224
225
226
227
228

Ⅲ層出土土器・土製品③

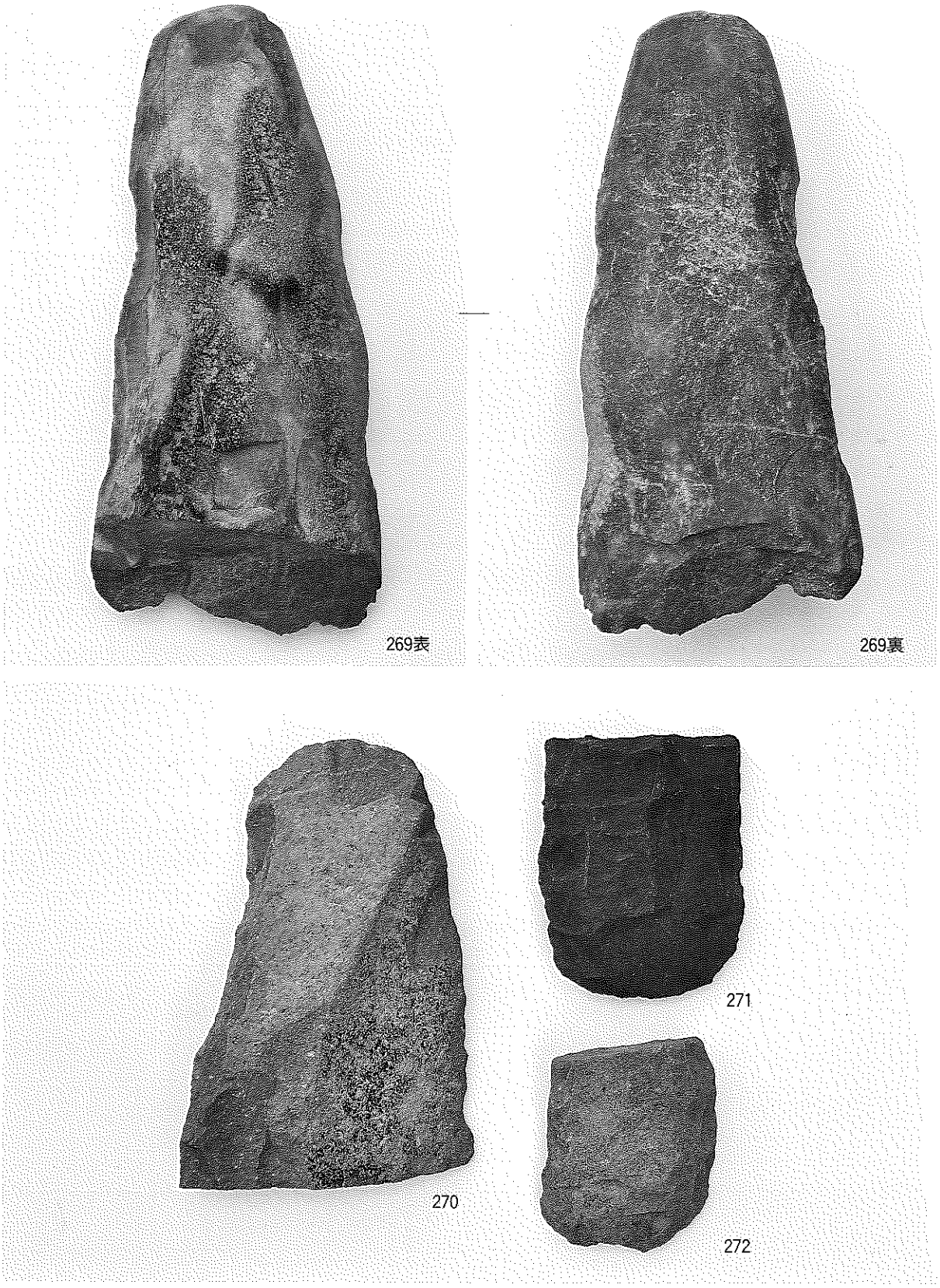
図版18



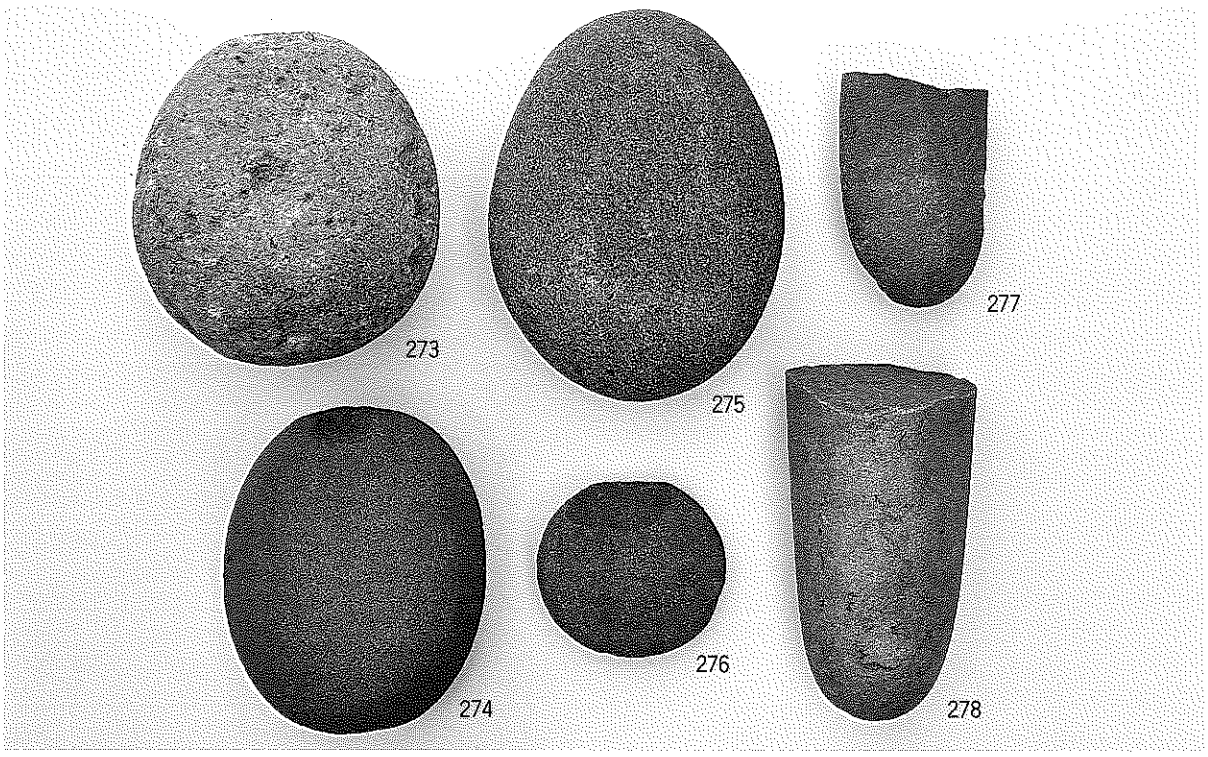
Ⅲ層出土土器・土製品④

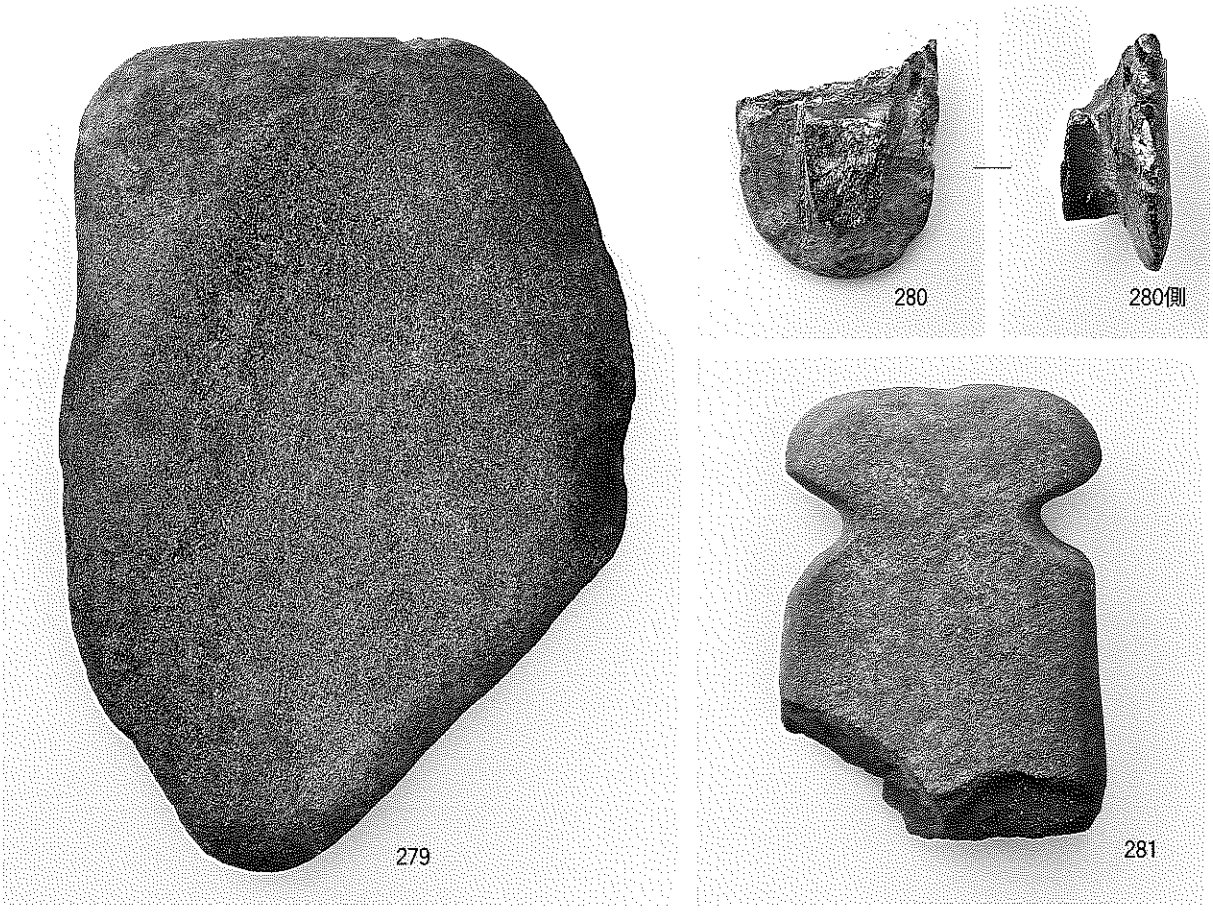

252
253表
253裏
254
255
256
257
258
259
260
261表
261裏
262
263
264
265
266
267
268

Ⅳ層出土石器・石製品①

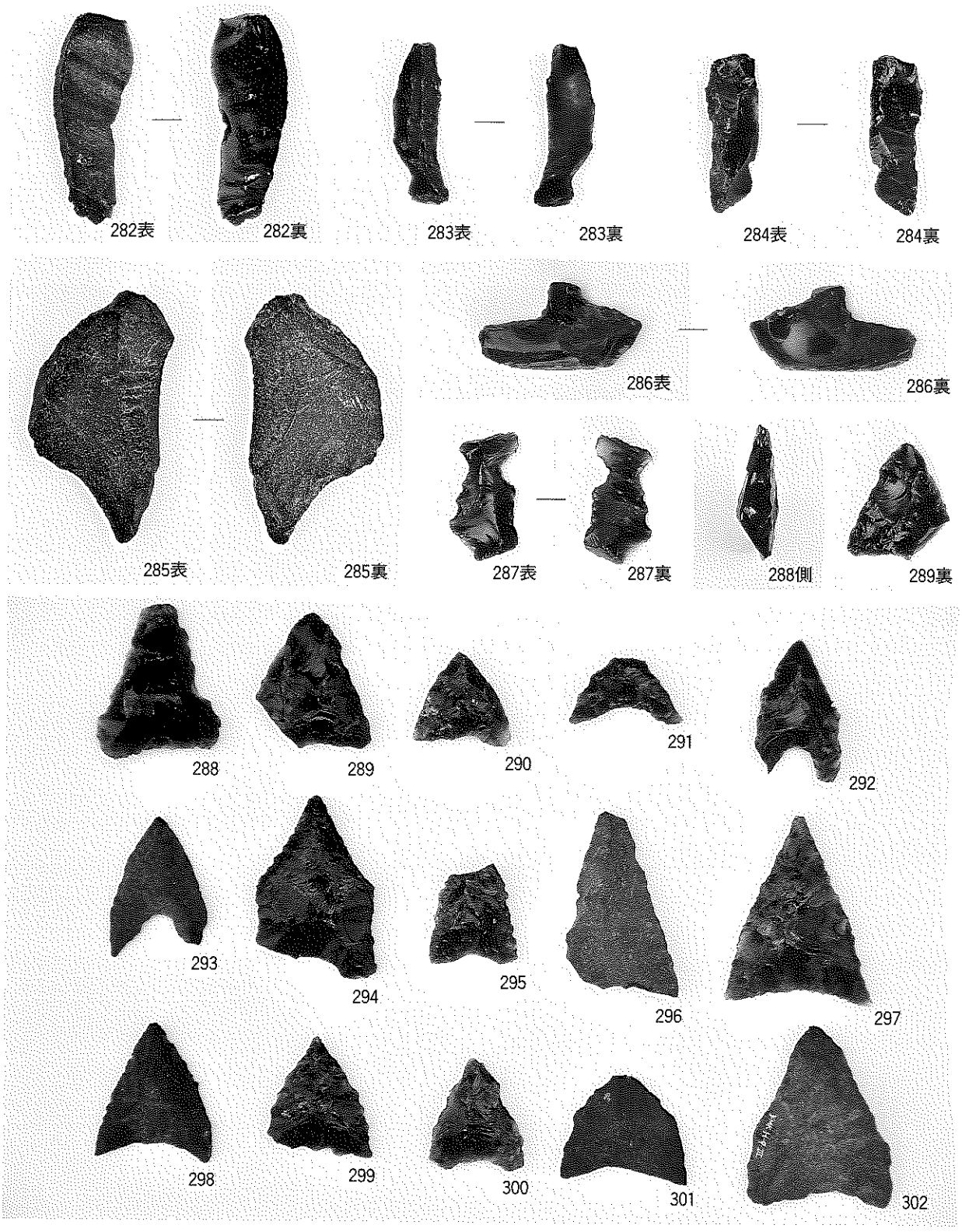


Ⅳ層出土石器・石製品②

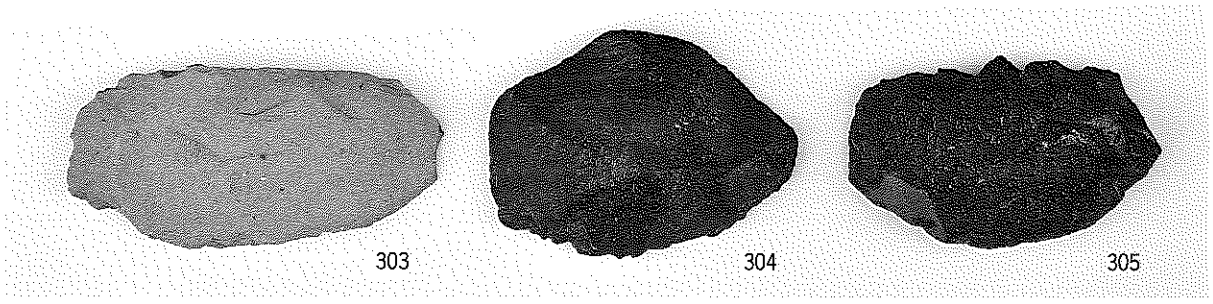


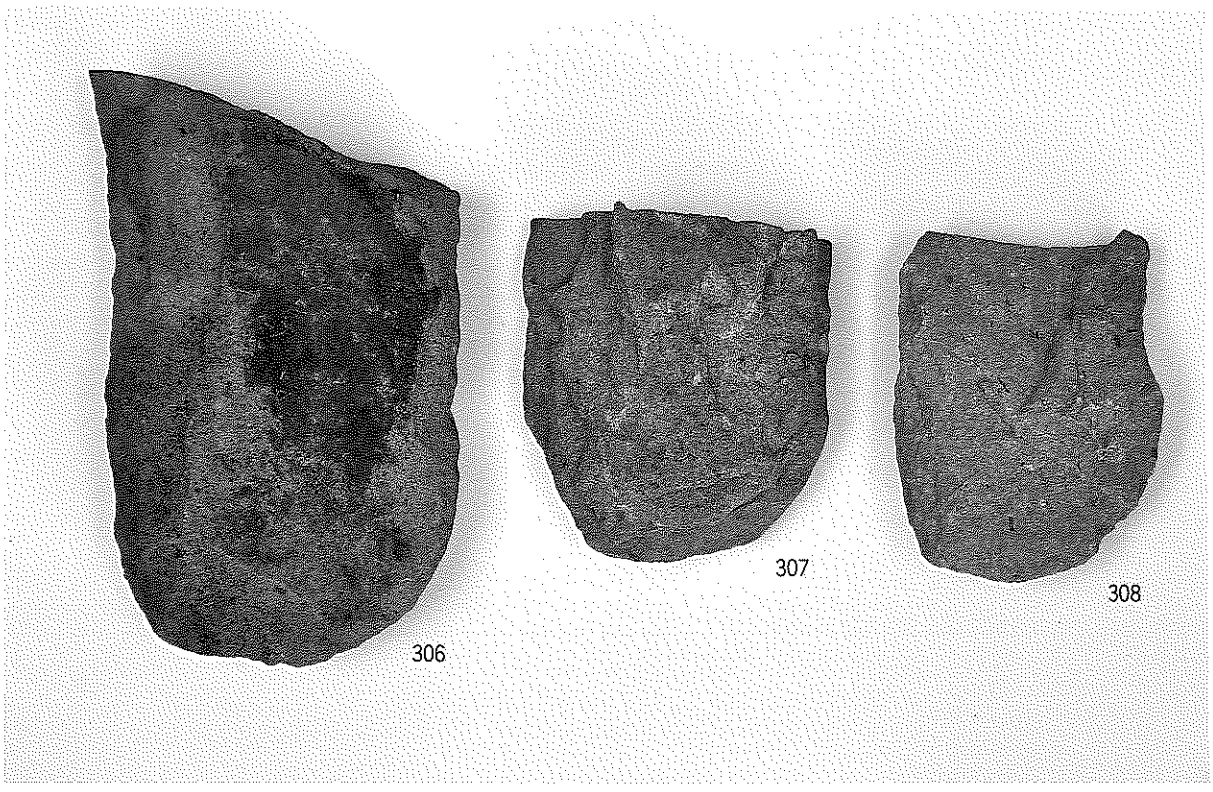


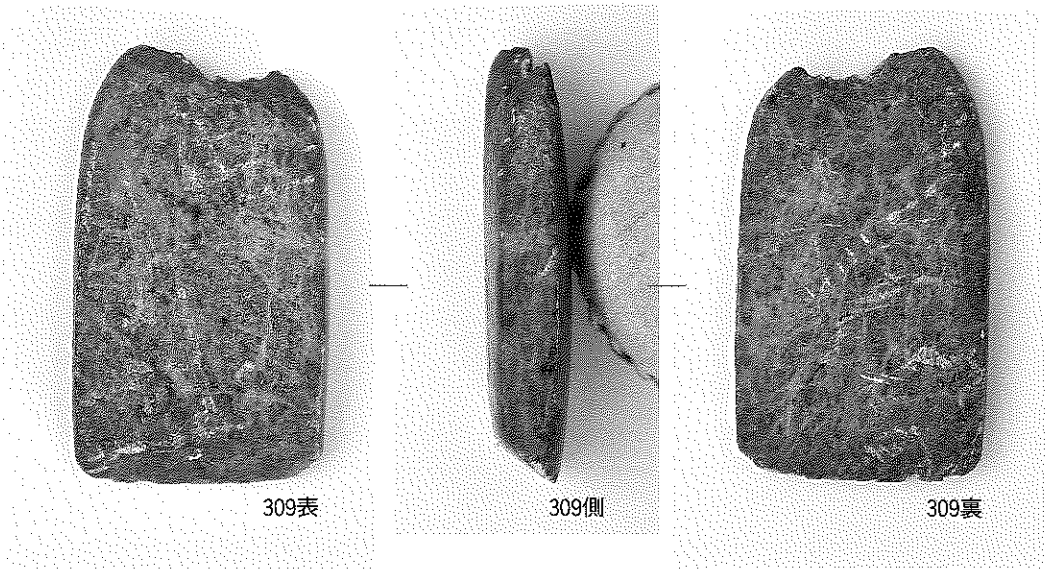
Ⅳ層出土石器・石製品③


282表
282裏
283表
283裏
284表
284裏
285表
285裏
286表
286裏
287表
287裏
288側
289裏
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302

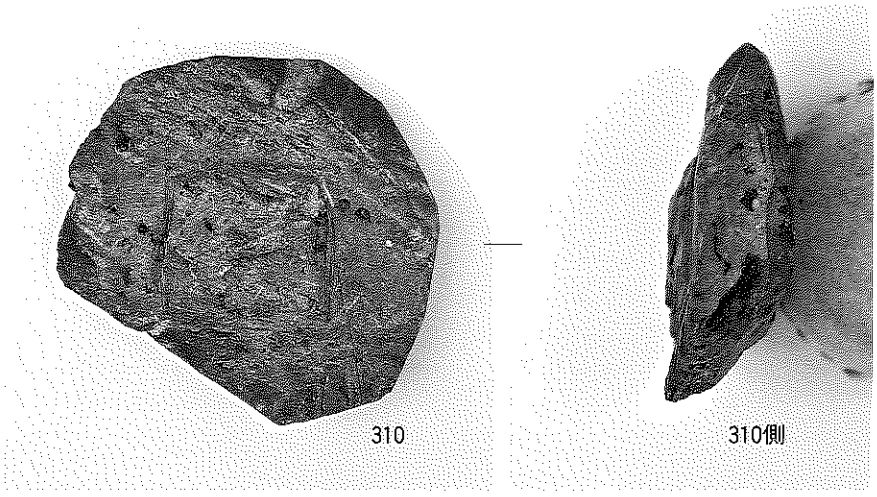
Ⅲ層出土石器・石製品①



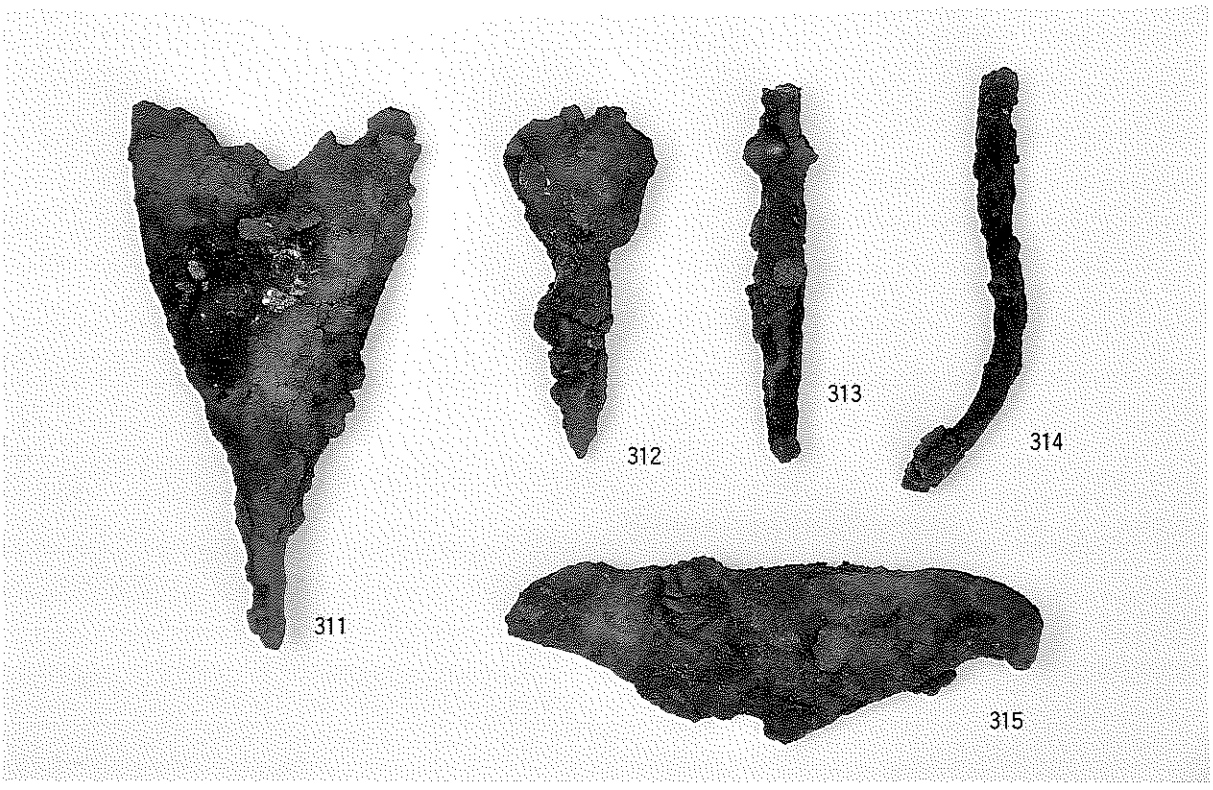




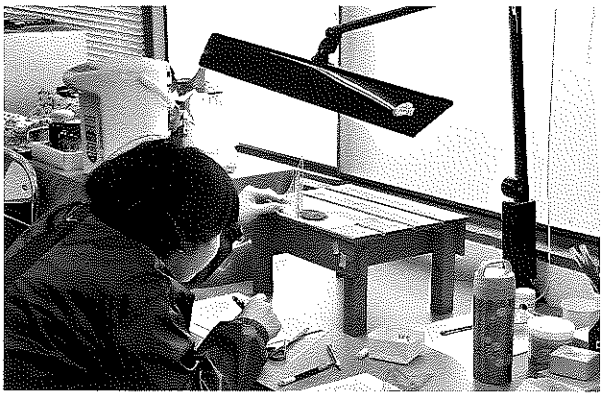
Ⅲ層出土石器・石製品②

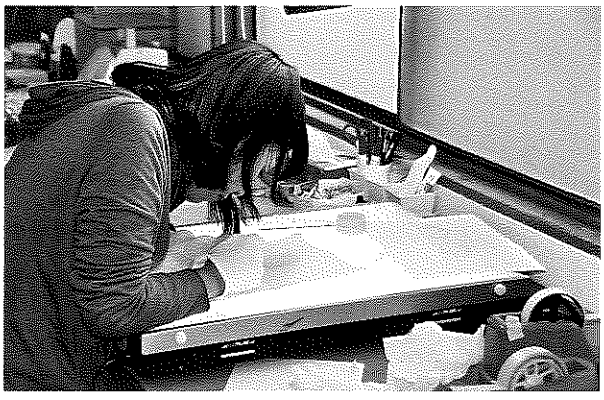


Ⅲ層出土石器・石製品③



Ⅲ層出土鉄製品





整理作業風景

報告書抄録

ふりがな	かめのくびいせき
書名	亀の首遺跡
副書名	布津北部地区県営畑地帯総合整備事業に伴う調査
巻次	
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書
シリーズ番号	第5集
編著者名	伊藤健司
編集機関	南島原市教育委員会
所在地	〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地
発行年月日	西暦2011年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
亀の首遺跡 (かめくびいせき)	長崎県 (ながさきけん) 南島原市 (みなみしまばらし) 布津町 (ふつちょう) 丙3918番地 (へいばんち)	42214	96-53	32° 42′ 23″	130° 19′ 38″	範囲確認 171121 ～ 171129 本調査 200820 ～ 201017	範囲確認 28m² 本調査 約500m²	圃場整備

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
亀の首遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代	土坑 溝状遺構 流路跡 ピット	縄文土器 弥生土器 石器	

南島原市文化財調査報告書　第５集

亀の首遺跡

－布津北部地区県営畑地帯総合整備事業に伴う調査－

2011.3.25

発行　長崎県南島原市教育委員会

〒859-2412　長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷　株式会社　昭和堂